

取扱説明書 - 日本語



ServerView Suite

ServerView Installation Manager

2010年10月版

DIN EN ISO 9001:2008 に準拠した 認証を取得

高い品質とお客様の使いやすさが常に確保されるように、

このマニュアルは、DIN EN ISO 9001:2008

基準の要件に準拠した品質管理システムの規定を

満たすように作成されました。

cognitas. Gesellschaft für Technik-Dokumentation mbH

www.cognitas.de

著作権および商標

Copyright © 1998 – 2010 Fujitsu Technology Solutions.

All rights reserved.

お届けまでの日数は在庫状況によって異なります。技術的修正の権利を有します。

使用されているハードウェア名とソフトウェア名は、各メーカーの商標名および商標です。

Microsoft、Windows、Windows Server、および Hyper V は、米国およびその他の国における

Microsoft Corporation の商標または登録商標です。

Intel および Xeon は、米国 Intel Corporation またはその関連会社の米国およびその他の国にお

ける登録商標または商標です。

目次

1 はじめに	7
1.1 機能範囲の概要	7
1.2 その他のマニュアル	8
1.3 このマニュアルの対象読者と目的	9
1.4 以前のエディションからの変更	9
1.5 ServerView Suite のマニュアル	9
1.6 本書の表記	10
2 概要とクイックステップガイド	11
2.1 Installation Manager(概要)	11
2.1.1 設定と自動インストール	12
2.1.1.1 インストールプロセスの設定とインストールの開始	13
2.1.1.2 設定とコンフィグレーションファイル	13
2.1.1.3 自動インストール	14
2.1.2 ローカルおよびリモートインストール	14
2.1.2.1 ターゲットシステムへのローカルインストール	14
2.1.2.2 リモートインストール	15
2.1.3 「クイックモード」および「ガイドモード」	15
2.1.3.1 「クイックモード」	16
2.1.3.2 「ガイドモード」	16
2.2 クイックステップガイド	17
2.2.1 初回の Windows のローカルインストール	17
2.2.2 Deployment サーバによるリモートインストール	20
3 ローカルインストール	23
3.1 Installation Manager を DVD から起動する	23
3.1.1 標準の PRIMERGY サーバ	23
3.1.2 PRIMERGY ブレードサーバ	24
3.2 Installation Manager を USB スティックから起動する	25
3.2.1 要件	26
3.2.2 USB スティックの構成	26
3.3 ターゲットシステムで Installation Manager を開始する	28
3.4 Installation Manager – 最初のウィンドウ	30
3.5 Installation Manager のグラフィカルユーザインターフェース(GUI)	36
3.6 ローカルインストールの開始	38
4 リモートデプロイメント	43
4.1 リモートインストール(概要)	43
4.1.1 インストールの準備	44
4.1.2 インストールプロセスの進捗	46
4.2 Deployment サーバの準備	48

4.2.1 Deployment サーバ上での DHCP サーバのインストールと設定	50
4.2.2 Installation Manager のインストール	51
4.2.2.1 PXE サーバのインストール	52
4.2.2.2 リモートインストール用のデータパッケージのインストール	55
4.2.2.3 Installation Manager のインストール	58
4.2.3 Linux および VMware ESX システムのリモートインストールへの拡張	63
4.2.4 サービスの確認 (PXE、TFTP、DHCP)	67
4.2.5 TFTP の設定	69
4.2.6 マルチセグメントデプロイメントのルータの設定	70
4.3 リモートリソースサーバの準備	72
4.4 ターゲットシステムをリモートインストール用に準備する	73
4.5 Installation Manager を Deployment サーバで開始する	74
4.5.1 Installation Manager を Windows でローカルに開始する	75
4.5.2 Installation Manager を Web ブラウザでリモートに開始する	76
4.5.3 Installation Manager へようこそ画面	77
4.5.4 Installation Manager のグラフィカルユーザインターフェース (GUI)	78
4.6 リモートインストールの開始	80
4.6.1 ターゲットシステムの選択 (リモートインストールのみ)	81
4.6.2 OS の自動インストールの設定	85
4.6.3 PXE ベースのリモートインストールの開始	90
4.7 PRIMERGY サーバのマルチインストール (マルチデプロイメント)	92
5 ターゲットシステムの設定	95
5.1 Server Configuration Manager	95
5.1.1 ターゲットシステムのシステム動作の設定	95
5.1.1.1 ターゲットシステムのサーバシステムの選択	96
5.1.1.2 Boot ウォッチドッグの設定	97
5.1.1.3 ソフトウェアウォッチドッグの設定	98
5.1.1.4 サーバの電源投入/切断時刻の設定	99
5.1.1.5 停電後の再起動時の動作設定	100
5.1.1.6 自動ファンテストの設定	101
5.1.1.7 ServerView Operations Manager に表示するための UPS デバイスの設定	102
5.1.1.8 資産タグのターゲットシステムへの割り当て	109
5.1.2 iRMC および iRMC S2 の構成	110
5.2 RAID とディスクの構成	110
5.2.1 アレイコントローラの設定	114
5.2.2 ハードディスクの構成	118
5.2.3 パーティションの設定	119
5.2.3.1 パーティションの設定 (Windows)	119

5.2.3.2 パーティションの設定(Linux/VMware ESX)	121
6 Windows の設定とインストールの開始	125
6.1 ユーザーインターフェース	125
6.2 Windows のインストール(標準)	127
6.2.1 ディスクと RAID コントローラの構成(標準)	128
6.2.2 Windows インストールの設定	131
6.2.3 コンフィグレーションのバックアップ/インストールの開始	137
6.3 Windows のインストール(カスタム)	139
6.3.1 Server Configuration Manager	141
6.3.2 RAIDとディスクの構成	142
6.3.3 Windows Server 2003 の設定	143
6.3.3.1 基本設定	143
6.3.3.2 システムの設定	145
6.3.3.3 ネットワークの設定	149
6.3.3.4 ソフトウェアコンポーネント	155
6.3.3.5 サービス	160
6.3.3.6 追加のパラメータ	171
6.3.4 Windows Server 2008 の設定	174
6.3.4.1 インストールイメージの選択	174
6.3.4.2 基本設定	176
6.3.4.3 システムの設定	180
6.3.4.4 ネットワークの設定	182
6.3.4.5 サービス	192
6.3.4.6 追加のパラメータ	196
6.3.5 アプリケーションの選択と設定	197
6.3.6 設定値のバックアップ/インストールの開始	203
7 Linux および VMware ESX の設定とインストールの開始	207
7.1 ユーザーインターフェース	207
7.2 Linux/VMware ESX のインストール(標準)	209
7.2.1 RAIDとディスクの構成(標準)	210
7.2.2 Linux/VMware ESX 設定の指定	213
7.2.3 コンフィグレーションの保存/インストールの開始	216
7.3 Linux のインストール(カスタム)	217
7.3.1 Server Configuration Manager	218
7.3.2 RAIDとディスクの構成	218
7.3.3 Linux/VMware ESX の設定	219
7.3.3.1 基本設定	220
7.3.3.2 パッケージ選択	224
7.3.3.3 X Windows System の設定 (Red Hat および SuSE のみ)	226
7.3.3.4 VMware 仮想ディスクの設定 (VMware ESX のみ)	229
7.3.3.5 VMware ライセンスオプション (VMware ESX のみ)	230
7.3.3.6 Grub ブートローダオプション/マウントオプション	232

7.3.3.7 ネットワークの設定	235
7.3.3.8 セキュリティとファイアウォール (Red Hat および SuSE のみ)	238
7.3.3.9 認証	242
7.3.3.10 Pre Installation Script (Red Hat および SuSE のみ)	246
7.3.3.11 Post Installation Script	247
7.3.4 アプリケーションの選択と設定	249
7.3.5 設定値のバックアップ/インストールの開始	255
8 Installation Monitor - リモートインストールの監視	257
8.1 Installation Monitor のグラフィカルユーザインターフェース	257
8.2 リモートインストールの監視	260
9 Maintenance	267
9.1 PRIMERGY サーバのメンテナンスとコンフィグレーション	267
9.1.1 ServerView RAID	269
9.1.2 Server Configuration Manager	269
9.1.3 iSCSI Boot Wizard(Windows Server 2003 のみ)	271
9.2 Deployment サーバのメンテナンス	272
9.2.1 Multi Deployment(MDP) セットのコンフィグレーションと管理	273
9.2.1.1 新しい MDP セットの設定	277
9.2.1.2 新しいセットの追加/カスタムセットの編集	280
9.2.1.3 PXE ブートの準備と開始	282
9.2.2 任意の必要なブートイメージを PXE から起動する	283
9.2.3 Installation Manager リポジトリのバックアップを作成する/インポートする	289
9.2.3.1 Installation Manager リポジトリのバックアップを作成する	289
9.2.3.2 Installation Manager リポジトリの復元	290
10 Installation Manager Information	291
11 参考情報	293
11.1 PXE プロセス	293
11.2 DHCP サーバの設定	295
11.3 VLAN(仮想ローカルエリアネットワーク)	296
12 エンドユーザライセンス契約書	299

1 はじめに

ServerView Installation Manager(ここでは Installation Manager と略記)は、ServerView Suite の一部です。ServerView Suite の中で、Installation Manager はOS およびその他のユーザ管理およびサーバ管理ソフトウェアを設定し、インストールするコンポーネントです。Installation Manager では、インストール済みのシステムのシステム設定を後で調整することもできます。

ターゲットシステムへの OS のインストールは、そのシステムの DVD ドライブを使用してローカルで開始することも、Deployment サーバを使用して PXE ブートでリモートに開始することもできます。

インストールの準備として、Installation Manager ウィザードが一連の設定メニューを案内し、システム構成および以降の自動 OS インストールに必要なすべてのパラメータを設定します。これらのパラメータはコンフィグレーションファイルに保存して、同じハードウェアアーキテクチャの追加サーバのインストールに使用できます。

1.1 機能範囲の概要

- ターゲットシステムへのローカル OS インストールの場合 : PRIMERGY サーバのハードウェア構成と RAID アレイの自動認識
- 以下のサーバ OS へのインストールサポート : Microsoft Windows Server、Red Hat および SuSE Linux Enterprise バージョン、VMware ESX



コンフィグレーションとインストールは VMware ESX と Linux ディストリビューションの両方で大部分は同じであるため、手順は同じ章に記載されています。

- 同一のハードウェア構成を持つ複数の PRIMERGY サーバに対するコンフィグレーションファイル、および同様の追加インストールプロセスのテンプレートとして使用するコンフィグレーションファイルの作成

- ドライバ、サービスパック、アプリケーションソフトウェアのインストール
 - ❗ インストールできるソフトウェアの種類は、サーバのハードウェア構成によって自動的に決定されます。
- ファイルサーバまたはネットワーク上で共有されている DVD ドライブにある、コンフィグレーションファイルおよびインストールパッケージへのリモートアクセス
- PRIMERGY サーバの PXE ベースのリモートネットワークインストール
- Multi Deployment Platform : Installation Manager プラットホーム(MS Windows PE) にカスタマイズしたプログラムまたはスクリプトを統合し、PXE ブート経路でターゲットシステムのパッケージを起動します。
- 「Generic PXE Boot」機能を使用して、Installation Manager の PXE インフラストラクチャに基づいて、PXE を使用してターゲットシステム上の必要な任意のブートイメージを起動できます。
- Installation Manager リポジトリのバックアップを作成します。
- バックアップを使用して Installation Manager リポジトリを復元します。

1.2 その他のマニュアル

ServerView Suite パンフレット

このパンフレットは PRIMERGY サーバに付属しており、ServerView Suite のコンポーネントの概要の説明と、ウィザードによる OS インストールプロセスのクイックスタートガイドが記載されています。

オンラインヘルプ

コンテキスト依存のオンラインヘルプ機能で、さまざまな設定ウィザードを使用して実行するあらゆる設定プロセスについての詳細情報を提供します。

1.3 このマニュアルの対象読者と目的

このマニュアルは、ハードウェアとソフトウェアについて十分な知識を持つユーザ、システム管理者、サービス担当者を対象としています。Installation Manager の機能範囲と運用コンセプトの概要、および Installation Manager を使用して OS を PRIMERGY サーバにインストールする際に使用できるさまざまなオプションについて説明します。

1.4 以前のエディションからの変更

現在のエディションは、ServerView Installation Manager V10.10.10 について有効で、次のオンラインマニュアルを置き換えます。

『*ServerView Installation Manager*』、2010 年 6 月版



1.5 ServerView Suite のマニュアル

ServerView Suite のマニュアルは、各サーバシステムに付属の ServerView Suite DVD 2 に収録されています。

マニュアルはインターネットからも無料でダウンロードできます。インターネットのオンラインドキュメントは、<http://manuals.ts.fujitsu.com> の「*Industry standard servers*」のリンク先からダウンロードできます。

1.6 本書の表記

以下の表記規定を使用します。

表記	説明
	データの損失やデバイスの損傷の可能性があるリスクを表示します。
	追加関連情報とヒントを表示します。
太字	インターフェース要素の名前を示します。
<code>monospace</code>	パスおよびファイル名など、出力やシステム要素を示します。
monospace semibold (やや太字)	キーボードを使用して入力するテキストを示します。
青字の文字列	関連するトピックへのリンクを示します。
ピンク字の文字列	すでに表示したリンクを示します。
<abc>	実際の値に置き換える必要がある変数を示します。
[abc]	オプション(構文)を示します
[key]	キーボード上のキーを示します。大文字のテキストを入力する場合、[Shift] キーを指定します。たとえば、Aを入力する場合 [SHIFT] + [A] を押します。2つのキーを同時に押す場合は、2つのキーをプラス記号で連結して示します。

画面

いくつかの画面はシステムに依存しているため、表示される詳細はシステムによって異なります。メニューオプションとコマンドには、システム固有の違いがある場合もあります。

2 概要とクイックステップガイド

Installation Manager では、Microsoft Windows Server、Linux Enterprise、VMware ESX OS と、その他のアプリケーションを PRIMERGY サーバにインストールできます。

この章では、Installation Manager の機能範囲と、以下のインストールタイプのクイックステップガイドを示します。

- 「クイックモード」での初回の Windows のローカルインストール
- Deployment サーバによるリモートインストール



このマニュアルでは、「Deployment サーバ」は PXE サーバがインストールされているサーバを指します。

2.1 Installation Manager(概要)

Installation Manager を使用した PRIMERGY サーバのインストールには、以下の特徴があります。

- インストールプロセスと設定プロセスの分離

PRIMERGY サーバへの OS のインストールには、コンフィグレーション段階とインストール段階があります。

1. 設定プロセスでは、ターゲットシステム、RAID システム、ハードディスクの一般システム設定と、インストールする OS の設定を行います。

「ガイドモード」構成モードでは、これらの設定をコンフィグレーションファイルに保存しておき、他の同じサーバのインストールに使用できます。

2. Installation Manager は以前に作成したコンフィグレーションファイルを使用してサーバを構成し、ターゲットシステムに OS を自動実行モードでインストールします。

- ターゲットシステムへのローカルインストールまたはリモートインストール
OS をターゲットシステムにローカルに設定およびインストールすることができます。このためには、PRIMERGY ServerView Suite DVD 1 からターゲットシステムを起動し、ターゲットシステム上でローカルインストールを開始します。または、インストールプロセスを Deployment サーバの Windows Server OS で設定し、ここからネットワークを介してターゲットシステム上で自動インストールプロセスを開始できます(リモートインストール)。
- 「クイックモード」または「ガイドモード」での設定
 - 「クイックモード」は設定パラメータに事前設定値を提供し、妥当性検査によって運用エラーを排除します。さらに、ServerView の使用に必要なすべてのソフトウェアコンポーネントがインストールに含まれています。
 - 「ガイドモード」デプロイメントモードではターゲットシステムを設定でき、インストールするオペレーティングシステムをユーザ固有の要件に合わせてカスタマイズすることができます。

両方のモードで、Installation Manager ウィザードが個々の設定プロセスに関する指示を出します。



Windows Server Core をインストールするには、「ガイドモード」を選択します。

2.1.1 設定と自動インストール

コンフィグレーション段階で、Installation Manager は選択されたすべてのパラメータをコンフィグレーションファイル(*xml* ファイル)に入力します。このファイルは、カスタムコンフィグレーションセッションの終了後、ローカルまたは外部ストレージメディアに保存できます。すべての設定が終了するまで、ターゲットシステムで OS インストールを開始できません。

2.1.1.1 インストールプロセスの設定とインストールの開始

Installation Manager には以下のオプションがあります。

- インストールプロセスを設定し、その直後に OS をターゲットシステムにインストールする
- 「ガイドモード」設定モードを使用している場合、インストールプロセスを設定し、後のステージでオペレーティングシステムをインストールするためにコンフィグレーションファイルを保存します。
- 既存のコンフィグレーションファイルをインポートし、必要に応じて変更して、ターゲットシステムに OS をインストールする
- リモートインストールの場合：以前作成したコンフィグレーションファイルに基づいて、最大 5 台のサーバの複製インストールを実行する

2.1.1.2 設定とコンフィグレーションファイル

自動インストールの準備として、Installation Manager ウィザードを使用して、以下の操作パラメータの値を設定する必要があります。

- ターゲットシステム(リモートインストールの場合のみ)
- インストールする OS
- オプション：サーバ管理に関連するシステム設定(Server Configuration Manager を使用)
- ハードディスク/RAID アレイの構成
- ロジカルドライブ：パーティションとフォーマットの選択
- OS設定
- OS とともにインストールするアプリケーション（選択できるアプリケーションは、インストールする OS によって異なります）

選択したインストール方法(ローカルまたはリモート) に応じて、Installation Manager は自動で値を設定したり、多くの設定にデフォルト値を提供します。

2.1.1.3 自動インストール

インストールプロセスを開始すると、Installation Manager はシステムハードウェアを構成し、コンフィグレーションファイルのパラメータに従って OS のインストールを開始します。必要な再起動を含めてインストールはすべて自動モード(ユーザ操作不要)で実行されます。つまり、ストレージメディア(OS、サービスパック、アプリケーション)を変更する場合、またはハードウェア検出が正しくないか不完全な場合のみ、インストールプロセスでユーザ操作が必要となります。OS のインストール中、Installation Manager は OS に含まれていないシステムコンポーネントのドライバを自動的にインストールします。

ローカルインストールの場合、インストールの進捗をターゲットシステムモニタで追跡できます。

リモートインストールの場合、Installation Manager は進捗状況バーを使用したインストールプロセスの情報、ログ情報、システムメッセージを提示します。



ターゲットシステムのマウス、キーボード、モニタは、リモートインストールには不要です(「ヘッドレスインストール」)。

2.1.2 ローカルおよびリモートインストール

Installation Manager では、以下のインストール方法を使用できます。

- ターゲットシステムへのローカルインストール
- PXE ベースのリモートインストール

2.1.2.1 ターゲットシステムへのローカルインストール

ローカルインストールの場合、ターゲットシステムで ServerView Suite DVD 1 から起動します。Installation Manager がターゲットシステムのハードウェア構成を自動的に検出し(特に RAID とハードディスクシステム)、それに従ってダイアログボックスの内容を表示します。

ローカルインストールの場合、「**クイックモード**」(デフォルト値に基づくインストール)または「**ガイドモード**」(ユーザの要件を満たすために特にカスタマイズされたパラメータに基づくインストール)を選択できます。

2.1.2.2 リモートインストール

OS の PXE ベースのインストールの場合、Installation Manager を Deployment サーバの Windows Server OS 上で独立したアプリケーションとしてインストールし、実行します。ServerView Operations Manager もインストールされる Central Management Station(CMS) は、Deployment サーバとして最適です。リモートインストールでは、PXEサーバとDeploymentサーバおよびDeploymentサーバと同一LANセグメント上のDHCPサーバが必要です。

Installation Manager が Deployment サーバにインストールされている場合は、ローカルワークステーションデスクトップ(Windows または Linux) のブラウザから呼び出して、リモートで開始できます。リモートインストールはガイドモードで設定されます。

ターゲットシステムは PXE ブート用に準備されている必要があります。このために、ターゲットシステムを定義するときにリモートマネジメントコントローラの設定を行うか、またはターゲットシステムを手動で準備します(PXE ブートを BIOS で有効にして、ブートシーケンスの最初に指定します)。Installation Manager は、インストールのために Deployment サーバにアクセスする、ターゲットシステム上の PXE クライアントを起動します。

2.1.3 「クイックモード」および「ガイドモード」

Installation Manager には「クイックモード」と「ガイドモード」の 2 つのモードがあります。



Windows Server Core をインストールするには、「ガイドモード」を選択します。

2.1.3.1 「クイックモード」

「クイックモード」は、ターゲットシステムでのローカルインストールでのみサポートされます。これはデフォルト設定です。

このモードで、Installation Manager はコンフィグレーションパラメータに値を提供し、妥当性検査によって運用エラーを排除します。また、ターゲットシステムを ServerView Operations Manager で監視するために必要なすべてのソフトウェアコンポーネントを自動的にインストールします。

「クイックモード」デプロイメントモードには、以下の手順が含まれます。

1. インストールする OS を選択します。
2. OS の自動インストールを設定します。
3. インストールを開始します。

2.1.3.2 「ガイドモード」

「ガイドモード」では、ターゲットシステムに直接、または Windows Server オペレーティングシステムで Deployment サーバに、ターゲットシステムハードウェアを構成できます。


ターゲットシステムでコンフィグレーションを実行する場合(ローカルインストール)、Installation Manager はターゲットシステムのハードウェア構成を自動的に検出し、それに従ってコンフィグレーションダイアログボックスを調整します。


Installation Manager(「次へ」ボタンをクリック)が提供するコンフィグレーション手順のシーケンスに従うか、またはツリー構造(ツリービュー)を使用してユーザーがシーケンスを選択することができます。Installation Manager から、大半のコンフィグレーションパラメータのデフォルト値が設定されます。

2.2 クイックステップガイド

ここではWindowsに対してクイックモードでのローカルインストールと、リモートインストールを説明します。


2.2.1 初回の Windows のローカルインストール

 対応する Quick Installation Guide は、サーバに付属の『*Server Installation with ServerView Installation Manager*』というブックレットに収録されています。詳細は、[23 ページの ローカルインストール](#) および [127 ページの Windows のインストール\(標準\)](#) およびオンラインヘルプを参照してください。

 ガイドモードでのローカルインストールと、下記の手順の違いは、ガイドモードを選択すると、より広範な設定オプションを使用できるということだけです([139 ページの Windows のインストール\(カスタム\)](#)の章を参照)。

ターゲットシステムで以下の手順に従います。

1. システムを起動するときに、DVD ドライブが最初にアクセスされることを確認してください。詳細は、[23 ページの Installation Manager を DVD から起動する](#)を参照してください。

 自動インストール用設定パラメータのバックアップを作成するために USB スティックを使用する場合は、USB スティックをサーバの USB ポートに接続してからサーバを起動してください。

2. サーバの電源を入れます。
3. ServerView Suite DVD 1 をドライブに挿入します。

Installation Manager がターゲットシステムで起動します。ブートプロセスが完了すると、Installation Manager の最初のウィンドウが表示されます。

4. この最初のウィンドウで、必要なインターフェース言語と接続するキーボードの国とモデルを選択します。

5. 設定値をローカルドライブに保存する場合：

- 「**コンフィグレーションファイルの保存先**」で「**ローカルドライブ(フロッピー/USB メモリ)メディアをセットしてください**」オプションを選択し、表示されるリストから該当するドライブ(USB ストレージメディアまたはフロッピー)を選択します。

選択したストレージメディアが書き込み可能であることを確認してください。

6. インストールメディアに共有ネットワークドライブ(ネットワーク共有)経由でアクセスする場合、または設定値をネットワーク共有に保存する場合：

- 「**リモートインストールを行う**」を選択します。

構成に応じて、一時 IP アドレスを DHCP 経由で取得することも、現在の Installation Manager セッションに対して IPv4 または IPv6 アドレスを手動で設定することもできます。

- 現在の Installation Manager セッションに対して一時 IP アドレスを設定します。

構成に応じて、一時 IP アドレスを DHCP 経由で取得することも、IPv4 または IPv6 アドレスを手動で設定することもできます。

7. その他のデフォルト設定を変更せずに「**次へ**」をクリックします。

8. 「**deployment**」をクリックします。

「**Installation Manager Deployment Process Selection**」画面が表示されます。


9. 「**クイックモード**」オプションを選択して「**次へ**」をクリックします。

「**オペレーティングシステムの自動インストール**」画面が表示されます。

10. 該当する Windows オペレーティングシステムを選択して「**次へ**」をクリックします。

「**RAID とディスクの構成**」ステップが表示されるので、ハードディスクドライブと RAID コントローラを設定します。

11. ブートメディアを定義します。ハードディスクまたは既存の RAID アレイを選択するか、または新しい RAID アレイを定義できます。個々のハードディスクを選択することもできます。

 以下の点に注意してください。

新しい RAID アレイを定義すると、選択した RAID コントローラ上の既存のアレイは削除されます。

12. 「**次へ**」をクリックします。


Windows の自動インストールを設定するダイアログボックスが開きます。

13. ユーザおよびコンピュータの名前、Administrator パスワード、タイムゾーン、IP アドレスと SNMP 設定などの、Windows インストールの詳細を指定します。

14. 「**次へ**」をクリックします。

設定したインストールパラメータの概要が表示されます。


15. エントリを確認します。

 必要に応じて「**戻る**」ボタンで個々の設定ステップに戻って変更を行います。

コンフィグレーションが完了します。

16. 挿入したメディアはそのまま「**インストール開始**」をクリックします。

設定に従って、インストールが自動モードで実行されます。

 起動ハードディスクまたは選択した RAID アレイ上のすべてのデータは、インストール中に失われます。

インストールプロセス中、データメディア(OS、および必要に応じてサービスバックおよびその他のアプリケーション用)の変更時にのみ操作が必要です。



プロンプトが表示されるまで、DVD または CD を取り出さないでください。

インストールが完了すると、サーバを使用できるようになります。

2.2.2 Deployment サーバによるリモートインストール

リモートインストールを行う前に、Deployment サーバとターゲットサーバで一定の準備が必要です。

Deployment サーバをリモートインストール用に準備する

以下の手順に従います。

1. Installation Manager を Deployment サーバに独立したアプリケーションとしてインストールします。リモートインストール用の PXE サービスとデータパッケージもインストールします([51 ページの Installation Manager のインストールの章](#)を参照)。Deployment サーバで Installation Manager を開始します([74 ページの Installation Manager を Deployment サーバで開始するの章](#)を参照)。
2. インストールを開始します([80 ページのリモートインストールの開始の章](#)を参照)。
3. ターゲットシステム設定を選択します([81 ページのターゲットシステムの選択 \(リモートインストールのみ\) の章](#)を参照)。
4. 該当する OS を選択します([85 ページの OS の自動インストールの設定の章](#)を参照)。
5. 選択した OS に対して、以下の順番でコンフィグレーション手順に従います。
 - Server Management 設定を行います(オプション、[95 ページの Server Configuration Manager](#)の章を参照)。
 - ハードディスクと RAID コントローラを構成します([110 ページの RAID とディスクの構成の章](#)を参照)。
 - OS のパラメータを設定します。
 - インストールするアプリケーションを選択します。



該当する設定手順の詳細は、[125 ページの Windows の設定とインストールの開始](#) および [207 ページの Linux および VMware ESX の設定とインストールの開始](#)を参照してください。

6. 名前を付けてコンフィグレーションファイルを保存します。名前を指定しないと、Installation Manager はデフォルト名の *serstartbatch.xml* を使用します。

ターゲットシステムをリモートインストール用に準備する

以下の手順に従います。

ターゲットシステムの BIOS セットアップで、以下の手順に従います。

1. PXE boot モードを有効にします(「Boot Sequence」-「Boot from a network device」)。
2. ブートシーケンスの一番最初に「PXE boot」を配置します。



ターゲットシステムで設定を行う場合([81 ページのターゲットシステムの選択 \(リモートインストールのみ\)](#) を参照)、ターゲットシステムにリモート管理コンポーネント(BMC/iRMC/iRMC S2/ マネジメントブレード) がある場合に PXE ブートモードを有効にすることを指定できます(ターゲットシステムの再起動あり、または再起動なし)。

リモートインストールの開始

以下の手順に従います。

1. ターゲットシステムの電源を入れます。



ターゲットシステムで設定を行う場合([81 ページの ターゲットシステムの選択 \(リモートインストールのみ\)](#))、ターゲットシステムにリモート管理コンポーネント(BMC/iRMC/iRMC S2/マネジメントブレード)がある場合に、PXE ブートをインストールの開始後に自動的に開始することを指定できます。

2. Deployment サーバでリモートインストールを開始します([203 ページの 設定値のバックアップ/インストールの開始](#) および [255 ページの 設定値のバックアップ/インストールの開始](#)の章を参照)。

Installation Manager がターゲットシステムで起動します。自動インストールがターゲットハードウェアで直接開始されます。

「[システムの設定](#)」ダイアログボックス([145 ページの システムの設定](#) および [180 ページの システムの設定](#)を参照) および「[基本設定](#)」ダイアログボックスの Linux/VMware ESX の設定([220 ページの 基本設定](#)を参照) で Windows の設定を行うと、オペレーティングシステム CD/DVD、サービスパック、およびアプリケーションパッケージが設定したネットワークドライブ経由で自動的に接続されます。必須のインストールデータがターゲットシステムのインストールディレクトリにコピーされます。

3 ローカルインストール

ローカルインストールでは、ターゲットシステム上でローカルに OS のインストールを設定し、開始できます。このためには、ServerView Suite DVD 1 または適切に構成した USB スティックから Installation Manager をターゲットシステムに起動する必要があります。

 USB スティックから起動できるようにするには、スティックを構成しておく必要があります([26 ページの USB スティックの構成](#)の章を参照)。

ローカルインストールを行うには、ターゲットシステムで以下の手順に従います。

1. ブートドライブを定義します。
 - DVD から起動する場合 : DVD ドライブをブートドライブとして定義します。
 - USB スティックから起動する場合 : USB ドライブをブートドライブとして定義します。
2. ServerView Suite DVD 1 または USB スティックからターゲットシステムを起動します。

ブート処理によって Installation Manager がターゲットシステム上で自動的に開始されます。
3. インストールを開始します。

3.1 Installation Manager を DVD から起動する

ターゲットシステムの DVD ドライブをブートドライブとして定義して、ターゲットシステムが PRIMERGY ServerView Suite DVD 1 から起動できるようにする必要があります。

3.1.1 標準の PRIMERGY サーバ

標準の PRIMERGY サーバ製品では、DVD ドライブは BIOS セットアップでブートドライブとして構成されています。この構成を変更した場合は、インストール前に以下の調整が必要になります。

IDE/SATA バスの DVD ドライブ：

- システムボードの BIOS で該当する IDE チャンネルが有効であること、システム起動時に DVD ドライブが最初にアクセスされるドライブであることを確認してください(**ブートシーケンス**については、BIOS セットアップのマニュアルまたはサーバのオペレーティングマニュアルを参照してください。マニュアルは両方とも ServerView Suite DVD 2 に収録されています)。

SCSI/SAS バスの DVD ドライブ：

- システムボード BIOS で DVD ドライブを最初のブートドライブとして定義します。コントローラの BIOS で、DVD ドライブの開始プロパティも制御できます(コントローラのオペレーティングマニュアルを参照)。

3.1.2 PRIMERGY ブレードサーバ

以下のステップは、サーバブレードを DVD から起動するために必要です。

1. USB ポートを使用して、サーバブレードを DVD とフロッピーディスクドライブに接続します。
2. キーボード、マウス、モニタをブレードサーバの背面に接続し、KVM スイッチを使用して対応するサーバブレードに配線します。
3. DVD ドライブをブートドライブとして定義します。



必要な DVD ドライブとフロッピーディスクドライブは、オプションのアクセサリとして入手できます。

DVD ドライブと USB ストレージメディアをサーバブレードに接続する

以下の手順に従います。

- 付属のブレイクアウトケーブルを対応するサーバブレードの USB/VGA 前面コネクタに接続します。
- ブレイクアウトケーブルの USB ポートに DVD ドライブを接続し、必要に応じて USB ストレージメディア(フロッピーディスクドライブまたは USB スティック)を接続します。
- 接続したデバイスに電源が入らない、または USB ポートからの給電が不十分な場合は、両方のデバイスを外部電源に接続します。
- ブレードサーバと該当するサーバブレードの電源を入れます。

モニタ、キーボード、マウスを PRIMERGY ブレードサーバに接続する

以下の手順に従います。

- 紫色のキーボードコネクタと緑色のマウスコネクタをブレードサーバ背面の PS/2 ポートに差し込みます。
- モニタのデータケーブルをブレードサーバ背面の VGA コネクタ(3、青)に接続し、モニタの電源ケーブルをアース付きコンセントに接続します。
- サーバブレードのフロントパネルにある KVM スイッチ(1)を押し、キーボード、マウス、モニタを接続します。



KVM スイッチの位置については、お使いのサーバブレードのオペレーティングマニュアルを参照してください。

DVD ドライブをブートドライブとして定義する

以下の手順に従います。

- 画面の指示に従って [F2] を押してサーバブレードの BIOS セットアップを開きます。
- Phoenix BIOS Setup Utility で「Boot」メニューを選択して「Boot from CD-ROM Drive」オプションを有効にします。
- キーボードの [Esc] を押して「Exit」サブメニューの「Exit Saving Changes」オプションを選択します。

3.2 Installation Manager を USB スティックから起動する

ServerView Suite を DVD から起動する代わりに、USB スティックからも起動できます。USB スティックから起動できるようにするには、スティック上にブートブロックを構成しておく必要があります。その後、ServerView Suite DVD 1 の全コンテンツを USB スティックにコピーします。これで、USB から起動可能な任意のサーバの USB スティックから、Installation Manager を起動できるようになります。

3.2.1 要件

USB スティックを起動可能にするには、以下の要件を満たす必要があります。

- Vista または Windows 2008 OS がインストールされている PC
- 選択した PC での管理者権限
- 使用する USB スティックは、以下の要件を満たす必要があります。
 - 8 GB 以上のストレージ容量
 - USB V2.0
 - 起動可能であること

3.2.2 USB スティックの構成



USB スティックを構成するには、Administrator としてログオンしているか、または管理者権限を持っている必要があります。

1. まず、現在の ServerView Suite DVD 1 の全コンテンツを、選択した PC にコピーします。
2. USB スティックをこの PC に接続します。
3. USB スティックが PC の BIOS でブートデバイスとして指定されていることを確認します。

USB スティックが認識されない場合は、BIOS セットアップで USB デバイスのサポートが有効になっていることを確認します。USB スティックが認識されない場合は、コンピュータを再起動してください。これで、USB スティックは BIOS で起動可能なデバイスとしてリストされるはずです。

USB スティックがまだ認識されない場合は、スティックが故障しているか、または PC の BIOS システムの設計が USB デバイスに対応していません。後者の場合は、上記の要件を満たす別の PC が必要になります。

4. 「スタート」-「ファイル名を指定して実行」をクリックします。

コマンドプロンプトが表示されます。

5. 「cmd.exe」と入力して「OK」をクリックします。

コマンドウィンドウが表示されます。

6. コマンドウィンドウで、ServerView Suite DVD 1 の内容をコピーしたディレクトリに移動します。

7. コマンドラインに **MkUSB.bat** と入力して、ENTER を押します。

インストールツールが起動します。ユーザインターフェースが表示され、入力待ちになります。

```

*****
ServerView Installation Manager (SVIM)                07.07.2009
MkUSB.bat      v2.1.5

Prepares a USB stick as boot media for SVIM x32/x64 .
Supports WinPE2005 and WinPE 2.1 based SVIM boot platforms.
Copyright (c) 2006-2008 Fujitsu Siemens Computers GmbH.
Copyright (c) 2009 Fujitsu Technology Solutions GmbH.
All rights reserved.
*****

***** Boot Preparation Selection Menu *****

Preparing the UFD as a bootable device:
(SVIM = ServerView Installation Manager)

1 Using MS tool DiskPart V6.0 based (=> NTFS)
  Requires WinPE >= 2.1 <=> SVIM >= V7.804 .
  Recommended for Vista/W2k8 platforms only.
  You need to be local administrator or run this script in admin mode of
  CMD-Window (by using the right mouse button on a cmd.exe link)

2 Legacy support only:
  Using MS UFD formatting tool formatUFD.exe from tool CD of W2k3 OPK .
  WinPE2005 only (<=> SVIM < V7.804)
  MS Windows Server 2003 OPK required. Supports UFD devices > 2GB.

3 Legacy support only:
  PEbuilder method using native formatting tools format.exe (FAT16) + MKBT.exe
  Where to find mkbt.exe refer to MkUSB.Readme.pdf on the SVS DVD 1.
  MKbt works for WinPE2005 and for UFD devices < 4GB only !

4 Skip boot preparation and continue with SVIM file transfer to UFD.
  An empty volume is advisable but a format is offered optionally.

5 Simply list the current disk and volume configuration.
  Created by diskpart - XP/W2k3 based diskpart does not support UFD disk#.

X or 0 Exit
? Show Help Page

After selection of 1-4 all data on the USB drive will be erased/overwritten !
Please select UFD preparation method:

```

図 1: MkUSB.bat – 機能の選択

8. 数字「1」を入力して、ENTER を押します。

PS で使用できるドライブ(ボリューム) とディスクの概要が表示されます。

```
***** Device Boot Preparation *****
Autodetection of a free driveletter...
Used Target drive letter: "I:"
Loading Disk
'Disk' is not recognized as an internal or external command,
operable program or batch file.

Microsoft DiskPart version 6.0.6002
Copyright (C) 1999-2007 Microsoft Corporation.
On computer: TX30DS5-167

Volume ### Ltr Label      Fs      Type        Size      Status      Info
-----
Volume 0      E              NTFS     DVD-ROM      0 B        No Media
Volume 1      D system    NTFS     Partition   1600 MB    Healthy    System
Volume 2      C system    NTFS     Partition   265 GB    Healthy    Boot
Volume 3      F New Volume NTFS     Partition   1496 MB    Healthy
Volume 4      U SUIMAUSB   NTFS     Removable    15 GB     Healthy

Disk ###  Status      Size      Free      Dyn  Gpt
-----
Disk 0     Online     272 GB     0 B       0    R
Disk 1     Online     15 GB      0 B       0    R

Hint: UFD devices are supported by diskpart only on Vista/V2k8 platforms.
(Use method 2 or 3 in case of XP/V2k3 and in case of WinPE2005).

Please select the logical disk number of your UFD device ['x' to cancel]: 1
```

図 2: MkUSB.bat - 例: デバイス ID の特定と入力

9. ドライブのリストから USB スティック(Type = Removable) を特定します。
ストレージ容量(Size) を使用して、ドライブリスト内の USB スティックに対応するデバイス ID を見つけられます。
10. デバイス ID(論理ディスク番号) を入力し、ENTER を押します。この例では「1」です。

ブートブロックが USB スティックに書き込まれ、ServerView Suite DVD の全コンテンツが PC のハードディスクから USB スティックにコピーされます。

この操作には、USB スティックの最大書き込み速度に応じて、数分から最大数時間かかることがあります。

これで、USB から起動可能な任意のサーバで、この USB スティックから Installation Manager を起動できるようになります。

3.3 ターゲットシステムで Installation Manager を開始する

ServerView Suite DVD 1 からの起動

ターゲットシステムを ServerView Suite DVD 1 から起動するには、以下の手順に従います。

1. ターゲットシステムを開始するときに、DVD ドライブにアクセスしていることを確認します。
2. ServerView Suite DVD 1 をブートドライブとして定義したドライブに挿入します。
3. サーバの電源を入れます。

ブート時に Installation Manager がターゲットシステム上で自動的に開始します。

準備した USB スティックからの起動



ステータス情報を保存するために起動用に準備した USB スティックを使用することもできます。ステータス情報は USB スティックに追加されません。

ターゲットシステムを USB スティックから起動するには、以下の手順に従います。

1. USB スティックをブートドライブとして定義した USB ポートに接続します。
2. ターゲットシステムの BIOS で、USB スティックから自動的に起動するように設定されていることを確認します。
3. サーバの電源を入れます。

USB スティックが認識されない場合は、BIOS セットアップで USB デバイスのサポートが有効になっていることを確認します。USB スティックが認識されない場合は、コンピュータを再起動してください。これで、USB スティックは BIOS で起動可能なデバイスとしてリストされるはずです。

USB スティックがまだ認識されない場合は、スティックが起動不可能な USB ポートに接続されているか、または PC の BIOS システムの設計が USB デバイスに対応していません。

後者の場合は、Installation Manager を DVD から開始する必要があります。

ブート時に Installation Manager がターゲットシステム上で自動的に開始します。

3.4 Installation Manager – 最初のウィンドウ

ブートした後、Installation Manager から以下のウィンドウが開き、GUI 言語を選択できます。



図 3: ServerView Installation Manager – GUI 言語の選択

- 対応するボタンをクリックして、目的の GUI 言語を選択します。
Installation Manager の最初のウィンドウが表示されます。

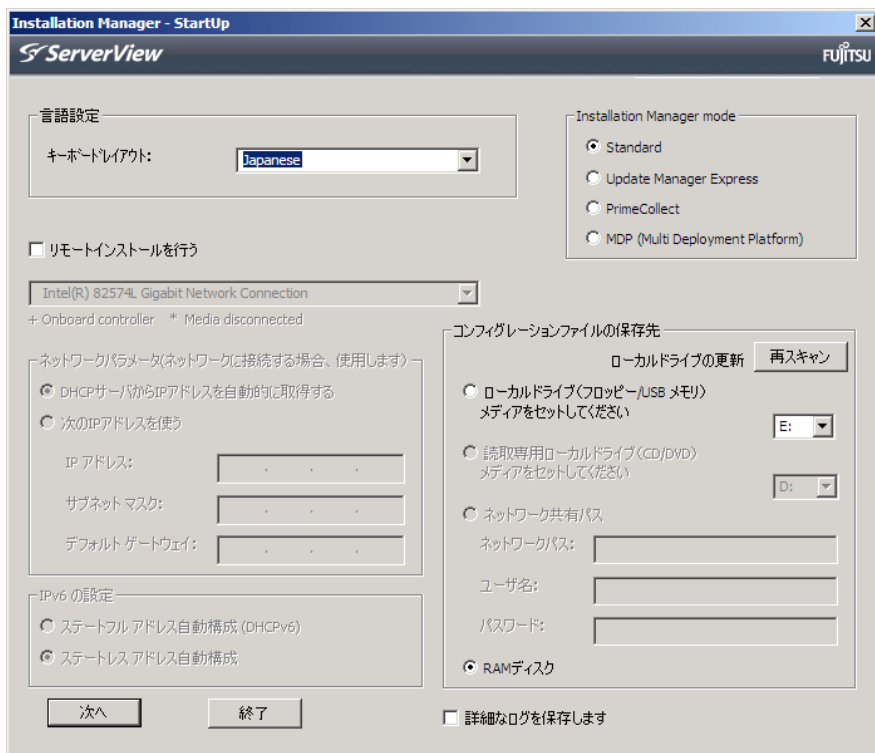


図 4: ServerView Installation Manager – 最初のウィンドウ

起動すると、Installation Manager のデフォルトでは、「**Installation Manager mode**」の下に「**Standard**」モードオプションが有効になります。



最初のウィンドウから、以下のプログラムを開始することもできます。

Update Manager Express

PRIMERGY システムに最新のファームウェアソフトウェアをインストールします。

PrimeCollect

このプログラムは、サービス担当者向けの診断データを収集します。PrimeCollect の詳細は、ServerView Suite DVD 2 に収録されています。

MDP(Multi Deployment Platform)

このモードでは、Installation Manager プラットフォームをマルチデプロイメントプラットフォームとして使用し、顧客固有の MDP エージェントを開始できます。詳細は、ServerView Suite DVD 2 のホワイトペーパーを参照してください。

これらの製品の詳細は、ServerView Suite DVD 2 に収録されています。

Installation Manager の設定

最初のウィンドウから、以下の設定を指定できます。

言語設定

デフォルトで、キーボードレイアウトは、コンピュータに選択した国のモデルに設定されます。

必要に応じて、別の国のモデルをキーボードレイアウトに選択できます。

リモートインストールを行う

このオプションは、準備したコンフィグレーションファイルを格納したメディア、またはネットワーク経由でアクセスされるインストールメディアを使用している場合に選択する必要があります。

構成に応じて、一時 IP アドレスを DHCP 経由で取得することも、現在の Installation Manager セッションに対して IPv4 または IPv6 アドレスを手動で設定することもできます。

ネットワーク/パラメータ

これらの設定を使用して、現在の Installation Manager セッションに対する IPv4 アドレスを設定します。

DHCP サーバから IP アドレスを自動的に取得する

このオプションは、ネットワークの DHCP サーバから動的に IPv4 アドレスを取得します。



ネットワークで DHCP サーバを使用できない場合は「**DHCP サーバから IP アドレスを自動的に取得する**」オプションは選択しないでください。

この DHCP のオプションを有効にしても DHCP サーバが使用できない場合、サーバは IP アドレスを取得できないため再起動しません。

次の IP アドレスを使う

IP アドレスを DHCP サーバから取得できない場合、ここで固定 IPv4 アドレスを定義します。

IP アドレス

現在のセッションの IPv4 アドレスです。

サブネットマスク

サブネットマスク

デフォルトゲートウェイ

デフォルトゲートウェイ

IPv6 の設定

現在の Installation Manager セッションに対して IPv6 アドレスを設定します。

ステートフル アドレス自動構成(DHCPv6)

このオプションは、ネットワークの DHCPv6 サーバから動的に(ステートフル) IPv6 アドレスを取得します。

ステートレス アドレス自動構成

自動構成を使用して(ステートレス) IPv6 アドレスを取得します。

コンフィグレーションファイルの保存先

対応するデータバックアップメディアを選択します。

ローカルドライブ(フロッピー/USB メモリ)メディアをセットしてください

メディア(フロッピーディスクまたは USB スティック)を挿入し、対応するドライブ文字を選択します。



バックアップメディアは書き込み保護されません。

システムを開始する前に、USB スティックを USB ポートに差し込んでおく必要があります。

差し込まなかった場合、コンフィグレーションファイルを保存するには、USB スティックを挿入して ServerView Suite DVD 1 からリブートを開始します。

ネットワーク共有パス

必要な共有設定を定義し、フォルダ、アカウント、パスワードを入力します。

RAM ディスク

セッション終了後にコンフィグレーションデータが不要な場合は、このオプションを選択します。



このオプションを選択した場合、セッションの終了時にコンフィグレーションデータは失われ、復元できないことに注意してください。

操作ボタン

最初のウィンドウには、以下のボタンがあります。

再スキャン

ローカルドライブのリストを更新します。

Installation Manager が起動された後に USB デバイスを PC に接続した場合は、この機能を使用します。

次へ

次のウィンドウに進みます。

終了

Installation Manager を閉じ、セッションを終了します。

- 「次へ」をクリックします。

このダイアログボックスで指定された設定が有効になり、Installation Manager のユーザインターフェースが表示されます。

3.5 Installation Manager のグラフィカルユーザインターフェース(GUI)

Installation Manager を DVD または USB スティックから起動した後、Installation Manager GUI のスタートページが表示されます。

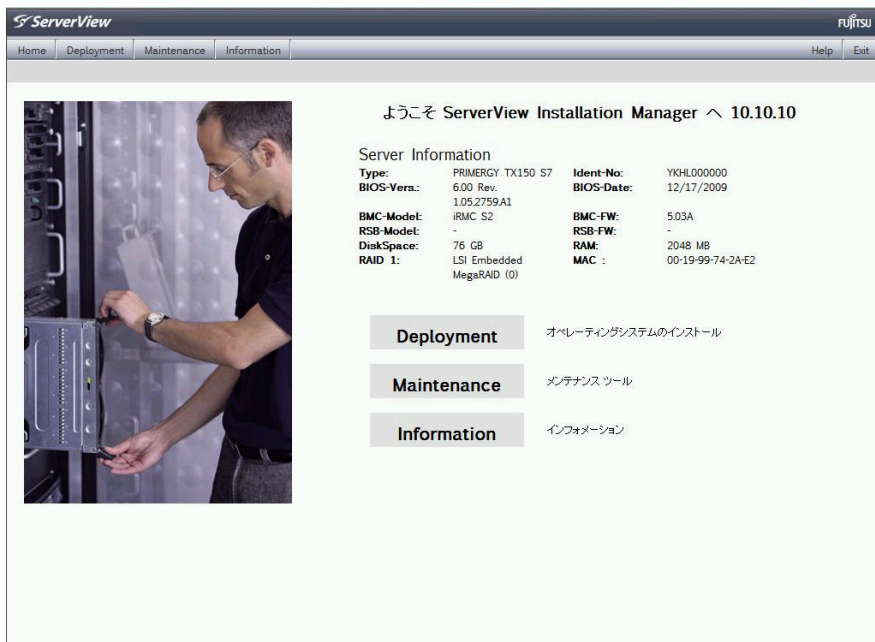


図 5: ServerView Installation Manager – グラフィカルユーザインターフェース(GUI)

Installation Manager GUI は以下のエリアで構成されています。

- メニューバー
- 表示エリア

メニューバー

メニューバーから、以下の機能を実行できます。

Home

Installation Manager GUI の「ようこそ」画面を表示します。

Deployment

システムコンフィグレーションと OS のインストールを開始します。

Maintenance

メンテナンスプログラムを選択できます。このプログラムを使用して、OS インストールとは別に、サーバ上でコンフィグレーションおよびメンテナンスタスクを実行できます。

Exit

サーバのリブートまたはシャットダウンのためのオプションがあります。



サーバをシャットダウンまたはリブートする前に、該当するドライブからリムーバブルメディアをすべて取り出してください。

Reboot

サーバをリブートします。

Shutdown

サーバをシャットダウンします。

Information

PRIMERGY サーバとインストールについての情報を表示します。

Help

オンラインヘルプを起動します。

表示エリア

表示エリアには、現在選択されている機能に関連するダイアログステップが表示されます。

Installation Manager GUI の最初のページでは、表示エリアには以下の要素が表示されます。

- Installation Manager バージョンが画面上部に表示されます。
- PRIMERGY サーバのシステムデータが「**Server Information**」の下に表示されます。
- 「**Deployment**」、「**Maintenance**」、「**Information**」の各リンクは、メニューバーの対応する機能ボタンから開始できるものと同じ機能を開始できます(上のメニューバーを参照)。

3.6 ローカルインストールの開始

以下の手順に従って、ターゲットシステムでローカルインストールを開始します。

1. Installation Manager GUI の「**MAC**」フィールドに([36 ページの Installation Manager のグラフィカルユーザインターフェース\(GUI\)](#) を参照)、ネットワークカードの MAC アドレスが表示されます。
2. メイン画面の「Deployment」ボタンまたはメニューバーの「Deployment」オプションをクリックします。

「**Installation Manager Deployment Process Selection**」画面が表示されます。

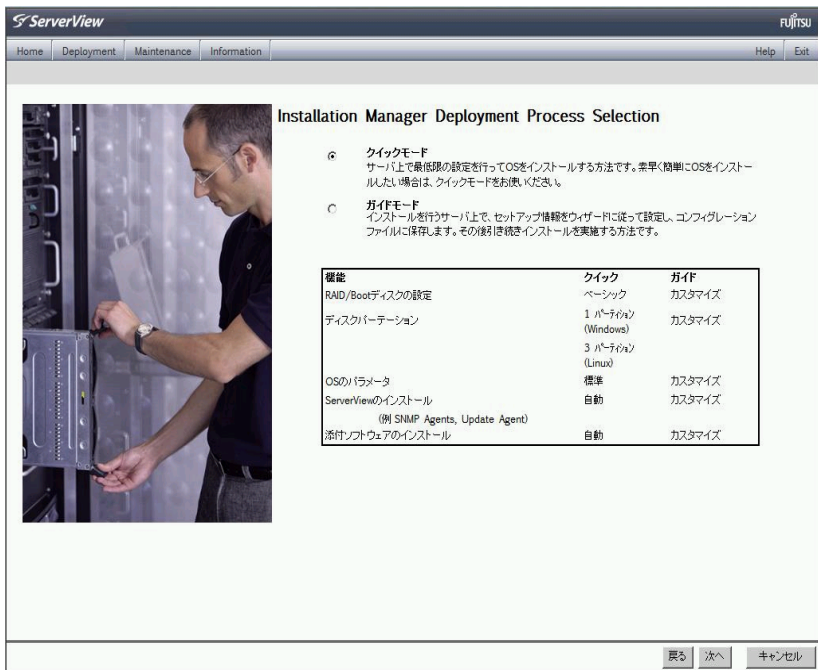


図 6: Installation Manager Deployment Process Selection

3. デフォルト値(クイックモード)とユーザ固有の要件を満たす値(ガイドモード)のどちらで設定やインストールを実行するかによって、「クイックモード」または「ガイドモード」を選択します。

次の表に、「クイックモード」および「ガイドモード」インストールモードで使用可能な各種設定オプションを示します。

設定内容	クイックモード	ガイドモード
Server Configuration Manager の BIOS/BMC 設定	－	オプション
RAID/Boot ディスク設定	ベーシック	カスタマイズ
ディスクパーティション	1 パーティション	カスタマイズ
OS のパラメータ	ベーシック	カスタマイズ

3 ローカルインストール

設定内容	クイックモード	ガイドモード
ServerView 製品のインストール(SNMP エージェント、Update エージェントなど)	自動	オプション
添付ソフトウェアのインストール	－	オプション

4. 「次へ」をクリックします。

最初のウィンドウに、自動インストールプロセスの設定が表示されます。

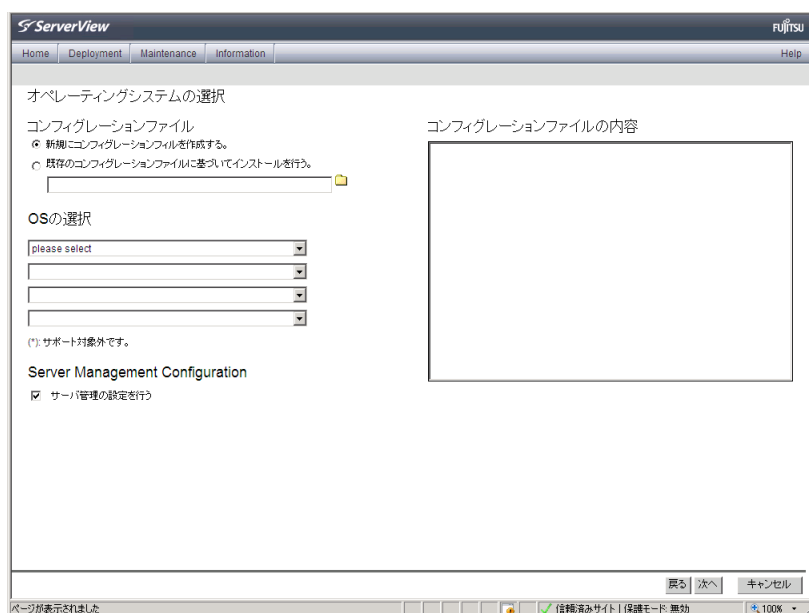


図 7: 最初のウィンドウ : OS の自動インストールの設定

コンフィグレーションファイル

新しいコンフィグレーションファイルを作成するか、既存のファイルからの値を使用するかを指定します。

新規にコンフィグレーションファイルを作成する

新規にコンフィグレーションファイルを作成します。

既存のコンフィグレーションファイルに基づいてインストールを行う「ガイドモード」では、コンフィグレーションファイルを選択できます。このファイルの詳細がウィンドウの右側の**コンフィグレーションファイルの内容**に表示されます。

フォルダアイコンをクリックして、既存のコンフィグレーションファイルを選択します。ダイアログボックスが開き、ローカルバックアップメディアから適切なコンフィグレーションファイルを選択できます。

Installation Manager は、現在のセッションのコンフィグレーションファイルの内容をコンフィグレーションのデフォルト値として提供します。これらの値を必要に応じて使用し、セッション終了時に同じコンフィグレーションファイルまたは新しいコンフィグレーションファイルに保存できます。

コンフィグレーションファイルの内容

コンフィグレーションファイルの内容(存在する場合) がここに表示されます。

OS の選択

インストールする OS のバージョン、エディション、サービスパックを選択します。

Server Management Configuration

サーバ管理の設定を行う

このオプションを選択すると、Server Configuration Manager がインストールプロセスのカスタムコンフィギュレーションの一部として呼び出されます。Server Configuration Manager では、ターゲットシステムにサーバ固有のシステム設定を設定できます。

このオプションは、「クイックモード」インストールモードでは使用できません。

5. 「次へ」をクリックします。

自動インストールプロセスを設定して開始するウィザードが開始します。

6. Windows OS をインストールするには、[125 ページの Windows の設定とインストールの開始](#)を参照してください。

- Windows の標準インストール。
- Windows のカスタムインストール。




Windows Server Core をインストールするには、「ガイドモード」を選択します。

7. Linux OS または VMware ESX をインストールするには、[207 ページの Linux および VMware ESX の設定とインストールの開始](#)を参照してください。

- Linux/VMware ESX の標準インストール。
- Linux/VMware ESX のカスタムインストール。

4 リモートデプロイメント

OS のリモートインストールの場合、Deployment サーバに Installation Manager をインストールして起動します。

 このマニュアルでは、「Deployment サーバ」は PXE サーバがインストールされているサーバを指します。



この章では、以下のトピックについて説明します。

- リモートインストール(概要)
- Deployment サーバをリモートインストール用に準備する
 - DHCP サーバのインストール(LAN セグメント内に存在しない場合)
 - PXE サーバのインストール(ない場合)
 - リモートインストール用のデータパッケージのインストール
 - Installation Manager のインストール
- ターゲットシステムを PXE ブートに準備する
- リモートインストールの開始
- PRIMERGY サーバのマルチインストール

4.1 リモートインストール(概要)

リモートインストールによって、Deployment サーバからネットワーク経由で PRIMERGY サーバ上に OS をインストールできます。このため、Installation Manager は Preboot eXecution Environment(PXE) メカニズムを使用してターゲットシステム上で起動され、リモートで実行されます。


4.1.1 インストールの準備

-  ターゲットシステムの LAN セグメントでは、PXE ブートに DHCP サーバが必要です。
-  ブレードサーバシステムの場合(PRIMERGY BX600 など):
インストールするサーバブレードは、スイッチブレード経由でローカルネットワークに接続する必要があります。

リモートインストールの準備のために、以下の手順が必要です。

1. Deployment サーバをリモートインストール用に準備します。

- Installation Manager パッケージをインストールします。



-  このパッケージは以下のコンポーネントで構成され、Installation Manager インストールウィザードによって自動的にインストールされます。これらのウィザードは、これらのコンポーネントの一部がインストール済みかどうかを検出します。

- Fujitsu PXE サービス
- Installation Manager ソフトウェア
- Installation Manager データパッケージ

2. リモートリソースサーバを準備します(オプション)。


リモートサーバを使用して、インストールプロセスに必要なリソースを保存および共有できます。この場合、ターゲットサーバにはリモートリソースサーバにアクセスする権限が付与される必要があります。

3. ターゲットシステムをリモートインストール用に準備します。
 - PXE ブートモードを BIOS で有効にします。
 - PXE ブート(「**Boot from a network device**」) オプションのブートシーケンスを設定します。

 または、ターゲットシステムの iRMC/iRMC S2/マネジメントブレードの Web インターフェースによってブートシーケンスを設定できます。
 4. Deployment サーバで以下の手順に従います。
 - Installation Manager を開始して、表示されるウィザードを使用してインストールを設定します。
 - 必要に応じてコンフィグレーションを保存します。
 - インストールプロセスを開始します。
 5. ターゲットシステムを(再)起動します。ターゲットシステムの PXE ブートが開始されます。
-  ターゲットシステムの設定を行う際、ターゲットシステムにリモート管理コンポーネント(BMC/iRMC/iRMC S2/マネジメントブレード)がある場合に PXE ブートモードを有効にすることを指定できます(ターゲットシステムの再起動あり、または再起動なし)。

4.1.2 インストールプロセスの進捗

インストールプロセスが Deployment サーバから開始された後、OS のインストールが自動的に続けて行われます。つまり、ユーザにはインストールプロセスを通知するその他のデータの入力が必要されないということです。

-  インストールプロセスの設定中に、Deployment サーバ上の Installation Manager データパッケージにアクセスするユーザアカウントが作成された場合、このユーザアカウントとそれに対応するパスワードの入力が求められます。

インストールプロセスでは、以下のことが行われます。

- 選択したシステムハードウェアにプラットフォーム構造を確立します。
- ステータスフォルダを作成します。
- ターゲットシステムの現在の MAC アドレスを含む、PXE サーバアクセスリストを有効にします。

セキュリティ上の理由から、PXE サービスはアクセスリストに指定された MAC アドレスからの PXE 要求のみを受理します。

PXE ブートプロセスに続けて、ターゲットシステム上で開始された Installation Manager サービスは Deployment サーバからコンフィグレーションファイルをコピーし、ネットワーク内の該当するデータメディアに接続します (Installation Manager 固有のコンテンツ、OS、サービスパック、およびアプリケーションのため)。Installation Manager がターゲットシステム上のローカル DVD ドライブで開始された場合と同様に、自動インストールが実行されます。

インストールが完了すると、現在のリモートインストールプロセスに作成されたインストールログが Deployment サーバにコピーされ、そこに保存されます。ログに記録されたデータを Installation Monitor を使用して表示できます (詳細は、[257 ページの Installation Monitor - リモートインストールの監視](#)の章を参照)。

以下の図は、リモートインストールの手順を示しています。

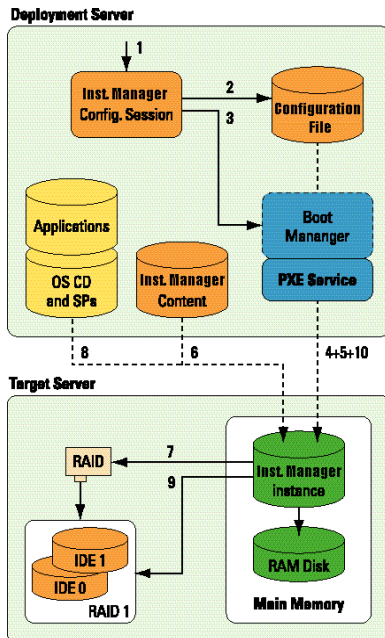




図 8: リモートインストールの進捗

1. インストールプロセスを設定します。
2. コンフィグレーションファイルを保存します。
3. PXE サービスを開始します(Deployment サーバがターゲットシステムから要求を受理できるようにします)。
4. ターゲットシステムの PXE ブート(リブート)を開始します(手動、または iRMC/ マネジメントブレードを介して自動で)。
5. PXE サービスが Installation Manager のクライアントインスタンスを起動します。
6. Deployment サーバディレクトリ構造がロードされます。
7. クライアントインスタンスが RAID アレイと OS パーティションを作成します。
8. クライアントインスタンスが OS、アプリケーションソフトウェア、およびサービスパックのデータメディアに接続します。
9. クライアントインスタンスが自動インストールを開始します。
10. Deployment サーバが OS を開始するためにインストールされたサーバのリブートを開始し、追加アプリケーション(ServerView エージェントなど)をインストールするためのカスタマ固有のスクリプトを開始します。

PXE ブートの詳細は、[293 ページの PXE プロセス](#)を参照してください。


4.2 Deployment サーバの準備

 Installation Manager の LAN セグメントには DHCP サーバが必要です。
マルチセグメントデプロイメントについては、[70 ページの マルチセグメントデプロイメントのルータの設定](#)を参照してください。

 ブレードサーバシステムの場合(PRIMERGY BX600 など):
インストールするサーバブレードは、スイッチブレード経由でローカルネットワークに接続する必要があります。

リモートインストールを実行する前に、Deployment サーバに以下のソフトウェアパッケージがインストールされている必要があります。

- Windows Server 2003 Server または Windows Server 2008 プラットフォーム
- Internet Explorer V7(またはこれ以上) または Mozilla Firefox V3.0 以上(推奨)
- Installation Manager パッケージ

 このパッケージは以下のコンポーネントで構成され、Installation Manager インストールウィザードによって自動的にインストールされます。これらのウィザードは、これらのコンポーネントの一部がインストール済みかどうかを検出します。

- Fujitsu PXE サービス
- Installation Manager ソフトウェア
- Installation Manager データパッケージ
- Linux および VMware ESX インストールの場合:
NFS、HTTP、または FTP サーバ



- DHCP による動的 IP アドレスの管理を使用する場合、1 つの LAN セグメントには DHCP サーバを 1 つしか使用できません。複数の DHCP サーバを使用している場合、「予約済み IP」アドレスの割り当てのみ可能です。
- 複数の PXE サーバを 1 つの LAN セグメントで使用している場合、すべての PXE サーバはパッシブ/ディフェンシブモードで設定する必要があります。サーバは、現在有効な MAC アドレス/イメージの割り当てリストにリストされる MAC アドレスに対してのみ反応します。



標準の Installation Manager/Deployment Manager を使用するには、オリジナルの Fujitsu PXE サービスが必要です。



以下の場合は、Deployment サーバで Installation Manager を開始できません。

- PXE サービスが Deployment サーバシステムにインストール済みの場合 (SystemcastWizard、SystemcastWizard Professional、Microsoft RIS、Symantec Altiris)
- Deployment サーバシステムにバージョン 4.80 以前の ServerView Suite コンポーネントをインストールまたはアンインストールした場合 (ServerView Operations Manager など)

この場合、修復ツール *RepairAfterOMUpdate.exe* を起動してください。Installation Manager がインストールされると、Deployment サーバシステムの以下の場所に修復ツールが格納されます。

`<drive>:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\Installation Manager`



ServerView Installation Manager V10.nn.nn を ServerView Integration Pack for Altiris Deployment Server V3.0 (またはこれ以前) と併用しないでください。互換性の理由から、ServerView Integration Pack for Altiris Deployment Server V3.1 (またはこれ以上) を使用してください。

4.2.1 Deployment サーバ上での DHCP サーバのインストールと設定

- ① Deployment サーバ上の DHCP サーバのインストールは、DHCP サーバが Deployment サーバの LAN セグメントで使用できない場合にのみ必要です。
- ② スコープオプション(060 : PXE クライアント)の他には、ブートストラップイメージやブートストラップサーバの定義に関する設定を行う必要はありません。これらは、BootP プロトコルには必要ですが、PXE プロトコルには必要ありません。

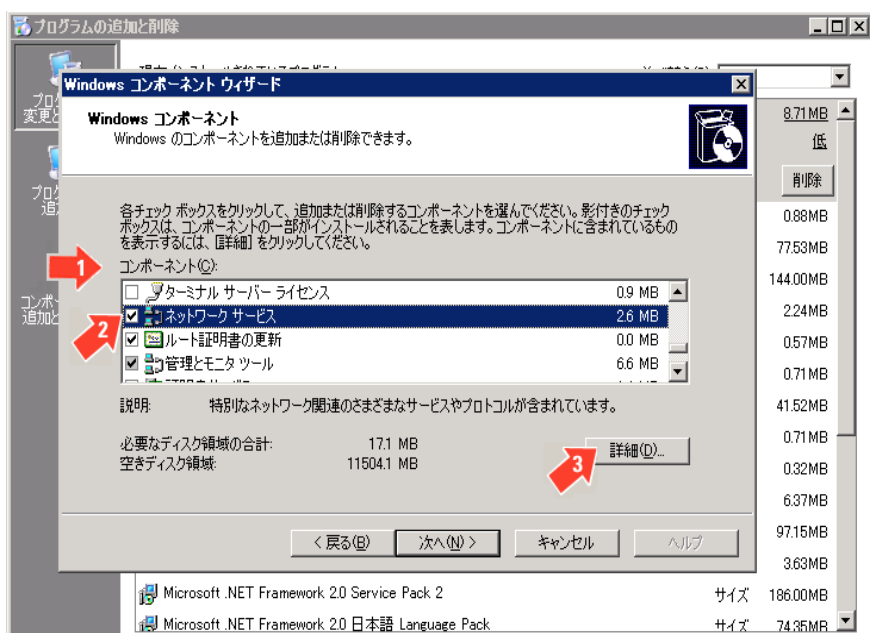


図 9: Windows コンポーネントのウィザード

1. Windows コンポーネントのウィザードを Windows コントロールパネルから開始します。

「Windows コンポーネントウィザード」ダイアログの「コンポーネント」リストに追加/削除可能な Windows コンポーネントが表示されます(1)。

2. 「コンポーネント」リストで「ネットワーク サービス」の横のチェックボックスを選択します(2)。
3. 「詳細」ボタンをクリックします(3)。
4. 使用可能なネットワークサービスのリストで「Dynamic Host Configuration Protocol (DHCP)」コンポーネントを選択します。
5. DHCP マネージャを使用して IP アドレスの範囲を定義します。特殊な予約、リース期間、サーバオプションは不要です。
6. 新しい IP 範囲を有効にします。

4.2.2 Installation Manager のインストール


Installation Manager を、Windows Server 2003 または Windows Server 2008 OS を実行するシステムにインストールする必要があります。管理者権限を持つユーザアカウントが必要です。

1. ServerView Suite DVD 1 を DVD ドライブに挿入します。最初のウィンドウが開きます。



アプリケーションが自動的に開始しない場合は、*Setup.exe* ファイルを実行します。

2. 最初のウィンドウで「Install Installation Manager」オプションを選択します。
3. 「Start」をクリックします。設定ダイアログボックスが開きます。
4. 「Installation Manager Functionality」グループで、以下のオプションを選択します。
 - リモートインストール:PRIMERGY サーバ上の OS のインストール用のコンフィグレーションファイルを作成および編集できます。リモートインストール機能もインストールされるため、PXE ブートによってデプロイメントサーバから PRIMERGY システムを設定してインストールできます。リモートインストールには、PXE サーバコンポーネントも必要です。「DVD の内容を HDD にコピーします」オプションも選択して、サポートしていないデプロイメントプロセスを有効にする必要があります。

- **PXE サーバ:**リモートインストールを実行する場合はデプロイメントサーバにインストールする必要があります。PXE サーバが自動的に開始され、その後 Installation Manager がインストールされます。このオプションは、PXE サーバが Deployment サーバにまだインストールされていない場合に、デフォルトで設定されます。
5. 「**リモートインストールの設定**」グループで、デフォルトで選択されていない場合は、「**DVDの内容をHDDにコピーします**」を選択します。これらのデータパッケージはリモートインストールの最適化に必要で、Installation Manager のインストール前に自動的にインストールされます。
 6. 「**次へ**」をクリックしてインストールを開始します。
-  インストールを完了するためにサーバの再起動が要求されることがあります。
- PXE サービスのスタートアップなどに影響する Windows レジストリへの重要な変更の数によっては、再起動が必要になる場合があります。
- サーバを再起動する前に、ServerView Suite DVD 1 を DVD ドライブから取り出します。

4.2.2.1 PXE サーバのインストール


コンポーネント選択画面で「**PXE サーバ**」オプションを選択した場合、Installation Manager の前に PXE サーバがインストールされます。

1. 「**OK**」をクリックして確定します。
インストールウィザードの最初のウィンドウが表示されます。
2. 「**次へ**」をクリックします。
3. PXE サーバをインストールするディレクトリを選択します。
4. 「**次へ**」をクリックします。
5. PXE サーバがネットワークへのアクセスに使用する LAN カードを選択します。
6. 「**次へ**」をクリックします。
7. 以下の手順に従います。


- PXE サーバを同じ Deployment サーバにローカルインストールする場合のみ、「はい」を選択します。この場合、Installation Manager はサーバオプション(060 : PXE クライアント)を自動的に DHCP サーバに追加します。これにより、ローカル DHCP サーバをプロキシ DHCP(PXE リダイレクションサービス)として使用できるようになります。

この手順は、DHCP サービスを後で PXE サービスにローカルインストールした場合にも必要です。

- 外部の DHCP サーバを使用する場合は「いいえ」を選択します。

 以下の点に注意してください。

- 入力したプロキシ DHCP コンフィグレーションの詳細が誤っていると、PXE サーバは PXE クライアント(ターゲットシステム上)にアクセスできなくなります。
- PXE サービスをインストールする前に、LAN ケーブルが接続されていることを確認してください。
- LAN セグメントには、1 つの DHCP サーバのみと 1 つの PXE サーバが含まれます。それ以外の場合は、Deployment サーバとターゲットシステム間の通信に問題が発生することがあります。
- DHCP サーバはリモートインストールでは LAN セグメントにインストールする必要があります。DHCP サーバを使用できない場合は、PXE サーバのインストールを終了します。マルチセグメントデプロイメントについては、[70 ページの マルチセグメントデプロイメントのルータの設定](#)を参照してください。
- DHCP による動的 IP アドレスの管理を使用する場合、1 つの LAN セグメントには DHCP サーバを 1 つしか使用できません。複数の DHCP サーバを使用している場合、「予約済み IP」アドレスの割り当てのみ可能です。
- 複数の PXE サーバを 1 つの LAN セグメントで使用している場合、すべての PXE サーバはパッシブ/ディフェンシブモードで設定する必要があります。サーバは、現在有効な MAC アドレス/イメージの割り当てリストにリストされる MAC アドレスに対してのみ反応します。

 以下の点に注意してください。

- 入力したプロキシ DHCP コンフィグレーションの詳細が誤っていると、PXE サーバは PXE クライアント(ターゲットシステム上)にアクセスできなくなります。
- PXE サービスをインストールする前に、LAN ケーブルが接続されていることを確認してください。
- LAN セグメントには、1 つの DHCP サーバのみと 1 つの PXE サーバが含まれます。それ以外の場合は、Deployment サーバとターゲットシステム間の通信に問題が発生することがあります。
- DHCP サーバはリモートインストールでは LAN セグメントにインストールする必要があります。DHCP サーバを使用できない場合は、PXE サーバのインストールを終了します。マルチセグメントデプロイメントについては、[70 ページの マルチセグメントデプロイメントのルータの設定](#)を参照してください。
- DHCP による動的 IP アドレスの管理を使用する場合、1 つの LAN セグメントには DHCP サーバを 1 つしか使用できません。複数の DHCP サーバを使用している場合、「予約済み IP」アドレスの割り当てのみ可能です。
- 複数の PXE サーバを 1 つの LAN セグメントで使用している場合、すべての PXE サーバはパッシブ/ディフェンシブモードで設定する必要があります。サーバは、現在有効な MAC アドレス/イメージの割り当てリストにリストされる MAC アドレスに対してのみ反応します。

8. 「**次へ**」をクリックします。

9. 「**インストール**」をクリックして PXE サーバのインストールを開始します。

ウィンドウが開き、PXE サーバのインストールが正常に完了したことが表示されます。

10. 「**終了**」をクリックしてインストールを終了します。

4.2.2.2 リモートインストール用のデータパッケージのインストール

コンポーネントを選択するときの最初のウィンドウで「DVDの内容をHDDにコピーします」オプションを有効にすると、リモートインストールに必要なデータがハードディスクにコピーされます。

インストールウィザードの最初のダイアログボックスが表示されます。

1. 「次へ」をクリックします。

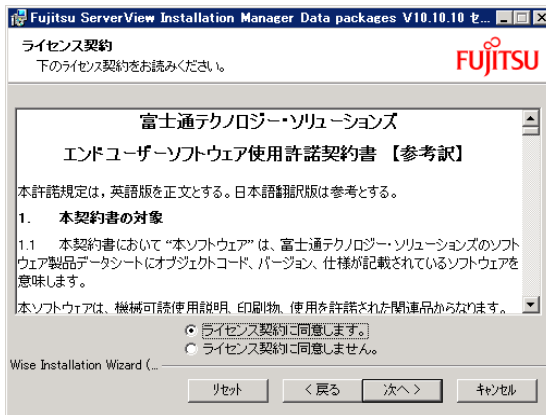


図 10: ライセンス契約書

2. ライセンス契約書に同意します。
3. 「次へ」をクリックします。
「User Information」ダイアログボックスが開きます。
4. 自分の名前と会社名を入力します。
5. 「次へ」をクリックします。
「インストール先フォルダ」ダイアログボックスが表示されます。
6. リモートインストール用データパッケージのコピー先のフォルダを選択して、インストールデータをネットワーク内でアクセス可能にする共有名を割り当てます。

7. 「次へ」をクリックします。

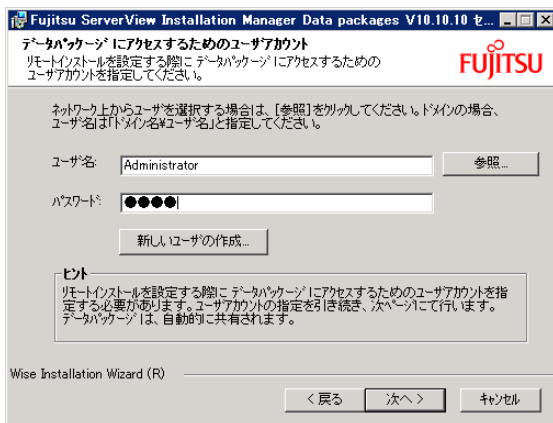



図 11: PXE クライアントでアクセスする際のユーザアカウントを定義する

8. 「参照」を選択してネットワーク内のユーザアカウントを選択するか、リモートインストール用のデータパッケージにアクセスするための PXE クライアントで利用できる新しいアカウントを作成します。

ドメインは以下の形式で入力してください。

<ドメイン名>\<ユーザ名>


 リモートインストールのコンフィグレーションセッションの開始時にターゲットシステムを定義する際に、ここで定義したユーザアカウントを入力できます。この場合、Installation Manager は PXE クライアントがアクセスするインストールデータを自動的に解放します。それ以外の場合は、ターゲットシステムのインストール時にユーザ名とパスワードの入力を求められます。

9. 「次へ」をクリックします。



図 12: データパッケージのインストールの開始

10. 「次へ」をクリックして、データパッケージのインストールを開始します。

 インストール中にほぼ 1 GB のデータがコピーされるため、このプロセスは数分かかります。

進捗状況バーにインストールの進捗が表示されます。

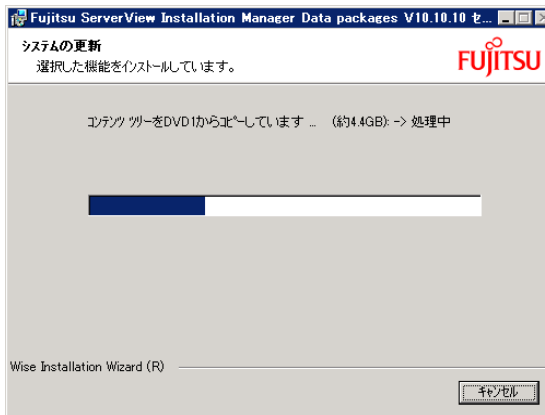


図 13: 進行中のデータパッケージのインストール – 進捗状況バー

ウィンドウが開き、インストールが正常に完了したことが表示されます。

11. 「終了」をクリックします。

次のインストールステップが自動的に開始します。

4.2.2.3 Installation Manager のインストール

最初のウィンドウでコンポーネントの選択時に「リモートインストール」オプションを有効にした場合、Installation Manager のインストールが即座に開始します。

インストールウィザードの最初のダイアログボックスが開きます。



図 14: 「Install Installation Manager セットアップ」ダイアログボックス

1. 「次へ」をクリックします。「ライセンス契約」ダイアログボックスが開きます。

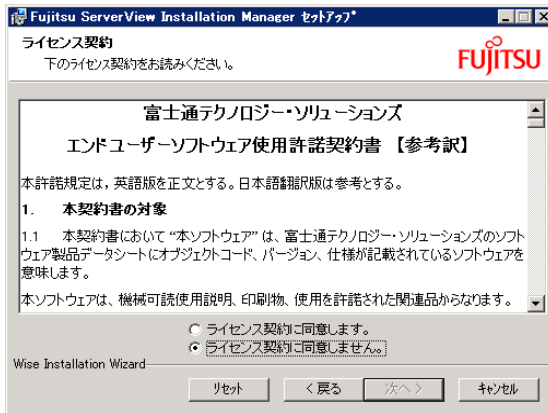


図 15: 「ライセンス契約」ダイアログボックス

2. ライセンス契約書に同意します。
3. 「次へ」をクリックします。「User Information」ダイアログボックスが開きます。
4. 自分の名前と会社名を入力します。
5. 「次へ」をクリックします。「インストール先」ダイアログボックスが開きます。
6. Installation Manager をインストールするディレクトリを選択します。
7. 「次へ」をクリックします。「ディレクトリ サーバの選択」ダイアログボックスが表示されます。

4 リモートデプロイメント



図 16:「ディレクトリ サーバの選択」ダイアログボックス

8. Installation Manager で使用するディレクトリサーバのタイプを選択します。
 - OpenDSをインストールする。ディレクトリサービスを必要とするその他の ServerView Suite 製品で使用できます。
 - 既存のディレクトリサーバを使用する。OpenDS または MS Active Directory など。
9. 「次へ」をクリックします。「ディレクトリサービス設定」ダイアログボックスが表示されます。



図 17:「ディレクトリサービス設定」ダイアログボックス

10. ディレクトリサーバ名を完全修飾ドメイン名として入力します。ディレクトリサーバがインストールされていない場合、OpenDS ディレクトリサービスのデフォルトオプションが表示されます。
11. ディレクトリサービスがインストール済みの場合は、以下のオプションを入力して、Installation Manager がシングルサインオンおよび役割ベースのアクセス制御にディレクトリサービスを使用できるようにする必要があります。
 - **ポート番号**:通信ポート。デフォルトは 1474
 - **SSL**:安全な通信。デフォルトは「はい」
 - **ベースDN**:LDAP 表記での識別名
 - **ユーザ**:LDAP 表記でのユーザアカウント
 - **パスワード**:ユーザアカウントのパスワード
12. 「次へ」をクリックします。「JBoss サービス ログオン情報」ダイアログボックスが開きます。

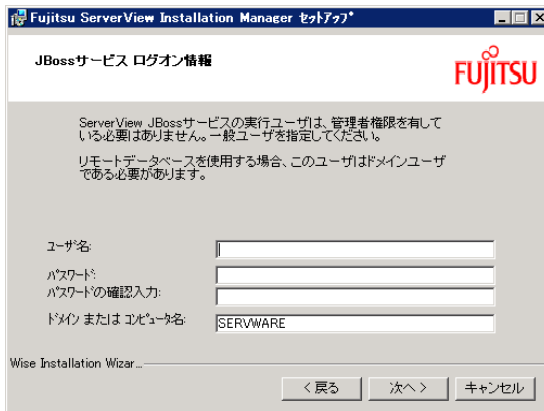


図 18: JBoss ログオン情報の指定

13. JBoss サービスのためのユーザアカウントを指定します。
14. 「次へ」をクリックします。アプリケーションをインストールする準備ダイアログボックスが開きます。

4 リモートデプロイメント

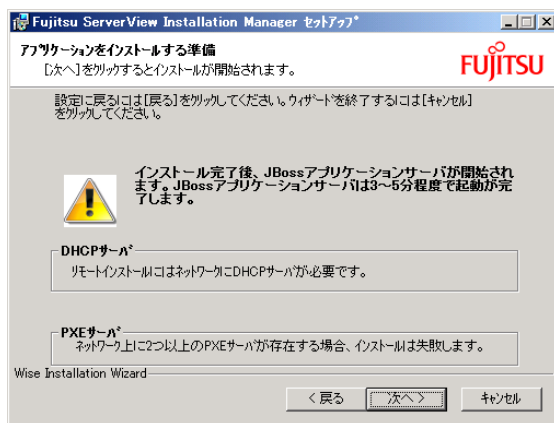


図 19: Installation Manager の開始

15. 「次へ」をクリックして、インストールを開始します。
インストールウィザードに、インストールの進捗状況が表示されます。

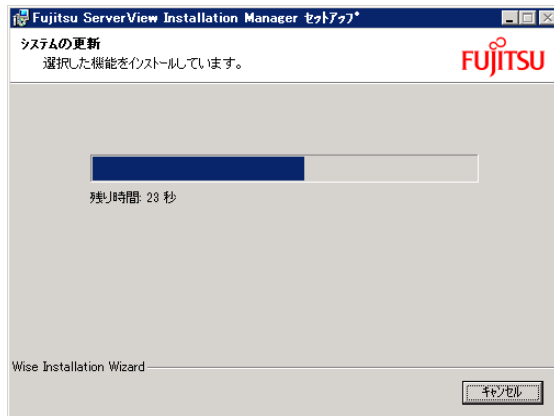


図 20: インストールの完了

... インストールが正常に完了したことが表示されます。



図 21: インストールの完了

16. 「完了」をクリックして、インストールを完了します。

Installation Manager が Deployment サーバにインストールされました。Installation Manager を開始するオプションは、[74 ページの Installation Manager を Deployment サーバで開始する](#)の項で説明しています。

4.2.3 Linux および VMware ESX システムのリモートインストールへの拡張


Linux または VMware ESX のリモートインストールをターゲットシステム上で実行する前に、インストールソースに対応する Linux/VMware ESX インストールメディアから FTP/NFS または HTTP サーバにコピーする必要があります。ターゲットシステムにアクセスでき、十分な帯域幅を持つ任意の FTP、NFS、または HTTP サーバを使用できます。Installation Manager のブートストラップローダは必要なインストールパッケージを FTP、NFS、または HTTP サーバからダウンロードします。

NFS、HTTP、または FTP サーバの設定

- ❗ NFS の場合、使用されるサーバを Linux システムにする必要があります。

FTP サーバを Windows コンピュータに設定する場合、Microsoft の Internet Information Server (IIS) または他社の同様のソフトウェアをインストールする必要があります。詳細は、該当するソフトウェアのマニュアルを参照してください。

Installation Manager が実行されている Deployment サーバも、FTP サーバとして使用できます。

-  NFS、FTP、または HTTP サーバを Linux システム上で設定する方法は、システムのマニュアルを参照してください。

RedHat Linux インストールソースの設定

以下の RedHat Linux バージョンをサポートしています。

- RedHat Enterprise 5.0、XEN サポートを含む(ドメイン 0 インストール) Edition i386 および x86_64、最新の 2 つのアップデートを含む
- RedHat Enterprise Linux(AS & ES & WS) 4 “i386”
最新の 2 つのアップデート
- RedHat Enterprise Linux(AS & ES & WS) 4 “x86_64”
最新の 2 つのアップデート
- RedHat Enterprise Linux 5 “i386”
最新の 2 つのアップデート
- RedHat Enterprise Linux 5 “x86_64”
最新の 2 つのアップデート

インストールデータを NFS、FTP、または HTTP サーバでできるようにするには、必要なファイルをインストールメディアから対応する NFS、FTP、または HTTP ファイルツリーにコピーする必要があります。

以下の手順に従います。

1. まず、対応する RedHat システムのインストールソースの基盤として、一意の短い名前ですubディレクトリを作成します(例は以下の表を参照)。

RedHat ディストリビューション	基本サブディレクトリ	インストール CD
RedHat Enterprise Linux AS 4.0	RedHatAS40	4
RedHat Enterprise Linux ES 4.0	RedHatES40	4
RedHat Enterprise Linux WS 4.0	RedHatWS40	4
RedHat Enterprise Linux 5.0 (i386)	RedHat	4
RedHat Enterprise Linux 5.0 (x86_64)	RedHat	4

2. 対応する RedHat ディストリビューションのすべてのインストールメディアから **RedHat** ディレクトリ(すべてのサブディレクトリを含む)をこの新しいサブディレクトリにコピーします。

コピープロセスが完了すると、RedHat ディレクトリにはメディア上のすべての RedHat ディレクトリの内容がすべて格納されています。

3. 対応する RedHat Linux システムのインストールウィザードに、作成した基本サブディレクトリと、NFS または FTP サーバのアドレスを入力します。

SuSE Linux Enterprise 10 / SuSE Linux Enterprise 11 インストールソースの設定

インストールデータを NFS、FTP、または HTTP サーバでできるようにするには、必要なファイルをインストール DVD から対応する NFS、FTP、または HTTP ファイルツリーにコピーする必要があります。

以下のバージョンがサポートされています。

- SuSE Linux Enterprise Server 10 Edition i386 と x86_64(最新の2つのサービスパックを含む)
- SuSE Linux Enterprise Server 11 Edition i386 および x86_64(サービスパック1を含む)

以下の手順に従います。

1. **SLES10** または **SLES11** というサブディレクトリを作成します。
2. DVD の内容を、すべてのサブディレクトリを含めてそのまま、この新しいディレクトリにコピーします(1:1 コピー)。

VMware ESX インストールソースの設定

インストールデータを NFS、FTP、または HTTP サーバで 사용할 수 있도록するには、必要な 파일을インストール DVD から対応하는 NFS、FTP、또는 HTTP 파일ツリー에 복사하는必要があります。

以下のバージョンがサポートされています。

VMware ESX 3.5.x および ESX 4.0.x

以下の手順に従います。

1. **VMWARE** というサブディレクトリを作成します。
2. DVD の内容を、すべてのサブディレクトリを含めてそのまま、この新しいディレクトリにコピーします(1:1 コピー)。

4.2.4 サービスの確認(PXE、TFTP、DHCP)

Deployment サーバによるリモートインストールでは、以下の要件があります。

- PXE(Preboot eXecution Environment) サーバと TFTP サーバがインストールされ、Deployment サーバで開始されていること。
- DHCP(Dynamic Host Configuration Protocol) サービスが Deployment サーバの LAN セグメントで使用できない場合、DHCP サーバが Deployment サーバ上で実行していること。
- PXE ブートの場合、ターゲットサーバの LAN セグメントには DHCP(Dynamic Host Configuration Protocol) サービスが必要です。ターゲットサーバと Deployment サーバが同じセグメントにある場合、DHCP サービスを Deployment サーバ自体、または現在の IP ブロードキャストドメインの任意の場所にインストールすることもできます。

マルチセグメントデプロイメントについては、[70 ページの マルチセグメントデプロイメントのルータの設定](#)を参照してください。

PXE サーバと TFTP サーバの確認

PXE サーバと TFTP サーバがインストールされ、Deployment サーバで開始されていることを確認するには、以下の手順に従います。

1. Deployment サーバで、「スタート」-「管理ツール」-「サービス」の順にクリックします。
2. PXE サービスと TFTP サービスがインストールされ、開始していることを確認します。

「DHCP サービス」サービスの確認

中央 DHCP サービスがターゲットサーバの LAN セグメントで利用できるかどうかを確認するには、LAN 管理者に問い合わせてください。

中央 DHCP サービスが使用できない場合は、DHCP サービスが Deployment サーバで実行していることを確認します。

以下の手順に従います。

1. Deployment サーバで、「スタート」-「管理ツール」-「DHCP」の順に選択します。
DHCP 管理ユーティリティが開始します。
2. DHCP 管理ユーティリティのツリービューで「サーバオプション」をクリックします。
「サーバオプション」ダイアログボックスが開きます。
3. 「サーバプロパティ」ダイアログボックスで「060 ClassID」オプションが選択されてることを確認します。

4.2.5 TFTP の設定

TFTP(Trivial File Transfer Protocol) はファイル転送プロトコル(FTP) 機能の基本サブセットを提供します。特に、TFTP では認証を行いません。

PXE ベースのリモートインストールは TFTP サービスを使用してブートイメージをターゲットシステムに転送します。そのため、**Guest** アカウントに **tftp** フォルダへの適切なアクセス権を付与する必要があります。

- 「フォルダのスキャンとファイルの実行」アクセス
- 「フォルダの一覧/データの読み取り」アクセス
- 包括的な「読み取り」アクセス

このためには、以下の手順に従います。

1. Windows エクスプローラを起動して tftp フォルダに移動します
(デフォルト : *C:¥Program files¥Fujitsu¥ServerView Suite¥D-
eploymentService¥tftp*) 。
2. **tftp** フォルダアイコンを右クリックして「**プロパティ**」を選択します。
3. 「**プロパティ**」ダイアログボックスで「**セキュリティ**」タブを選択します。
4. 「**セキュリティ**」タブで「**Guest**」アカウントを選択します。
5. 「**Guest のアクセス許可**」リストで「**読み取りと実行**」オプションを選択します。
6. 「**OK**」をクリックします。

4.2.6 マルチセグメントデプロイメントのルータの設定

Deployment サーバとターゲットサーバが別のセグメントに存在する必要がある場合、以下の設定とヒントを参考にしてください（Deployment サーバとターゲットサーバは別の LAN セグメントまたは VLAN に常駐します）。

ルータ設定内のデプロイメント通信を以下のプロトコル/ポートでバイパスします。

- Deployment サーバからターゲットサーバ方向の場合
宛先ポート：
4973 UDP(デプロイメントサービスの適切なプロトコル)
4974 ~ 4989 UDP(リストア)
- ターゲットサーバから Deployment サーバ方向の場合
宛先ポート：
67 UDP(PXE ブロードキャスト)
4011 UDP(PXE ブロードキャスト)
69 UDP(PXE/TFTP)
4972 UDP(デプロイメントサービスに適切なプロトコル)
4974 ~ 4989 UDP(バックアップ)
4974 ~ 4989 TCP(バックアップ)
- 双方向
9213 UDP/TCP(Installation Manager インストールプロトコル)
4971(ServerView Deployment Manager と ServerView Deployment Service が異なるセグメントにある場合)
- 「DHCP プロキシ」ルータ機能を有効にする必要があります。

**注意：**

特に「DHCP プロキシ」ルータ機能を使用する場合、ターゲットサーバインストール用に PXE ブートで割り当てられた IP アドレスは、デプロイメントセッション全体を通して一定でなければなりません。これは、リース時間を長くしたり(2 時間超)、DHCP サーバに IP 設定を予約することで実現できます。

リモートインストールにおけるルータ設定は、以下の場合に、一般的に ServerView Installation Manager/ServerView Deployment Manager によるマルチセグメントデプロイメントでサポートされます。

- すべての Linux(SuSE- または Red-Hat x32 および x64) および Windows x32 プラットフォーム
- Win2K8 x64(および R2) サーバ SVIM V10.10.09 以降のマルチセグメントリモートインストール
(ServerView Installation Manager V10.10.05 ~ V10.10.08 に使用可能なホットフィックス)

4.3 リモートリソースサーバの準備

オプションで、リモートサーバを使用して、インストールプロセスに必要なリソースを保存および共有できます。

ターゲットシステムがリモートリソースサーバのインストールリソースにアクセスできるようにするには、以下の手順に従います。

1. 必要なインストールリソースとして、OS インストールディスク、オプションディスク(サービスパック CD-ROM など)などを準備します。
2. 管理者権限のあるユーザアカウントを使用して、リモートリソースサーバにログインします。
3. フォルダ(例: `C:\$SHARE_Install_Data`)を作成し、ここに必要なインストールリソースを格納します。




すべてのリソースを同じフォルダに格納することも、個々のリソースを別のフォルダに分散することもできます。

4. ネットワーク上のフォルダを共有します。
5. ターゲットサーバのユーザアカウントに、共有フォルダの「読み取り」アクセス許可を付与します。
6. 準備したインストールリソースを共有フォルダにコピーします。
7. ターゲットサーバ上のユーザアカウントで、ネットワークアクセスによってフォルダからインストールリソースを読み取れることを確認します。


4.4 ターゲットシステムをリモートインストール用に準備する

ターゲットシステムのリモートインストールの場合、PXE を介してターゲットシステムで起動された Installation Manager クライアントインスタンスが Deployment サーバにアクセスします。ターゲットシステムは LAN カードから起動して PXE ブートを有効にする必要があります。

ネットワークカードからの起動用にブートシーケンスを設定する

-  オンボード LAN デバイスまたは特別に準備した(フラッシュ済み) Intel LAN メザニンカードのみが、ネットワークブート(PXE ブート)をサポートしています。

以下の 2 つの手順のいずれかを使用して、ターゲットシステムのブートシーケンスを定義します。

- ターゲットシステムの BIOS にアクセスして、**ブートシーケンス**を「**Boot from a network device**」設定にします。
 -  詳細は、ServerView Suite DVD 2 の BIOS セットアップマニュアルを参照してください。
- 「**ターゲットシステムの選択**」設定ステップでインストールプロセスを設定している場合([81 ページの ターゲットシステムの選択 \(リモートインストールのみ\)](#))、ターゲットシステムにリモート管理コンポーネント(BMC/iRMC/iRMC S2/マネジメントブレード)がある場合に、PXE ブートモードをインストールプロセスの一部として自動的に有効にすることを指定できます。

ターゲットシステムの PXE ブートの開始

以下の 2 つの手順のいずれかを使用して、ターゲットシステムの PXE ブートを開始します。

- ブートシーケンスを定義した後、ターゲットシステムを「手動」で開始します。
- ターゲットシステムがリモート管理コンポーネント (BMC、iRMC、iRMC S2、マネジメントブレード) を持つ場合：

設定後、Installation Manager から提供される自動オプションを使用します (上記を参照)。

4.5 Installation Manager を Deployment サーバで開始する

Installation Manager は、ローカルまたは Deployment サーバ上でリモートに開始できます。いずれの場合も Web ブラウザが必要で、ローカル起動の場合は正しい Web アドレスで自動的に呼び出されます。

4.5.1 Installation Manager を Windows でローカルに開始する

以下の手順に従います。

1. 「スタート」-「プログラム」-「Fujitsu ServerView Suite」-「Installation Manager」-「start Installation Manager」の順に選択します。

ユーザ名とパスワードの入力が求められます。ユーザインターフェースにアクセスするためのデフォルトユーザアカウントは、以下のとおりです。

ユーザ:管理者

パスワード:admin

ユーザアカウント設定を変更する方法は、『ServerView Suite: User Management in ServerView』マニュアルを参照してください。

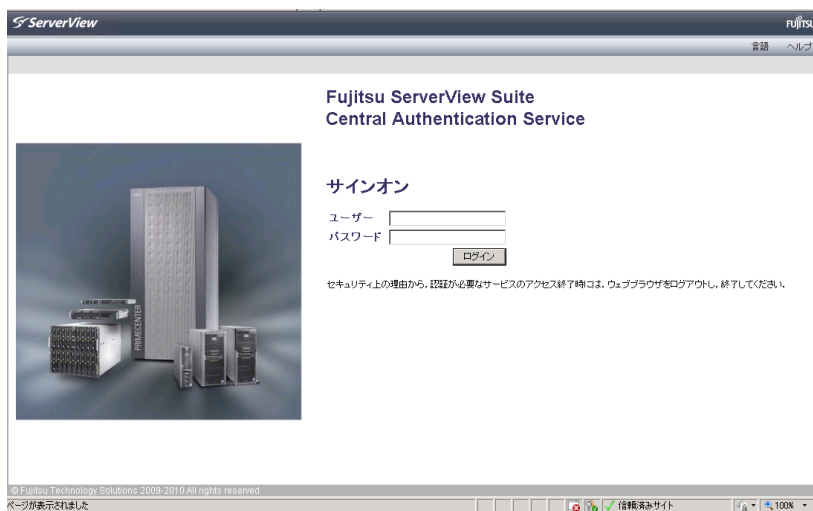


図 22: Installation Manager ログイン

2. ユーザ名とパスワードを入力して、「ログイン」をクリックして確定します。

Installation Manager の「ようこそ」画面が表示されます。

4.5.2 Installation Manager を Web ブラウザでリモートに開始する

以下の手順に従います。

1. サポートする Web ブラウザ (Internet Explorer または Firefox) を開始します。
2. 以下のアドレスを入力します。

`http://<Deployment サーバの IP アドレス>:3169-
/ServerStart/ImStartBase.html`

ユーザ名とパスワードの入力が求められます。ユーザインターフェースにアクセスするためのデフォルトユーザアカウントは、以下のとおりです。

ユーザ:管理者

パスワード:admin

ユーザアカウント設定を変更する方法は、『ServerView Suite: User Management in ServerView』マニュアルを参照してください。

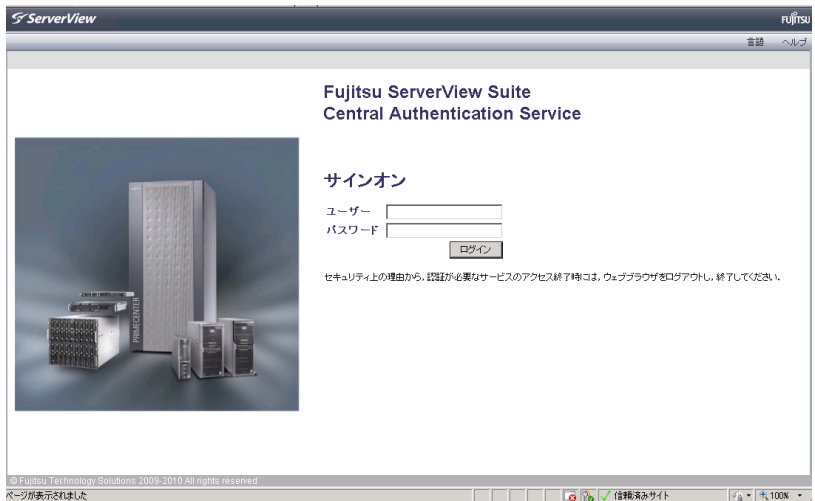


図 23: Installation Manager ログオン

3. ユーザ名とパスワードを入力して、「ログイン」をクリックして確定します。
Installation Manager の「ようこそ」画面が表示されます。

4.5.3 Installation Manager へようこそ画面

Installation Manager へようこそ画面は次のように構成されます。



図 24: Installation Manager へようこそ画面

この画面では使用する Installation Management の機能を選択できます。

Installation

「**Installation Manager**」リンクから **Installation Manager** を起動します。

この機能を使用してコンピュータをインストールできます。

Monitoring

「**Installation Monitor**」リンクから **Remote Installation Monitor** を起動します。

この機能を使用して現在のインストールを監視できます。

安全な通信のための SSL

Installation Manager と Deployment サーバ間の通信で SSL プロトコルを有効にします（アドレス：`https://<IP>` など）。

Deployment サーバ上で SSL が設定されている必要があります。

ローカルまたはリモートで Installation Manager を起動するときに、このオプションを選択できます。

4.5.4 Installation Manager のグラフィカルユーザインターフェース(GUI)

Installation Manager の「ようこそ」画面の Installation Manager リンクをクリックすると、以下の Installation Manager GUI の初期画面が表示されます。

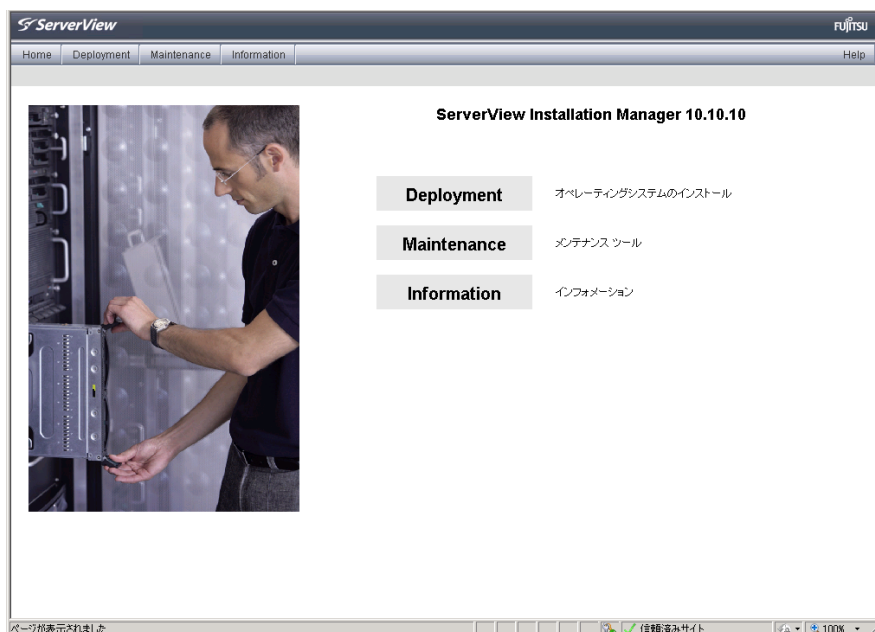


図 25: Installation Manager GUI – 初期画面

Installation Manager GUI は以下のエリアで構成されています。

- メニューバー
- 表示エリア

メニューバー

メニューバーから、以下の機能を実行できます。

Home

Installation Manager GUI の最初の画面に戻ります。

Deployment

リモートインストールを開始します。

Maintenance

Installation Manager の PXE インフラストラクチャを使用して、任意の必要なブートイメージを起動するオプションです。

終了

サーバのリブートまたはシャットダウンのためのオプションがあります。



サーバをシャットダウンまたはリブートする前に、該当するドライブからリムーバブルメディアをすべて取り出してください。

リブート

サーバをリブートします。

シャットダウン

サーバをシャットダウンします。

Information

PRIMERGY サーバとインストールについての情報を表示します。

Help

オンラインヘルプを起動します。

表示エリア

表示エリアには、現在選択されている機能に関連するダイアログステップが表示されます。

Installation Manager GUI の最初のページでは、表示エリアには以下の要素が表示されます。

- Installation Manager バージョンが画面上部に表示されます。
- PRIMERGY サーバのシステムデータが「**Server Information**」の下に表示されます。
- 「**Deployment**」、「**Maintenance**」、「**Information**」の各リンクは、メニューバーの対応する機能ボタンから開始できるものと同じ機能を開始できます(上のメニューバーを参照)。

4.6 リモートインストールの開始

リモートインストールを開始するには、Installation Manager GUI の開始ページで、「**Deployment**」ボタンをクリックするかメニューバーで「**Deployment**」をクリックします。

ターゲットシステムを定義するウィンドウが表示されます。



リモートインストールには「**ガイドモード**」しか使用できません。このため、デプロイメントモードを選択する画面は、この場合はスキップされます。

この章のダイアログボックスは、デプロイメントモードとして「**ガイドモード**」を選択すると表示されるダイアログボックスと同じです。「**ガイドモード**」の詳細については、[15 ページの「クイックモード」](#)および「**ガイドモード**」を参照してください。

4.6.1 ターゲットシステムの選択（リモートインストールのみ）

このダイアログボックスでは、ターゲットシステムのリモートインストールに必要な設定を行います。

図 26: ターゲットシステムの定義

コンフィグレーションファイル

定義済みのターゲットシステムのデータを選択できます。

ターゲットシステム

「**コンフィグレーションファイル**」で選択したターゲットシステムのデータがここに表示されます。「**コンフィグレーションファイル**」でターゲットシステムを選択していない場合や、まだリストされていないシステムをインストールする場合は、ここで、以下の設定セッションを適用するシステムを定義します。

MAC アドレス

インストールに使用されるターゲットシステムの LAN ポート(ネットワークカード) の MAC アドレス。



必要な MAC アドレスの形式は「nn-nn-nn-nn-nn-nn」です。ただし、Installation Manager は「nnnnnnnnnnnn」と「nn:nn:nn:nn:nn:nn」という形式も受け付け、これらは自動的に変換されます。

機種名

ターゲットシステムの PRIMERGY のタイプ。

補足説明

この入力フィールドには「MAC アドレス」と「**機種名**」フィールドからの値が自動的に指定されます。必要に応じて、このデフォルト値を変更できます。

Deployment サーバ上の Installation Manager data packageへのアクセス

Installation Manager クライアントシステムの Deployment サーバへのアクセスを許可します。

ユーザ名

Deployment サーバへのアクセス権を持つユーザアカウント。このユーザアカウントは、Deployment サーバへの Installation Manager のインストール中に設定されたものです。

パスワード/パスワードの確認入力

ユーザアカウントのパスワードです。

ターゲットシステムのリモート管理インターフェース

ターゲットシステムにリモート管理インターフェース(BMC、iRMC、iRMC S2、またはマネジメントブレード) がある場合、デプロイメントプロセスの一部として PXE モードがターゲットシステム上で自動的に有効になるように(ターゲットシステムの以降の再起動の有無にかかわらず)、ここで指定できます。

Remote Management Controller の選択

タイプ

リモート管理インターフェースのタイプを示します。

マネジメントブレード

PRIMERGY ブレードサーバ用。

リモートマネジメントコントローラ

IPMI、iRMC、または iRMC S2 搭載の PRIMERGY サーバの場合。

combined

マネジメントブレードおよびリモートマネジメントコントローラの場合。

No Remote Control interface

管理インターフェースのないターゲットシステム用。この場合、以下で説明する入力フィールドは表示されせん。

IP アドレス

BMC、iRMC、iRMC S2、またはマネジメントブレードの IP アドレスを入力します。

IPMI User(リモートマネジメントコントローラの場合のみ)

BMC、iRMC、または iRMC S2 のローカルユーザアカウントを入力します。

IPMI Password(リモートマネジメントコントローラの場合のみ)

BMC、iRMC、または iRMC S2 のローカルユーザアカウントのパスワードを入力します。

SNMP Community(マネジメントブレードの場合のみ)

マネジメントブレードに対応する権限を持つ SNMP ユーザグループ。

コマンド

必要なアクションを選択します。

Disabled

ターゲットシステム上の PXE 設定は変更されず、システムは再起動しません。

Set boot mode to PXE(no restart)

PXE ブートモードを自動的に有効にし、ターゲットシステムは再起動されません。

Restart system and boot via PXE

PXE ブートモードを自動的に有効にし、ターゲットシステムが再起動されます。

ターゲットシステムの再起動は、Installation Manager セッションの最後にデプロイメントプロセスを開始するとすぐに実行されます。

- 「次へ」をクリックします。

最初のウィンドウに、自動インストールプロセスの設定が表示されます。

4.6.2 OS の自動インストールの設定

このダイアログボックスではターゲットシステムにインストールする OS を選択します。

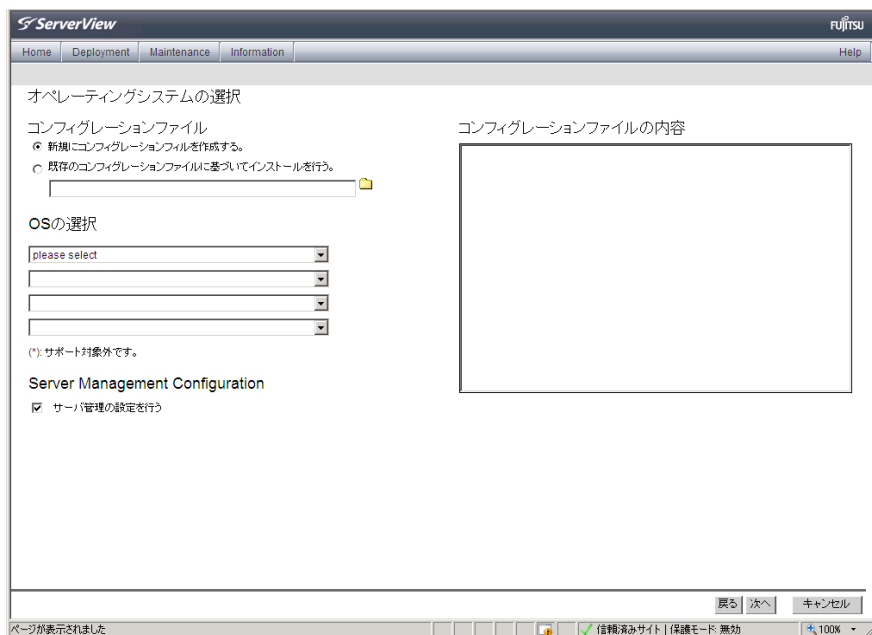


図 27: 初期画面 : オペレーティングシステムの自動インストール

コンフィグレーションファイル

新しいコンフィグレーションファイルを作成するか、既存のファイルからの値を使用するかを指定します。

新規にコンフィグレーションファイルを作成する

新規にコンフィグレーションファイルを作成します。

既存のコンフィグレーションファイルに基づいてインストールを行う

コンフィグレーションファイルを選択できます。このファイルの詳細がウィンドウの右側のコンフィグレーションファイルの内容に表示されます。

フォルダアイコンをクリックして、既存のコンフィグレーションファイルを選択します。ダイアログボックスが開き、該当するコンフィグレーションファイルを Installation Manager リポジトリの **configfiles** ディレクトリから(リモートインストール)、またはローカルバックアップメディアから(ローカルインストール、ガイドモード)、選択できます。

Installation Manager は、現在のセッションのコンフィグレーションファイルの内容をコンフィグレーションのデフォルト値として提供します。これらの値を必要に応じて使用し、セッション終了時に同じコンフィグレーションファイルまたは新しいコンフィグレーションファイルに保存できます。

コンフィグレーションファイルの内容

既存のコンフィグレーションファイルを選択すると、内容が抽出されてここに表示されます。

OS の選択

インストールする OS のバージョン、エディション、サービスパックを選択します。



選択された PRIMERGY サーバがサポートしているオペレーティングシステムのみを選択できます。

Installation Manager は、以下のオペレーティングシステムのインストールをサポートします。



ServerView Suite の制約の一部として、日本市場向けにサポートするサーバシステムとサポートする OS の最新情報は、[インターネット](#)から取得できます。

Microsoft Windows

- Windows Server 2008(32 ビットバージョン) :Standard Edition、Enterprise Edition、Web Server Edition、Small Business Premium Add-on Server
- Windows Server 2008(64 ビットバージョン) :Standard Edition、Enterprise Edition、Datacenter Edition、Web Server Edition、Windows Server Foundation、Small Business Server Standard、Small Business x64 Premium Edition Add-on Server、EBS Management Server、EBS Messaging Server、EBS Security Server、EBS Database Server

- Windows Server 2008 R2:Standard Edition、Enterprise Edition、Datacenter Edition、Web Server Edition、Windows Server Foundation
- Windows Server 2003 R2 および Windows Server 2003 R2 x64(全エディション)
- Windows Server 2003(全エディション)
- Windows Server 2003 x64(全エディション)

Linux(SuSE および Red Hat)

- SuSE Linux Enterprise Server 10 Edition i386 および x86_64(Service Pack 2 および 3 を含む)
- SuSE Linux Enterprise Server 11 Edition i386 および x86_64(サービスパック 1 を含む)
- Red Hat Enterprise Linux 4.0(AS、ES および WS) Edition i386 および x86_64(Update 7 および Update 8)
- XEN サポート(ドメイン 0 インストール) Edition x86 および x86_64 を含む RHEL 5.0(Update 4 および Update 5)

Hypervisor

- VMware ESX 3.5 および ESX 4.0
- Microsoft Hyper-V Server および Hyper-V Server 2008 R2



Hypervisor – Microsoft Hyper-V – Microsoft Hyper-V Server または Microsoft Hyper-V Server 2008 R2 を選択する場合、Installation Manager は Hyper-V をコアバリエーションとしてインストールします。

Server Management Configuration

サーバ管理システム設定を変更する必要があるか、またはこの手順をスキップできるかを指定します。このオプションは「クイックモード」のローカルインストールでは表示されません。

Installation Manager ウィザード

次のウィザードを使用して設定を行います。

- ターゲットシステム設定用ウィザード

- Server Configuration Manager



Server Configuration Manager は、「**サーバ管理の設定**」オプションを選択した場合のみ、使用できます。

このウィザードを使用して、ターゲットシステムおよび、該当する場合はターゲットシステムの BMC/iRMC/iRMC S2 の一般的なシステム動作を設定できます。Server Configuration ウィザードは、[95 ページの Server Configuration Manager](#)の項で説明しています。

- マスストレージデバイス(RAID システム/ハードディスク) 設定用ウィザード

このウィザードを使用して、ターゲットシステムのハードディスクおよび RAID コントローラを設定できます。RAID/ディスクウィザードウィザードは、[110 ページの RAID とディスクの構成](#)の項で説明しています。

- インストール固有の設定を行うためのウィザード

- <OS>(Windows Server 2008 など)

インストールするオペレーティングシステムの固有の設定を行う場合

- アプリケーションウィザード

オペレーティングシステムで後でインストールするアプリケーションを設定する場合

これらのウィザードの詳細は以下の章を参照してください。

- Windows システム :
[125 ページの Windows の設定とインストールの開始](#)の章を参照してください。
- Linux および VMware ESX システム :
[207 ページの Linux および VMware ESX の設定とインストールの開始](#)の章を参照してください。

設定内容の確認(サマリ)

この設定ステップでは、行ったすべてのインストール設定に関する一覧と概要が表示されます。これで、設定をファイルに保存して、自動インストールを開始できます。

4.6.3 PXE ベースのリモートインストールの開始

「**設定内容の確認**」ダイアログボックスでインストール設定を確認したら([203 ページの 設定値のバックアップ/インストールの開始](#) (Windows) および [255 ページの 設定値のバックアップ/インストールの開始](#) (Linux) を参照)、コンフィグレーションを保存して PXE ベースのリモートインストールを開始できます。

ユーザから見ると、PXE ベースのリモートインストールは以下の手順で行われます。

1. 「**設定内容の確認**」ダイアログボックスで「**インストール開始**」をクリックします。
2. 以下の場合のみの手順：
 - ターゲットシステムにリモート管理インターフェース(BMC-、iRMC、iRMC S2、マネジメントブレード) がない場合または
 - ターゲットシステムのリモート管理インターフェースに設定を指定していない場合([81 ページの ターゲットシステムの選択 \(リモートインストールのみ\)](#) を参照)

ローカル操作でターゲットシステムを開始します。



注意！

ターゲットシステムがブレードサーバの場合：

MMB とスイッチブレードが完全に初期化されていないために発生するシステムブートエラーを防ぐため、

シャーシの電源を入れた後に数分間待機してから MMB 経由でリモート PXE 部とを起動してください。割り当てたターゲットブレードの MMB WebUI ビューにリストされる MAC アドレスを目視チェックすることが重要です。

詳細は、サーバブレードのユーザガイドを参照してください。

3. PXE ベースのシステムブートと、インストールが自動的に開始されます。
同時に、ServerView Installation Monitor が Deployment サーバで自動的に開始されます。「**Remote Installation Monitor**」画面は、開始されているリモートインストールプロセスの進捗と状態を通知します。



注意！

インストールが完了するまでは、ターゲットサーバで操作を行わないでください。

ターゲットシステムが設定され、1 回以上の必要な再起動が実行された後、ターゲットシステムで OS のインストールが引き続き実行されます。



インストールが完了するまで、システムは複数回再起動されることがあります。

4.7 PRIMERGY サーバのマルチインストール(マルチデプロイメント)

Installation Manager では、最大 5 台のサーバシステムを同時にリモートでインストールできます。

これを行うには、以下の手順に従います。

1. ターゲットシステムのデプロイメントを開始します。

インストールプロセスが開始された後、インストールされるターゲットシステムとの接続が確立されると、Installation Monitor が自動的に開始します。インストールの進捗状況に関する情報が表示されます([257 ページの Installation Monitor - リモートインストールの監視](#)の章を参照)。

2. 別のターゲットシステムのデプロイメントとインストールを開始します。

すでに開始したターゲットシステムに使用したものと同一コンフィギュレーションファイルを使用して、この 2 番目のターゲットシステムをインストールしてデプロイメントを行えます。別のコンフィギュレーションファイルを使用することもできます。



2 つのシステムのハードウェア構成は、同じコンフィギュレーションファイルを使用する場合は同一にする必要があります。Installation Manager は大容量メモリサブシステムを使用して、該当するかどうかを確認します。

RAM、プロセッサタイプ、グラフィックおよび LAN コントローラ(DHCP サーバによる動的 IP アドレス割り当てを使用している場合)などのその他のハードウェアパラメータは、正常なインストールに影響しません。これらのコンポーネントはインストールプロセス中に動的に検出されるため、同一である必要はありません。コンフィギュレーションファイルで指定されたりリモートマネジメントコントローラ(BMC/iRMC/iRMC S2)は、このリモートマネジメントコントローラがターゲットシステムの自動 PXE ブートのトリガーに使用されていないければ、ターゲットシステムに存在する必要はありません。

Installation Monitor に新しいリモートインストールが表示されます。アクティブなインストールのエントリをクリックしてインストールを切り替え、それぞれの進捗を確認できます。インストールが完了した後も、該当する情報を確認できます([257 ページの Installation Monitor – リモートインストールの監視](#) の章を参照)。

3. 最大 5 つのインストールプロセスが「**Active Clients**」にリストされるまで、前の手順を繰り返します。



6 つ以上のサーバを同時にインストールするには、ServerView Deployment Manager が必要です。これは、ServerView Suite DVD 1 の「**Deployment Software**」の下に収録されています。ServerView Suite のこのモジュールにはライセンスが必要です。デモ用ライセンスが適用されています。

Deployment Manager を使用するフルライセンスは、オーダー番号 U15000-C300 を伝えて Fujitsu Technology Solutions カスタマサービスチームから取得できます。

5 ターゲットシステムの設定

特定のオペレーティングシステムの設定オプションの他に、Installation Manager のカスタマイズインストールモードでは、以下を設定するための多くのオプションを提供します。

- ターゲットシステムのサーバ固有のシステム設定：
Server Configuration Manager
- ハードディスクおよび RAID コントローラ

5.1 Server Configuration Manager

Server Configuration Manager を使用して、ターゲットシステムに以下の設定を行うことができます。

- 全般的なシステム動作
- BMC、iRMC または iRMC S2
(ターゲットシステムに提供されている場合)

5.1.1 ターゲットシステムのシステム動作の設定

一般的なシステム動作を設定するには、Server Configuration Manager で以下の機能を使用して一連のステップを実行します。

- ターゲットシステムのサーバタイプを選択します。
- Boot ウォッチドッグを設定します。
- ソフトウェアウォッチドッグを設定します。
- サーバの電源のオンとオフを切り替えるスケジュール時間を設定します。
- 電源障害後の再起動時の動作を設定します。
- 自動ファンテストを設定します。
- UPS(無停電電源装置) デバイスを設定します。
- マネジメントコントローラ固有の設定を行います。




ターゲットシステムの PRIMERGY サーバタイプによっては、すべてのステップを実行する必要はありません。また、個々のステップの順序や、個々のステップの設定オプションは、システムによって異なります。

5.1.1.1 ターゲットシステムのサーバシステムの選択

この手順では、サーバタイプおよびターゲットシステムのその他の詳細を指定します。

モデル名を手動で選択する

このオプションを選択すると、Installation Manager が自動的に検出したシステムを関連するピックリストの中で変更できます。


-  リモートインストールの場合は Installation Manager がターゲットシステムのハードウェアを自動的に検出できないので、リモートインストールの場合は「**モデル名を手動で選択する**」オプションがデフォルトで有効になります。

ラックモデル

ここで、TXnnn(タワー)タイプの PRIMERGY サーバのラックモデルを選択できます。ラックモデルを選択しない場合、このオプションは無効です。

Special Features

ServerView Local Service Display(**LocalView Panel(LVP) installed オプション**)を搭載するためのオプションや、専用のサービス LAN ポートにアクセスするためのオプション(**Service LAN option available オプション**)が用意されているターゲットシステムの場合は、該当するオプションボタンを使用してこれらの機能を選択できます。

-  選択したターゲットシステムがこれらの機能のいずれかまたは両方をサポートしていない場合、該当するオプションは無効になります。

PRIMERGY システムによっては、オプションボタンで追加機能を選択することができます(インストールされている RSB S2 など)。

5.1.1.2 Boot ウォッチドッグの設定



この設定手順は、BMC、iRMC、または iRMC S2 を含むターゲットシステムの場合のみ表示されます。

Boot ウォッチドッグの機能は、対応する ServerView エージェントがターゲットシステムにインストールされている場合のみ有効です。

Boot ウォッチドッグは、システムの起動と ServerView エージェントが使用可能な時間との間のフェーズを監視します。ServerView エージェントが指定した時間内にサーバの Remote Management コンポーネントとの接続を確立できない場合、Boot ウォッチドッグは、起動ルーチンが正常に完了しなかったと判断します。このようになった場合のアクションを指定できます。

適用

ターゲットシステムで Boot ウォッチドッグを設定します。

このオプションを選択すると、以下の設定を行うことができます。

タイムアウト時間

Boot ウォッチドッグの待機時間を設定します。



注意！

「**タイムアウト時間**」には、十分長い時間を設定してください。推奨値：オペレーティングシステムの起動に通常必要な時間の 2 倍から 3 倍。

理由：Boot ウォッチドッグは、システムが起動し、ServerView エージェントがリモート管理コンポーネントとの接続を確立するまで待機する必要があります。システム構成によって異なりますが、これにはデスクトップディスプレイが画面に表示された後でも、数分かかることがあります。

「**タイムアウト時間**」に設定した時間が短すぎると、Boot ウォッチドッグが早く起動してしまう可能性があります。

Action

Boot ウォッチドッグの待機時間が過ぎた後に実行されるアクションを指定します。

次へ

Boot ウォッチドッグの待機時間が過ぎてもアクションを何も行わず、サーバが実行し続けます。システムイベントログにエントリが生成されます。

リセット

サーバ管理ソフトウェアがシステムの再起動をトリガーします。

パワーサイクル

サーバの電源が切れ、すぐに再び投入されます。

5.1.1.3 ソフトウェアウォッチドッグの設定

ソフトウェアウォッチドッグは、ServerView エージェントを使用してオペレーティングシステムの機能を監視します。ServerView エージェントとオペレーティングシステムが完全に初期化されると、ソフトウェアウォッチドッグが有効になります。

ServerView エージェントは、事前に定義された間隔でリモート管理コンポーネントにアクセスします。このコンポーネントが ServerView エージェントからのメッセージの受信を停止すると、ソフトウェアウォッチドッグは、システムはもう正しく実行していないと判断します。このようになった場合のアクションを指定できます。

適用

ターゲットシステムでソフトウェアウォッチドッグを設定します。

このオプションを選択すると、以下の設定を行うことができます。

タイムアウト時間

ここでソフトウェアウォッチドッグの待機時間を設定します。

**注意！**

どのような状況でも、「**タイムアウト時間**」に 2 分未満を設定しないでください。推奨値：オペレーティングシステムの起動に通常必要な時間の 2 倍から 3 倍。

「**タイムアウト時間**」に設定した時間が短すぎると、ソフトウェアウォッチドッグが早く起動してしまう可能性があります。

Action

Boot ウォッチドッグの待機時間が過ぎた後に実行されるアクションを指定します。

次へ

Boot ウォッチドッグの待機時間が過ぎてもアクションを何も行わず、サーバが実行し続けます。システムイベントログにエントリが生成されます。

リセット

サーバ管理ソフトウェアがシステムの再起動をトリガーします。

パワーサイクル

サーバの電源が切れ、すぐに再び投入されます。

5.1.1.4 サーバの電源投入/切断時刻の設定

この手順では、ターゲットシステムの電源をオンとオフにする時間を設定できます。各曜日の電源をオンとオフにする時間を設定できます。

電源投入時刻

オプションを有効にして選択した各曜日について、ターゲットシステムの電源をオンにする時間を指定できます。

電源切断時刻

オプションを有効にして選択した各曜日について、ターゲットシステムの電源をオフにする時間を指定できます。

5.1.1.5 停電後の再起動時の動作設定

この手順では、ターゲットシステムが停電後にどのように電源を管理するか、およびクリティカルエラー(ブート試行の失敗など)後の再起動試行回数を設定します。

電源復旧時動作設定

停電後にターゲットシステムの電源管理を設定します。

電源異常後のアクション

停電後のターゲットシステムの動作を選択します。

電源投入しない

停電後にターゲットシステムの電源が切れたままにします。

電源投入する

停電後にターゲットシステムの電源を再び投入します。

電源断前の状態に戻す

デフォルト設定です。

ターゲットシステムの電源状態が、停電前の電源状態にリセットされます。

自動電源投入までの待ち時間

停電後にサーバが再起動まで待つ分数(最大 30 分)。

Reboot Retries

ターゲットシステムがクリティカルエラー(ブート試行の失敗など)後に試行する再起動の回数を設定します。

Default for reboot tries

再起動試行回数(最大 7)。

Action after exceeding reboot tries

再起動試行が「**再起動試行回数**」で指定した回数失敗した後に、ターゲットシステムの Remote Management コンポーネントが実行する動作を設定します。



選択可能な設定はシステムによって異なります。

5.1.1.6 自動ファンテストの設定

このステップでは、ターゲットシステムで毎日自動実行するファンテストを設定します。

ファンテスト

ターゲットシステムで、該当する場合に日次のファンテストを行う時間を指定します。

ファンテスト時刻

日次のファンテストの開始時間を指定します。

デフォルト: 正午

ユーザ固有の資産タグ

資産タグ

ここで選択した資産タグ(カスタム資産タグ)をターゲットシステムに入力できます。

- ❶ カスタム資産タグを使用して、インベントリ番号または選択したその他の ID をサーバに提供します。

Windows ベースのシステムの場合、カスタム資産タグは WMI(Windows Management Instrumentation) で自動的に使用可能になり、独自ツールを評価したり、Enterprise Management システム(CA Unicenter など)の統合に使用したりできます。

カスタム資産タグは、TX120 S2、RX200 S5、RX300 S5、TX200 S5、TX300 S5 および BX900 世代のサーバの時点でサポートされています。

5.1.1.7 ServerView Operations Manager に表示するための UPS デバイスの設定

この手順では、UPS デバイスとその状態を ServerView Operations Manager のターゲットシステムに表示する方法を設定します。UPS(無停電電源装置)デバイスをサーバコンポーネントや外部ユニットに割り当て、電源供給が中断されないように設計します。

ServerView Operations Manager が各 UPS デバイスのそれぞれの状態を判断できるように、ターゲットシステムに各 UPS デバイスの SNMP エージェントをインストールし、さらに各エージェントを永続的に 1 つのデバイス専用割り当てます。

UPS デバイスの SNMP エージェントは、UPS デバイスの製造元から入手でき、ターゲットシステムまたは UPS デバイスそのもののいずれかにインストールできます。

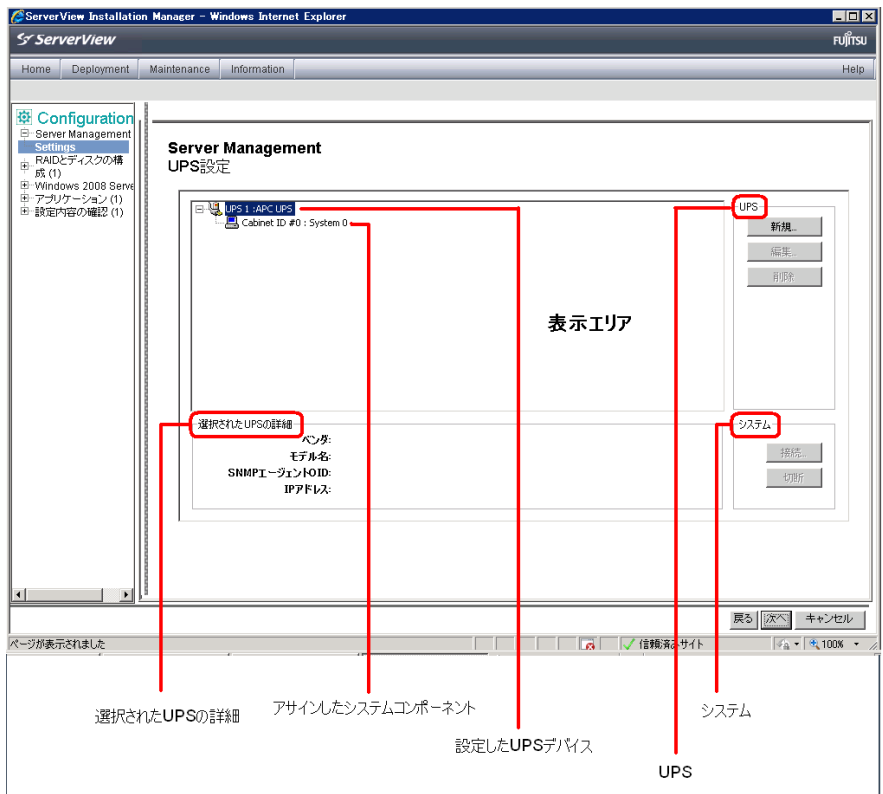


図 28: Server Configuration Manager : UPS デバイスの設定

UPS デバイスの設定を行うダイアログは、4 つのエリアで構成されます。

表示エリア

左上の表示エリアには、設定された UPS デバイスと、割り当てられたシステムコンポーネントが表示されます。

選択された UPS の詳細

選択された UPS または編集集中の UPS の詳細情報が表示されます。

UPS

「新規」を使用して、新しい UPS デバイスを設定し、設定時にそれを 1 つ以上のシステムコンポーネントに割り当てることができます。

「編集」を使用して、すでに設定されている UPS デバイスの設定データを変更できます。

「削除」を使用して、構成から UPS デバイスを削除できます。

システム

このグループのボタンを使用して、システムコンポーネントを設定された UPS デバイスに割り当てたり(「接続」) 既存の割り当てをキャンセルしたり(「切断」) できます。

UPS デバイスの設定と、1 つ以上のシステムコンポーネントへのデバイスの割り当て

以下の手順に従います。

1. 「新規」をクリックします。

「UPS の追加」ダイアログが表示され、新しい UPS デバイスの追加と設定ができます。

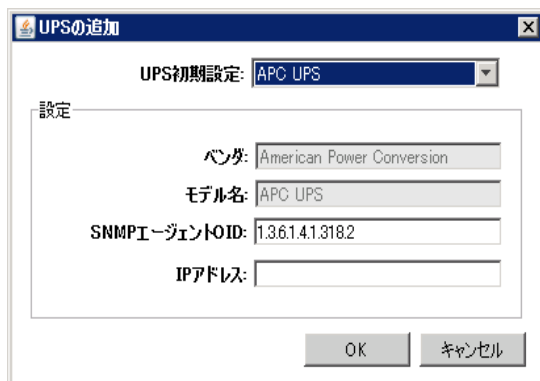


図 29: UPS の追加 : UPS デバイスの追加

2. 「UPS の追加」ダイアログに必要な情報を入力します。

UPS 初期設定

UPS デバイスの種類。デバイスによっては種類が事前に定義されています。事前に定義されているデバイスを選択すると、「ベンダ」、「モデル名」、「SNMP エージェント OID」フィールドに、事前に定義された値が表示されます。



APC および Siemens 製の UPS デバイスの場合は、事前に定義された値を使用することを推奨します。

ベンダ

UPS デバイスの製造元。

モデル名

UPS デバイスのモデル名。

SNMP エージェント OID

UPS デバイス用の OEM SNMP エージェントの基本オブジェクト識別子 (OID)。



APC または Siemens 製の UPS デバイスの場合は、OEM SNMP エージェントの基本 OID を入力する必要はありません。これらのメーカーが製造した UPS デバイスは、モデル番号とベンダー名に基づいて ServerView Operations Manager に識別され、適切な SNMP OID が自動的に割り当てられます。

IP アドレス

ターゲットシステムの IP アドレスまたは DNS 名。SNMP エージェントをターゲットシステムと通信させるには、IP アドレスと DNS メッセージが必要です。

3. 「OK」をクリックして「UPS の追加」ダイアログの入力を確定します。
「UPS への接続」ダイアログが表示されます。

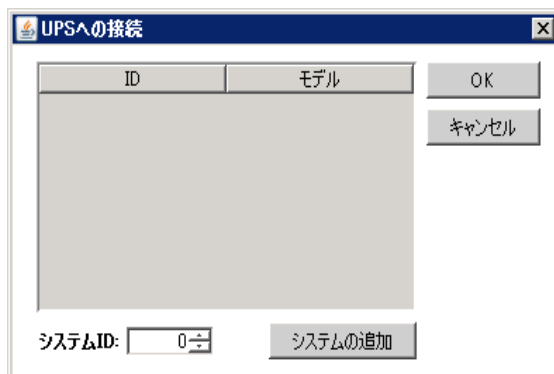



図 30: システムの UPS への接続 : システムコンポーネントの UPS デバイスへの割り当て

-  Installation Manager がターゲットシステムに接続されている(オンラインモード)か接続されていない(オフラインモード)かによって、「UPS への接続」ダイアログに表示される内容は異なります。

オンラインモード:

すべてのシステム(サーバおよび接続された拡張ユニット)とその ID 番号およびモデル番号が、リストに表示されます。

オフラインモード:

システムの ID 番号が必要です。「手動」で入力します。

UPS デバイスを、設定時に 1 つ以上のシステムユニットや外付けのコンポーネントに割り当てるには、

各システムコンポーネントに対して次の 2 つの手順を行います。

- 「システム ID」で、新しく UPS 設定する UPS デバイスに割り当てるシステムコンポーネントまたは外部コンポーネントの ID を選択します。
 - 「システムの追加」をクリックして割り当てを確定します。
4. 「OK」をクリックして、UPS デバイスの設定を完了します。

設定した UPS デバイスのプロパティの変更

以下の手順に従います。

1. 表示エリアで、プロパティを編集する UPS デバイスを選択します。
 2. 「編集」ボタンをクリックします。
- 「編集」ダイアログが表示されます。

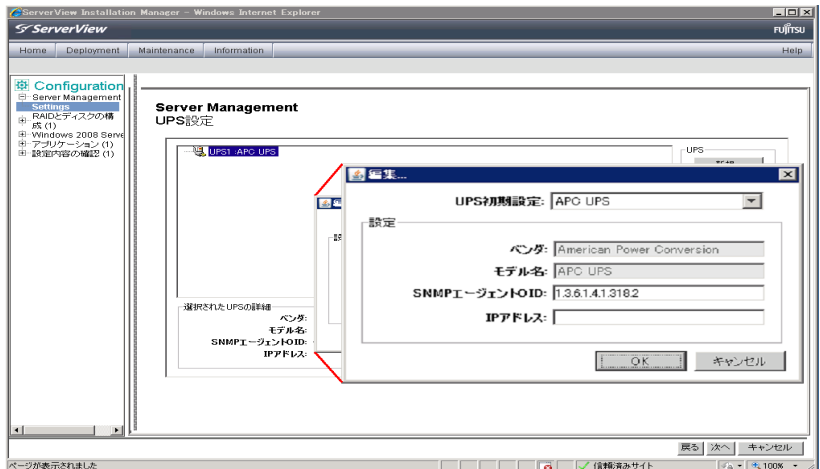


図 31: 編集 : UPS デバイスのプロパティの編集

3. 変更内容を入力して「OK」で確定します。

UPS デバイスを構成から削除する

以下の手順に従います。

1. 表示エリアで、構成から削除する UPS デバイスを選択します。
2. 「削除」ボタンをクリックします。

システムコンポーネントへの設定済み UPS デバイスの割り当て

以下の手順に従います。

1. 表示エリアで、1 つ以上のシステムコンポーネントに割り当てる UPS デバイスを選択します。
 2. 「キャンセル」ボタンをクリックします。
- 「UPS への接続」ダイアログが表示されます。

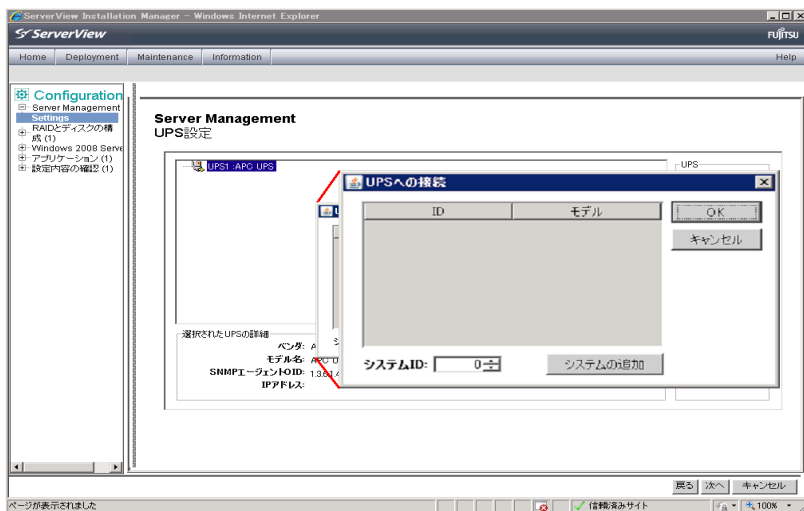


図 32: システムの UPS への接続 : システムコンポーネントの UPS デバイスへの割り当て

3. UPS デバイスに割り当てる各システムコンポーネントに対して、次の 2 つの手順を行います。

- 「システム ID」で、新しく UPS 設定する UPS デバイスに割り当てるシステムコンポーネントまたは外部コンポーネントの ID を選択します。
- 「システムの追加」をクリックして割り当てを確定します。

4. 「OK」で確定します。

システムコンポーネントへの UPS デバイス割り当てのキャンセル

以下の手順に従います。

1. 表示エリアの UPS デバイスで、割り当てをキャンセルするコンポーネントを選択します。
2. 「切断」ボタンをクリックします。


5.1.1.8 資産タグのターゲットシステムへの割り当て

このステップでは、資産タグをターゲットシステムに割り当てることができます。

ユーザ固有の資産タグ

資産タグ

ここで選択した資産タグ(カスタム資産タグ)をターゲットシステムに入力できます。

-  カスタム資産タグを使用して、インベントリ番号または選択したその他の ID をサーバに提供します。

Windows ベースのシステムの場合、カスタム資産タグは WMI(Windows Management Instrumentation) で自動的に使用可能になり、独自ツールを評価したり、Enterprise Management システム(CA Unicenter など)の統合に使用したりできます。

カスタム資産タグは、TX120 S2、RX200 S5、RX300 S5、TX200 S5、TX300 S5 および BX900 世代のサーバの時点でサポートされています。

5.1.2 iRMC および iRMC S2 の構成

iRMC および iRMC S2 を Server Configuration Manager で構成する手順は、以下のマニュアルに記載されています。

- 『iRMC – integrated Remote Management Controller』
- 『iRMC S2 – integrated Remote Management Controller』

5.2 RAID とディスクの構成

マストレージデバイスを使用してハードディスクと RAID コントローラを構成します。iSCSI ターゲットに Windows Server OS を直接インストールするために、ターゲット LUN の選択、パーティションのフォーマットを行うことができます。



注意！

Installation Manager は、新しいパーティションを定義した全てのディスクにおいて、全ての既存のパーティションを削除します。



2 つのサーバのハードウェア構成の差異は、ハードディスクサブシステムの参照についてのみです。コンフィグレーションファイルを使用して多くのターゲットシステムをインストールする場合は、該当するターゲットシステムのハードディスクサブシステムが構成要件を満たしている必要があります。

iSCSI ターゲットでの Windows Server OS のインストール

Installation Manager では、TCP/IP を使用して iSCSI アダプタ経由で PRIMERGY サーバに接続されている iSCSI ターゲットに、Windows Server OS を直接インストールすることもできます。



この場合の前提条件は、Installation Manager セッションを開始する前に、iSCSI アダプタおよび iSCSI が適切に構成されていることです。

Installation Manager では、iSCSI ターゲットへの Windows Server OS の直接インストールで以下の種類のアダプタをサポートします。

- Windows Server 2003 :
 - iSCSI ホストバスアダプタ(iSCSI HBA)
 - (ServerEngines BladeEngine 10 GB iSCSI イニシエータなど)
- Windows Server 2008 :
 - iSCSI ホストバスアダプタ(iSCSI HBA)
 - (ServerEngines BladeEngine 10 GB iSCSI イニシエータなど)
 - iSCSI 機能を持つネットワークカード(iSCSI NIC)
 - (Broadcom Nextreme、Intel Pro/1000 など)

Windows Server OS をインストールするためのマストレージデバイスの構成

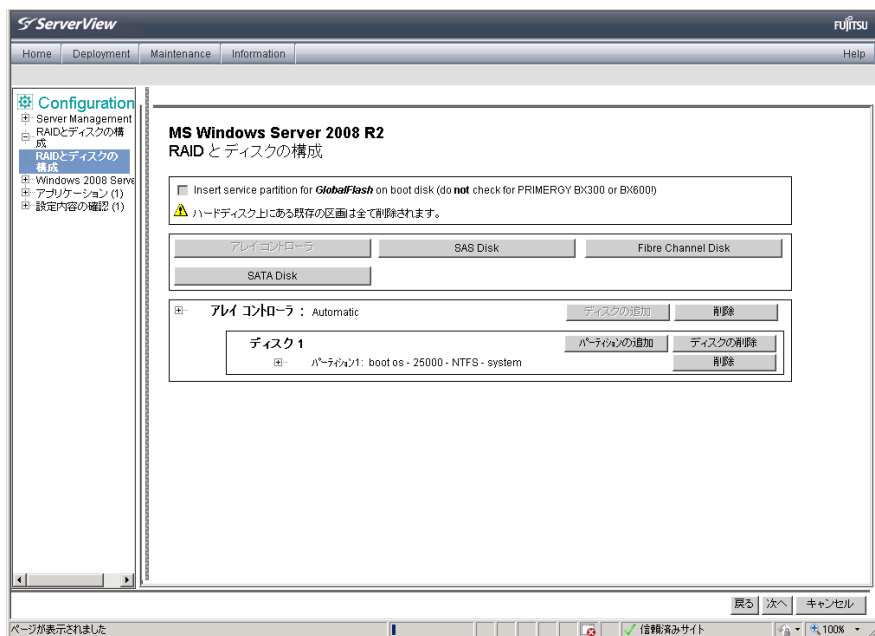


図 33: ガイドモードのRAIDとディスクの構成(Windows Server 2008)



リモートインストールの構成が表示されます。ターゲットシステムでのローカルインストールの場合は、コントローラ/ロジカルドライブを追加するためのボタンは表示されません。代わりに、システムに実際に存在するコントローラ/ロジカルドライブが表示されます。

iSCSI ターゲットでのローカルインストールの場合、iSCSI LUN(iSCSI ターゲットの論理デバイス) のボタンが表示されるのは、iSCSI LUN が実際に存在し、iSCSI アダプタおよび iSCSI ターゲットの適切な構成を通じて表示される場合のみです。

これらのボタンを使用して、以下を構成することができます。

アレイコントローラ

アレイコントローラを RAID アレイに構成できるようにします。

SAS Disk

ターゲットシステムに搭載されている SAS ハードディスクのパーティションの設定とフォーマットができます。

SATA Disk

ターゲットシステムに搭載されている SATA ハードディスクのパーティションの設定とフォーマットができます。

Fibre Channel Disk

パーティションの設定とフォーマットを行う外付けの FC(ファイバチャネル) ハードディスクを有効にします。

Linux および VMware OS をインストールするためのマストストレージデバイスの構成

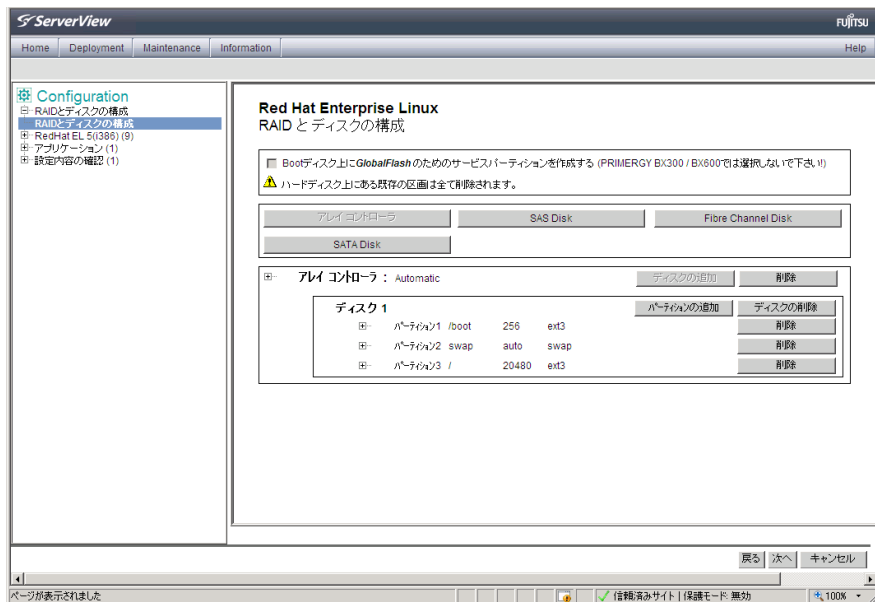



図 34: ガイドモードのRAIDとディスクの構成

 リモートインストールの構成が表示されます。ターゲットシステムでのローカルインストールの場合は、コントローラ/ロジカルドライブを追加するためのボタンは表示されません。代わりに、システムに実際に存在するコントローラ/ロジカルドライブが表示されます。

これらのボタンを使用して、以下を構成することができます。

アレイコントローラ

アレイコントローラをRAID アレイに構成できるようにします。

SAS Disk

ターゲットシステムに搭載されている SAS ハードディスクのパーティションの設定とフォーマットができます。

SATA Disk

ターゲットシステムに搭載されている SATA ハードディスクのパーティションの設定とフォーマットができます。

Fibre Channel Disk

パーティションの設定とフォーマットを行う外付けの FC(ファイバチャネル)ハードディスクを有効にします。

5.2.1 アレイコントローラの設定

アレイコントローラ

アレイコントローラの設定に使用可能なオプションを表示します。

アレイ コントローラ : RAIDの設定を行ってください。 [ディスクの追加] [削除]

アレイ コントローラ: Automatic
コントローラファミリー: 自動
コントローラタイプ: 自動
コントローラ番号: 0

既存のRAID構成を使用する ☒
RAIDを使用しない場合も選択します。

構成モード ☒ 自動 ☐ 手動
RAID レベル: RAID 1
ディスク数: 0

[適用] [リセット]

図 35: RAID システムの構成

アレイコントローラ

対応するアレイコントローラのベンダーのリストを表示します。

コントローラファミリー

選択したベンダーの RAID コントローラファミリーのリストを表示します。

コントローラタイプ

選択したコントローラファミリーのコントローラタイプのリストを表示します。

コントローラ番号

コントローラ番号を設定します。この番号は、上記 3 つのフィールドで指定された内容を反映します。

ベンダーが特定されている場合(「自動」以外の値が設定されている場合)、「コントローラファミリー」と「コントローラタイプ」に「自動」を設定すると、「コントローラ番号」はこのベンダーのコントローラを参照します。「コントローラファミリー」が特定されている場合、「コントローラ番号」はこのベンダーの指定したコントローラファミリーなどを参照します。

既存の RAID 構成を使用する

これ以降のオプションを無効にし、ターゲットシステムの既存の RAID アレイを使用します。このオプションを選択しない場合、既存の RAID アレイが削除され、以下のオプションを使用して新しい RAID アレイを作成できます。

構成モード

RAID アレイを構成する方法を指定します。

自動

搭載されているすべてのディスクに RAID アレイを構成します。この場合、ハードディスクの数とコントローラの機能によって RAID レベルが決定されます。

- ハードディスク 1 台の場合 : RAID7(JBOD)
- ハードディスク 2 台の場合 : RAID1
- ハードディスク 3 台の場合 : RAID5(コントローラがレベル 5 を管理できる場合)
- ハードディスク 4 台以上の場合 : ホットスペア RAID5(コントローラがこれに装備される場合)

手動

「手動」オプションを使用すると、手動で設定ができます。

RAID レベル



ターゲットシステムへのローカルインストールの場合：

RAID レベルは、使用するコントローラの機能と、接続するハードディスク数に依存します。構成可能な RAID レベルのみが表示されます。

データセキュリティのレベルを指定します。

RAID 0

ストライピング（冗長なし）。データの復元はできません。ハードディスクが故障した場合、ハードディスク上のデータは失われます。

RAID 1

ミラーリング。ハードディスクが故障して交換されると、データは自動的に再構成されます（リビルド）。

追加のハードディスクをスタンバイディスクとして使用できる場合（「**ホットスペア**」オプションを参照）、故障したディスクの代替として自動的にアクティブになり、故障したディスクからこのスタンバイディスクにデータが再構成（リビルド）されます。

RAID 5

分散パリティ情報。ハードディスクが故障して交換されると、データは自動的に再構成されます（リビルド）。

追加のハードディスクをスタンバイディスクとして使用できる場合（「**ホットスペア**」オプションを参照）、故障したディスクの代替として自動的にアクティブになり、故障したディスクからこのスタンバイディスクにデータが再構成（リビルド）されます。

RAID 10

ストライピングとミラーリングの組み合わせです。RAID 1 より高速ですが、RAID 0 と異なり冗長です。

RAID 50

ストライプしたバージョンの RAID 5 に RAID 0 を組み合わせた構成。この場合、RAID 0 アレイは少なくとも 2 つのストライピング RAID 5 アレイから作成されます。これを実装するには、少なくとも 6 台のハードディスクが必要です。

ディスク数

RAID アレイに含まれるディスクの台数を設定します。ハードディスクをすべて使用する場合、「0」と入力します。

ホットスペア

RAID レベルが RAID 1 と RAID 5 の場合、ディスクが故障したときにスタンバイディスクを復元に使用するかどうかを指定します。ハードディスクが故障した場合、スタンバイディスクが故障したディスクの機能を引き継ぎます。データは常に冗長です。



ホットスペアディスクはブレードサーバで使用できません。

ブレードサーバには最大 2 台のディスクを搭載しますが、ホットスペアオプションには最低 3 台のディスクが必要です。そのため、ブレードサーバを構成している場合は、ホットスペアオプションは無効です。

ホットスペアハードディスクを使用してシステムを構成する場合は、「使用する」を選択します。

適用

このボタンをクリックすると、現在設定している値が保存されます。

リセット

このボタンをクリックすると、最後に保存した値が復元されます。

5.2.2 ハードディスクの構成

ハードディスクの構成に関する以下の手順は、RAID コントローラ、SAS ディスク、SATA ディスクおよびファイバチャネルディスクについて同一です。



ターゲットハードディスク上の既存のパーティションはすべて削除されます。

ディスクの追加

新しいハードディスクエントリを作成します。新しいハードディスクを構成するための追加のグループを表示します。

ディスク <n>

新しいハードディスクの構成に使用できるオプションを表示します。

パーティションの追加

構成に新しいパーティションを作成します。新しいパーティションを作成するための追加のグループを表示します。

ディスクの削除

構成に関連するハードディスクエントリを削除します。

削除

構成でその他に示されるパーティションのエントリを削除します。

パーティション <n>

構成済みのパーティション。パーティションの構成パラメータを編集できます。

コントローラの削除

構成からコントローラを削除します。

5.2.3 パーティションの設定



注意！

ハードディスクに新しいパーティションを設定すると、Installation Manager によりディスクの既存のパーティションがすべて削除されます。



Linux/VMware ESX システムにパーティションを設定する手順は、Windows システムの手順と異なります。

5.2.3.1 パーティションの設定(Windows)



RAID ディスク、SCSI ディスク、IDE ディスクおよびファイバチャネルディスクのパーティション設定手順は同じです。

図 36: ハードディスクのパーティションの設定(Windows)

パーティション <n>

パーティションの設定に使用できるオプションを表示します。

ボリュームラベル

パーティションの名前。

ファイルシステム

選択したパーティションにシステムタイプを指定します。使用可能なタイプ：NTFS および FAT。

パーティションサイズ

パーティションサイズを MB 単位で指定します。

自動

有効な最大サイズを使用してパーティションが作成されます。



「自動」オプションは、1 つのハードディスクで 1 つのパーティションしか選択できません。

サイズ (MB)

パーティションのサイズを示す整数(2048 など)(単位 MB)。

クイックフォーマット

ハードディスクをクイックフォーマットモードでフォーマットするかどうかを指定します。



クイックフォーマットモードでは、フォーマット時にハードディスクに壊れたセクタがあるかどうかのチェックを行いません。そのため、クイックフォーマットモードは、ハードディスクがすでに適切にフォーマットされていて破損が検出されなかった場合のみ使用してください。

パーティションの利用形態

パーティションの使用目的を指定します。

Bitlocker

Windows Server 2008 のみ。Windows Server 2008 の「BitLocker ドライブ暗号化」機能を使用する場合に指定します。

Boot

OS ロードを使用するブートパーティション。

OS

Windows システムファイル用のパーティション。

Data

システム固有でないデータ用のパーティション。

適用

新しい構成または変更した構成を保存します。

リセット

現在編集中のパーティションに、最後に保存したオプションの値を復元します。

5.2.3.2 パーティションの設定 (Linux/VMware ESX)

RAID ディスク、SCSI ディスク、IDE ディスクおよびファイバチャネルディスクのパーティション設定手順は同じです。

ディスク 1

パーティション	マウントポイント	サイズ (MB)	ファイルシステム
パーティション1	/boot	256	ext3
パーティション2	swap	auto	swap
パーティション3	/	20480	ext3

パーティションの追加 ディスクの削除

削除

マウントポイント: ☒ 標準: /boot ☐ 固有:

ファイルシステムタイプ: ext3 サイズ (MB): 256

☐ パーティションを推奨のサイズで作成する

追加容量オプション:

☒ 固定容量

☐ 指定限度まで使用 (MB):

☐ 最大許容量まで使用

☐ プライマリパーティションにする

☐ LVM ボリュームグループの作成:

適用 リセット

削除

削除

図 37: ハードディスクのパーティションの設定 (Linux)

パーティション <n>

パーティションの設定に使用できるオプションを表示します。

マウントポイント

パーティションを追加(マウント)するターゲットシステムのディレクトリ構造でディレクトリを指定します。パーティションのディレクトリ構造はこのディレクトリに追加されます。

標準

マウントポイントの選択: `/boot`、`/var`、`/tmp`、`/usr`、`/opt`

固有

ユーザが選択したディレクトリをマウントポイントとして指定します。

ディレクトリは次の形式で指定します。

`/<ディレクトリ名>/mydirectory` など

ファイルシステムタイプ

選択したパーティションにシステムタイプを指定します。使用可能なタイプは、`ext2`、`ext3`、`swap`(スワップパーティションにのみ使用可能)および `vfat`(VMware ESX 3.5 にのみ使用可能)です。

サイズ(MB)

パーティションの最大サイズを示す整数(2048 など)(単位 MB)。

パーティションを推奨のサイズで作成する

パーティションのデフォルトのマウントポイントを選択してこのオプションを選択すると、選択したマウントポイントに最適なサイズの指定がこのパーティションに自動的に適用されます。

この場合、「追加容量オプション」は無効になります。

追加容量オプション

より厳密にサイズを指定できます。

固定容量


「サイズ」で指定したサイズのパーティションを作成します。

指定限度まで使用(MB)

パーティションがここで指定した値に拡張されます。


最大許容量まで使用

有効な最大サイズを使用してパーティションが作成されます。

-  このオプションは、1 つのハードディスクで 1 つのパーティションにしか選択できません。

プライマリパーティションにする


ハードディスクのプライマリパーティションとしてパーティションを作成します。

-  各ハードディスクに最大 4 つのパーティションを作成できます。

LVM ボリュームグループの作成

SuSE SLES 10 および VMware 以外

指定した名前でも LV グループ (LV = 論理ボリューム) を作成します。LV グループは、ハードディスクとファイルシステム間の抽象化レベルを実装する LVM (LVM = 論理ボリュームマネージャ) に基づきます。

-  ターゲットシステムには、LV グループは 1 つしか作成できません。

LV グループは、ハードディスクとファイルシステム間の抽象化レベルを実装する LVM に基づきます。

LV グループは、複数の仮想パーティション (論理ボリューム) に割り当てることができます。このタイプの論理ボリュームに作成されるファイルシステムは、後でインストールシステムの複数の物理パーティションを占有できます。

5 ターゲットシステムの設定

RAIDとディスクの構成では、LV グループは以下のように表示されます。

The screenshot displays the RAID configuration interface, divided into two main sections: 'アレイ コントローラ' (Array Controller) and 'SAS コントローラ' (SAS Controller).

アレイ コントローラ : Automatic

ディスク 1

パーティション	ファイルシステム	サイズ (MB)	フォーマット
パーティション1 /boot	ext3	256	
パーティション2 swap	auto	swap	
パーティション3 /	ext3	20480	

SAS コントローラ :

ディスク 1

パーティション	ファイルシステム	サイズ (MB)	フォーマット
LV-Group LGV	ext3	8000	
パーティション2 /var	ext3	8000	

LV-Group LGV

パーティション	ファイルシステム	サイズ (MB)	フォーマット
パーティション1 /home	ext3	7960	

マウントポイント: ☒ 標準: /home ☐ 固有:

ファイルシステムタイプ: ext3 サイズ (MB): 7960

追加容量オプション:

☒ 固定容量 ☐ 指定限度まで使用 (MB): ☐ 最大許容量まで使用

論理ボリューム名: lv_home

図 38: RAIDとディスクの構成-LV グループおよび論理ボリューム

論理ボリューム(仮想パーティション)を構成する場合、論理ボリュームにユーザが選択した名前を割り当てることができます。

論理ボリューム名

論理ボリュームの名前。

適用

新しい構成または変更した構成を保存します。

リセット

現在編集中のパーティションに、最後に保存したオプションの値を復元します。

6 Windows の設定とインストールの開始

Windows オペレーティングシステムを設定するときに、Installation Manager のウィザードを使用して各設定ステップを順に進めることができます。また、各設定ステップを直接有効にして、自分で設定ステップの順序を決めることもできます。



ここでは、ウィザードに表示される順序で設定ステップを説明します。

6.1 ユーザインターフェース

ウィザードのユーザインターフェース構造は統一されています。

- 左側の領域では、ツリー構造の適切なリンクをクリックして直接設定ステップを選択できます。
- 右側の領域には、現在の設定のパラメータが表示されます。

6 Windows の設定とインストールの開始

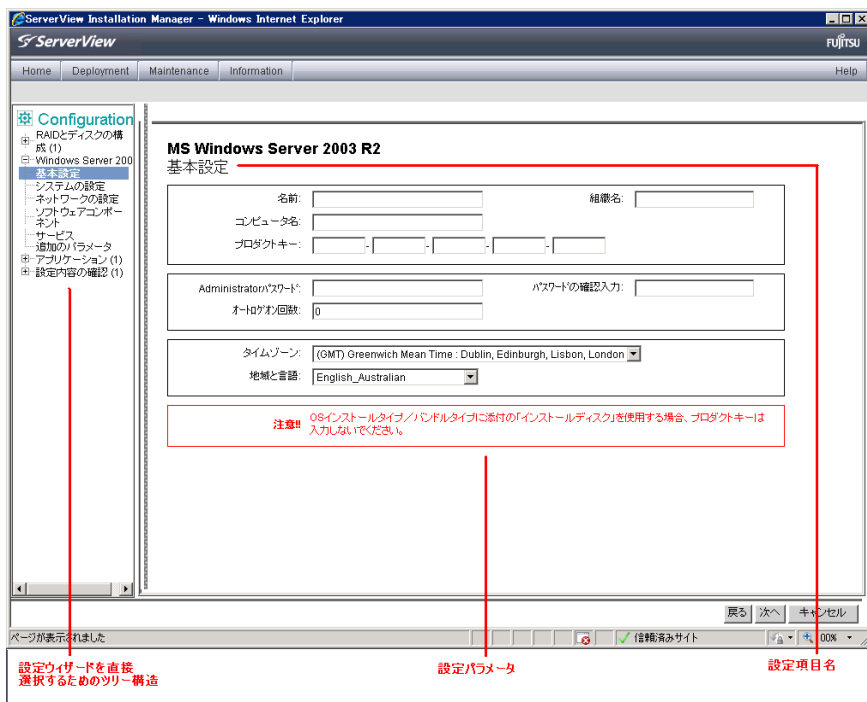


図 39: 自動インストールの設定用のユーザインターフェース

次へ

「次へ」をクリックして次の設定ステップに進みます。

戻る

「戻る」をクリックして前の設定ステップに進みます。

キャンセル

「キャンセル」をクリックして現在のウィザードで設定を中止します。

すべての変更は破棄されます。

6.2 Windows のインストール(標準)

Windows の標準インストールは、以下の手順に従います。

- RAIDとディスクの構成を使用してハードディスク/アレイコントローラを設定する
- Windows OS のインストールを設定する
- インストールパラメータを保存して、インストールを開始する



Windows Server 2008 Server Core は標準モードではインストールできません。

USB スティックをWindows Server 2008 インストールのステータスバックアップメディアとして使用する場合、BIOS 設定のBoot メニューでUSB スティックを削除します。

フロッピーディスクまたは USB スティックを Windows Server 2008(64 ビット) インストールのコンフィグレーションファイルの保存先メディアとして使用する場合、BIOS でブート順序を変更します。ハードディスクをフロッピーディスクおよび USB スティックの上位に設定します。

前提条件

- ターゲットシステム上で Installation Manager を開始しておく必要があります([28 ページの ターゲットシステムで Installation Manager を開始するを参照](#))。
- ローカルインストールを開始しておく必要があります([38 ページの ローカルインストールの開始を参照](#))。
- 「Installation Manager Deployment Process」ウィンドウで「クイックモード」インストールモードを選択する必要があります。
- 「自動インストール構成の最初のウィンドウ」で、OS、OS の種類、サービスパックを選択しておく必要があります([38 ページの ローカルインストールの開始を参照](#))。
- 「次へ」をクリックする前に、追加設定を指定しておく必要があります。

6.2.1 ディスクと RAID コントローラの構成(標準)

このダイアログボックスでは、DVD を使用するローカルインストール中に、ターゲットシステムのディスクと対応するコントローラを設定します。この場合、Installation Manager がコンピュータの構成をチェックし、既存のコントローラおよびディスクと互換性のあるオプションを提供します。

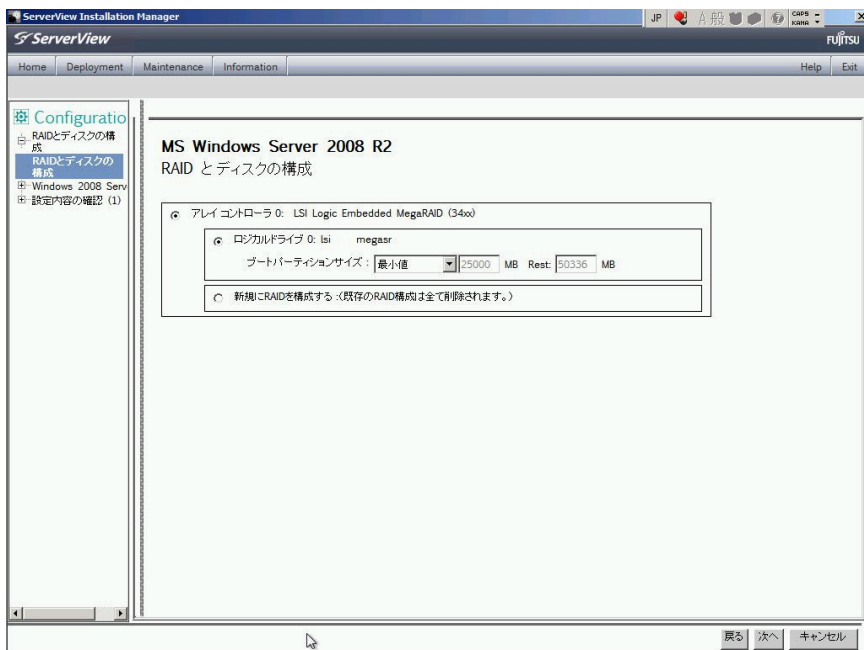


図 40: Windows のインストール(標準):ディスクおよびアレイコントローラの構成

RAID コントローラ

システムで検出された RAID コントローラを表示します。

ロジカルドライブ 0

既存の RAID アレイを使用し、選択した RAID コントローラの構成を変更しません。この場合、ブートパーティションサイズのみを選択します。

ブートパーティションサイズ

ブートパーティションのサイズを指定します。


- | | |
|-----------------|--|
| 最小値 | ブートパーティションの最小サイズとして 25000 MB を指定します。 |
| すべてのディスク | ブートパーティションにディスク全体を指定します。 |
| 手動設定 | ブートパーティションに指定したサイズを使用します。
5 GB が Windows Server 2008 で未割当のままです。 |

新規に RAID を構成する

新規にRAIDを構成するを選択します。このコントローラの既存のすべての RAID 構成がクリアされます。

RAID レベル

データセキュリティのレベルを指定します。

-  RAID レベルは、使用するコントローラの機能と、接続するハードディスク数に依存します。構成可能な RAID レベルのみが表示されます。

自動

搭載されているすべてのディスクに RAID アレイを構成します。コントローラがこのレベルをサポートする場合、ディスク数によって RAID レベルが決定されます。

- ディスク 1 台 : JBOD
- ディスク 2 台 : RAID 1
- ディスク 3 台 : RAID 5
- 4 台以上 : RAID 5、ディスク故障時のリカバリ付き

RAID 0

ストライピング(冗長なし):データの復元はできません。ハードディスクが故障した場合、ハードディスク上のデータは失われます。

RAID 1

ミラーリング:ハードディスクが故障して交換されると、データは自動的に再構成されます(リビルド)。追加のハードディスクをスタンバイディスクとして使用できる場合(「ホットスワップ」オプションを参照)、故障したディスクの代替として自動的にアクティブになり、故障したディスクからこのスタンバイディスクにデータが再構成(リビルド)されます。

RAID 5

分散パリティ情報:ハードディスクが故障して交換されると、データは自動的に再構成されます(リビルド)。追加のハードディスクをスタンバイディスクとして使用できる場合、故障したディスクの代わりに自動的にアクティブになり、故障したディスクからこのスタンバイディスクにデータが再構成(リビルド)されます。

RAID 6

RAID 5 と似ていますが、より高速です。

RAID 10

ストライピングとミラーリングの組み合わせです。RAID 1 より高速ですが、RAID 0 とは異なり、冗長です。

ブートパーティションサイズ

ブートパーティションのサイズを指定します。

最小値 ブートパーティションの最小サイズとして
25000 MB を指定します。

すべてのディスク ブートパーティションにディスク全体を指定します。
ク

手動設定 ブートパーティションに指定したサイズを使用します。

6.2.2 Windows インストールの設定

このステップでは、インストールする Windows OS の設定を行います。

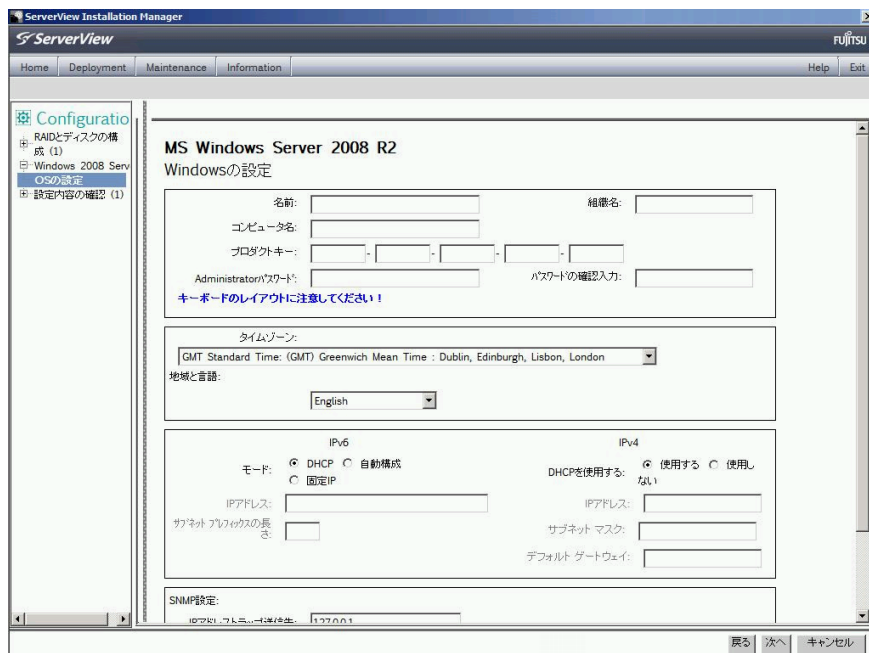


図 41: Windows のインストール(標準):Windows の設定

名前

デフォルトのターゲットシステムユーザ名です。この名前は、Windows ライセンスの所有者名と同一にしてください。

このエントリではユーザアカウントは指定されません。

組織名

デフォルトユーザの会社名または組織名を入力します。

コンピュータ名

ワークグループまたはドメイン内のコンピュータ名を入力します。



インストールプロセス中、**コンピュータ名**の英小文字は大文字に自動変換されます。

プロダクトキー(オプション)

Windows バージョンのライセンス番号を入力します。



クイックモードでインストールする場合：

添付の「インストールディスク」を使用してインストールを行う場合、プロダクトキーは入力しないでください。

ガイドモードで Windows 2008 をインストールする場合：

インストールメディアの選択ダイアログで「インストールディスク」を選択した場合、この入力フィールドはグレースアウトされます。



Windows の DSP バージョンを使用している場合、ライセンス番号は CD に記録されており、インストール中にコンフィギュレーションファイルに追加されます。その他のバージョンの Windows では、インストール後に初めて OS を起動するときにライセンス番号を入力する必要があります。

Administrator パスワード/ パスワードの確認入力

サーバの Administrator のパスワードを入力します。セキュリティ上の理由のため、2 回入力する必要があります。

Windows 2008 の場合は、以下の要件を満たす必要があります。

- 6 文字以上の有効なパスワードを使用します。
- 有効なパスワードは、以下の 3 つの基準を満たすものです。
 - 1 文字以上の大文字(A ~ Z、英字)
 - 1 文字以上の小文字(a ~ z、英字)
 - 1 文字以上の数字(0 ~ 9)
 - 1 文字以上のアルファベット以外の記号('!', '\$', '#', '%' など)

License Mode(Windows 2003 のみ)

ライセンスの有効性を定義します。

接続デバイス数/接続ユーザ数

各ライセンスは、1 台のワークステーションにつき有効です。

同時使用ユーザ数

このオプションでは、許可されたユーザ入力フィールドに、ライセンスで承認されるユーザ数を指定する必要があります。

許可されたユーザ(Windows 2003 のみ)

ライセンスで承認されるユーザ数です。

許可される最小ユーザ数は 5 です。

タイムゾーン

作業するタイムゾーンです。タイムゾーンはコンフィグレーションファイルにキーとして入力されます。Operating System – Recovery DVD for Windows Server 2008 R2 を使用して日本語 OS をインストールする場合、「**Japanese**」を選択します。

地域と言語

Windows インストールの言語を設定します。「Operating System – Recovery DVD Windows Server 2008 R2」を使用して日本語OS をインストールする場合、「**Japanese**」を選択します。

Internet Protocol バージョン 6 パラメータ(Windows 2008 のみ)

ここでインターネットプロトコルバージョン 6 パラメータ(IPv6)を設定します。

Mode

モードを設定します。

DHCP を使用する

IPv6 設定はネットワーク上の DHCP サーバから取得されます。

ネットワーク上に DHCP がない場合は、DHCP モードを有効にしないでください。

Autoconfiguration

ターゲットシステムは IPv6 自動構成プロセスを介してインターネット接続を開きます。ターゲットシステムは対応するルータと通信して、通信パラメータを検出します。

手動

Installation Manager は IPv6 パラメータを明示的に要求します。



以下で説明する IPv6 パラメータは、「手動」モードが選択されている場合にのみ表示されます。

IP アドレス

IPv6 アドレスです。

サブネットプレフィックスの長さ

サブネットプレフィックスの長さです。サブネットプレフィックスは、グローバルルーティングプレフィックスとサブネット ID で構成されています。

Internet Protocol バージョン 4 パラメータ

ここでインターネットプロトコルバージョン 4 パラメータ(IPv4)を設定します。

DHCP を使用する

DHCP を有効にすると、IPv4 設定はネットワーク上の DHCP サーバから取得されます。

はい

DHCP が有効になります。

いいえ

DHCP は有効になりません。



ネットワーク上に DHCP がない場合は、DHCP を有効にしないでください。有効にすると、サーバは IP アドレスを取得できないため、起動できません。



以下で説明する IPv4 パラメータは DHCP で「いいえ」が選択されている場合にのみ表示されます。

IP アドレス

IPv4 アドレスです。

サブネットマスク

サブネットマスクです。サブネットマスクは IP アドレスを使用して、アドレスに特定のサブネットを割り当てます。

ゲートウェイ

デフォルトゲートウェイコンピュータまたはデフォルトルータの IP アドレスを指定します。

ServerView Management Station の SNMP 設定

ターゲットシステムの SNMP サービスを設定して、ServerView Central Management Station とターゲットサーバ間の SNMP 通信を設定します。

トラップ送信先 IP アドレス

SNMP メッセージの送信先の IP アドレスを示します。

SNMP コミュニティ

ターゲットシステムへ SNMP クエリを送信できるコミュニティグループ名を入力します。この名前は、エージェントが管理プラットフォームに送信する SNMP メッセージのコンポーネントです。この設定は大文字と小文字を区別します。

SNMP はコミュニティグループを使用して、SNMP Manager のモニタされたオブジェクト (MIB オブジェクト) への読み書きアクセスの認証を制御します。コミュニティ名は各 SNMP メッセージに含まれ、メッセージの送信者を該当するコミュニティのメンバーとして特定します。SNMP Manager とエージェントは、同じコミュニティに属している場合にのみ通信できます。

コミュニティの権利

コミュニティ名に割り当てる権利を指定します。none、notify、read only、read and write、read、create の中から選択します。Read Only がデフォルト設定です。SVR 等の設定を ServerView Operations Manager で使用するには、このオプションを read write に設定します。

6.2.3 コンフィグレーションのバックアップ/インストールの開始

このステップでは、設定したパラメータが表示されます。これらのパラメータをファイルにバックアップして、示されたコンフィグレーションに基づいて自動インストールを開始できます。

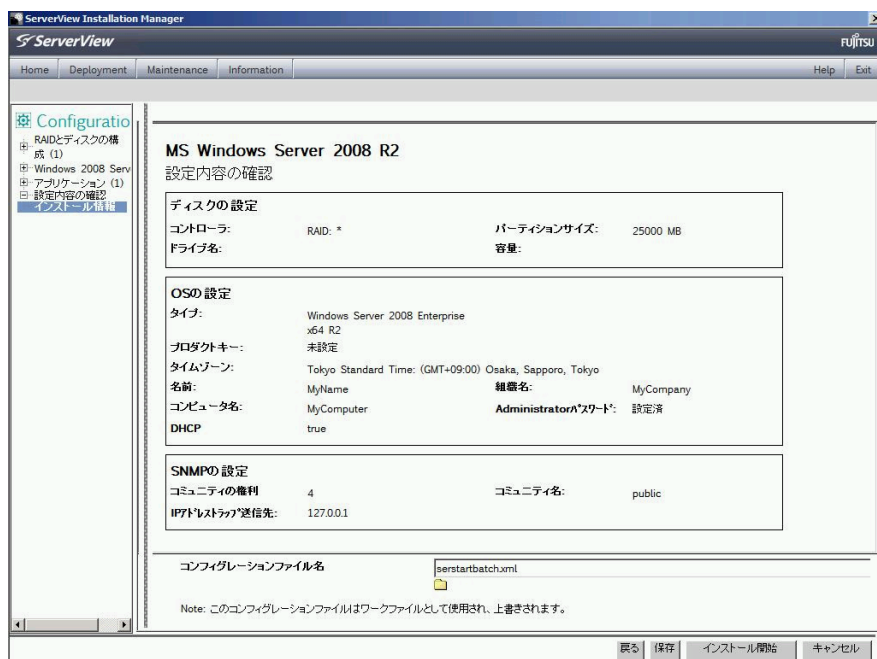


図 42: コンフィグレーションの保存/インストール開始

保存


設定されたパラメータを一時ファイル *SerStartBatch.xml* に保存します。自動インストールは開始されません。


外部バックアップメディア(USB メモリスティックなど)を指定した場合は、コンフィグレーションファイルはそのメディアに保存されます。

インストール開始

OS の自動インストールを開始します。

ローカルドライブをソースドライブとして選択した場合、Installation Manager から必要なメディア(CD/DVD) を挿入するよう求められます。この場合、メディアを挿入して「OK」をクリックします。

 Windows Server 2003 をインストールする場合、ライセンス許諾のウィンドウが表示されます。その場合は、EULA の内容を読みます。同意する場合は「適用」をクリックします。

 外部バックアップメディア(USB スティック) を使用している場合は、以下の点に注意してください。


- メディアを取り外さないでください。取り外すと、自動インストールプロセスが停止する場合があります(Windows Server 2008 x64 Edition のインストール時など)。
- Windows Server 2008 x64 Edition のインストールにV10.09.10 より前のInstallation Manager バージョンを使用すると、ターゲットシステムの再起動後に「**Select save location for the configuration file**」ダイアログが表示されません。

この場合は、以下の手順に従います。

1. 「local drive」オプションを選択して外部のバックアップメディアを選択します。
2. 「次へ」をクリックしてインストールを続行します。

インストールを開始した後、システムは再起動します。OS が起動する前に、システムのハードウェアが構成されます。

インストールが開始された後、システムのハードウェアが構成され、システムがリブートします。

 自動インストールの際に、ターゲットシステムは数回リブートすることがあります。

6.3 Windows のインストール(カスタム)

Windows のカスタムインストールは、以下の手順に従います。

- 一般的なシステム動作とリモートマネジメントコントローラを Server Configuration Manager を使用して設定する(オプション)
- RAIDとディスクの構成を使用してハードディスク/RAID コントローラを設定する
- Windows OS のインストールを設定する
- アプリケーションのインストールを設定する

フロッピーディスクまたは USB スティックをコンフィグレーションファイルの保存先メディアとして使用する場合、電源を入れる前にサーバに挿入します。「**Start-up**」ウィンドウで「**再スキャン**」を選択します。




USB スティックをWindows Server 2008 インストールのステータスバックアップメディアとして使用する場合、BIOS 設定のBoot メニューでUSB スティックを削除します。

フロッピーディスクまたは USB スティックを Windows Server 2008(64 ビット) インストールのコンフィグレーションファイルの保存先メディアとして使用する場合、BIOS でブート順序を変更します。ハードディスクをフロッピーディスクおよび USB スティックの上位に設定します。

前提条件

- ターゲットシステムでローカルでインストールを行う、またはDeploymentサーバでInstallation Manager を起動してリモートインストールを行う場合、以下の仕様に従う必要があります。
 - ローカルインストールの場合は、「**Installation Manager Deployment Process**」ウィンドウで「**ガイドモード**」インストールモードを選択する必要があります([28 ページの ターゲットシステムで Installation Manager を開始する](#) を参照)。
 - リモートインストールの場合は、「**ターゲットシステムの選択**」設定手順で、ターゲットシステムに必要な情報を指定する必要があります(デプロイメントサーバとの通信に使用される LAN アダプタの MAC アドレス、PRIMERGY システムタイプなど)([81 ページの ターゲットシステムの選択 \(リモートインストールのみ\)](#) を参照)。
- 「**自動インストール**」構成の**最初のウィンドウ**で、OS、OS の種類、サービスパックを選択しておく必要があります。
- 「**次へ**」をクリックする前に、追加設定を指定しておく必要があります。

6.3.1 Server Configuration Manager

 Server Configuration Manager 設定ステップを表示するには、インストールプロセスの設定の最初の画面で、「サーバ管理の設定を行う」オプションを選択しておく必要があります。

Server Configuration Manager にはいくつかのコンフィグレーションステップがあり、インストールプロセスの設定の他にターゲットシステムの追加設定を指定できます。

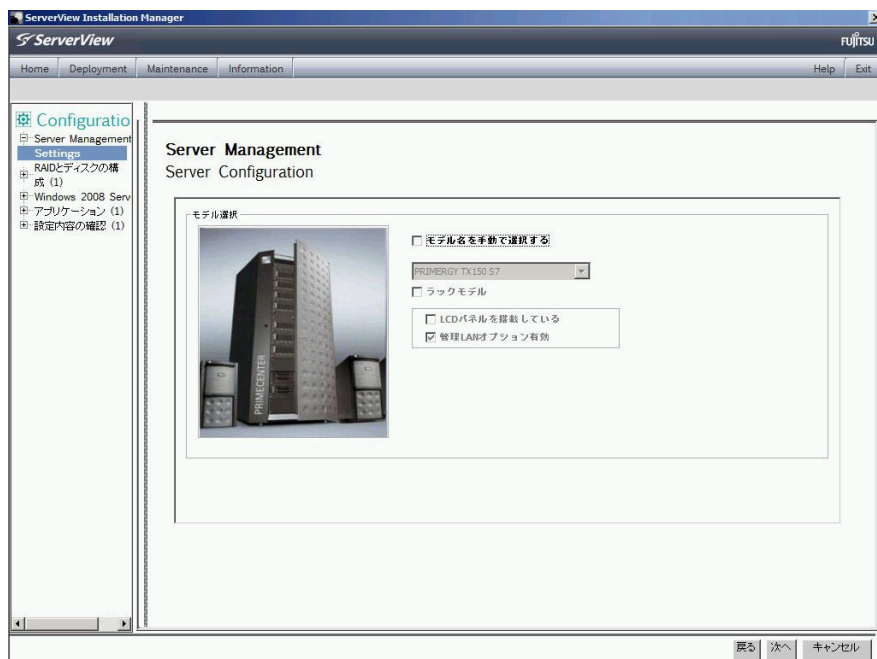


図 43: Windows のインストール(カスタム): Server Configuration Manager

Configuration Manager の説明は、[95 ページの Server Configuration Manager](#) を参照してください。

6.3.2 RAIDとディスクの構成

RAIDとディスクの構成を使用すると、ハードディスクと RAID コントローラの構成が簡単になります。

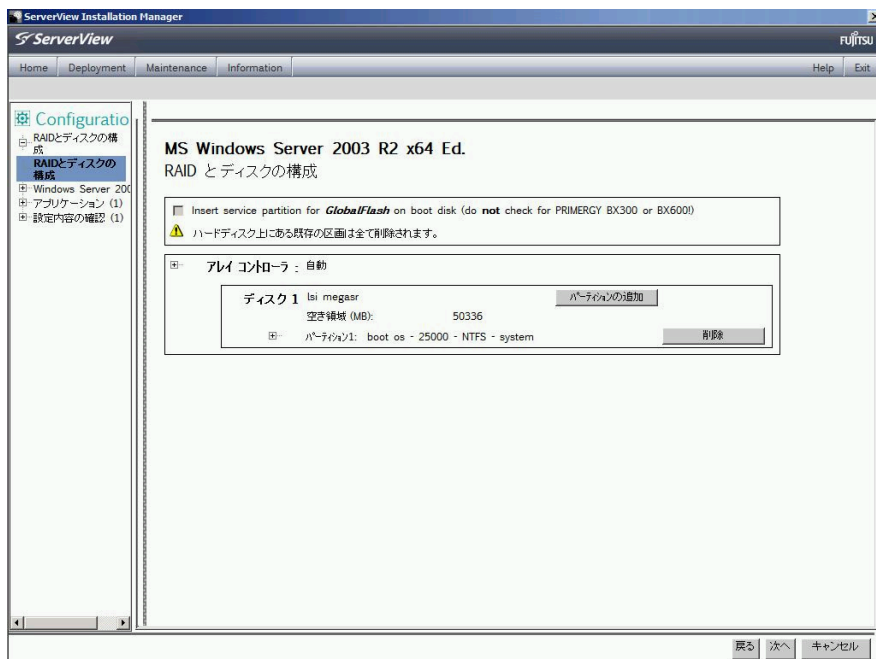


図 44: Windows のインストール(カスタム): RAIDとディスクの構成

ハードディスクと RAID コントローラの構成手順については、[110 ページの RAID とディスクの構成](#)を参照してください。

6.3.3 Windows Server 2003 の設定

6.3.3.1 基本設定

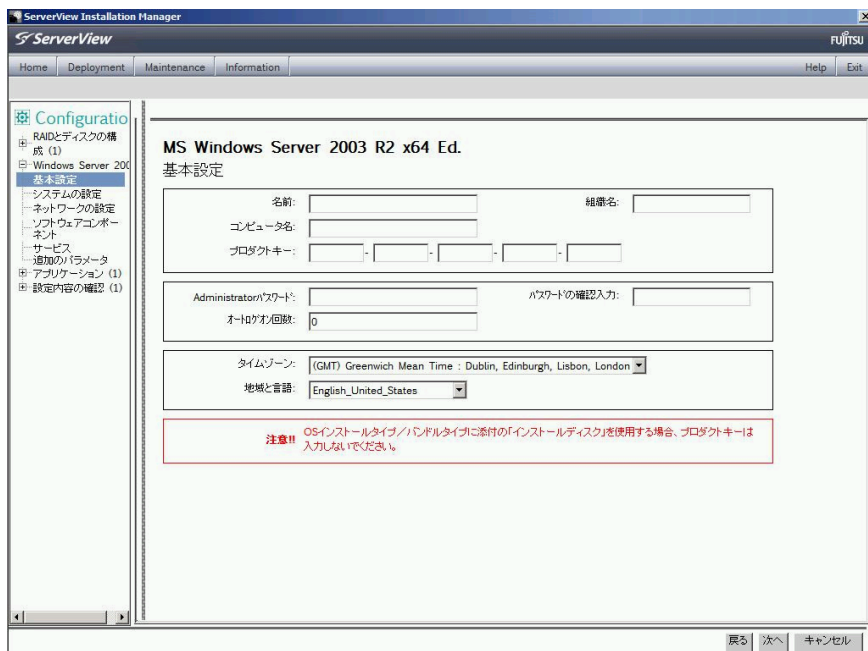


図 45: Windows のインストール(カスタム):基本設定

名前

デフォルトのターゲットシステムユーザ名です。この名前は、Windows ライセンスの所有者名と同一にしてください。


ユーザ名はユーザアカウントの指定ではありません。

組織名

デフォルトユーザの会社名または組織名を入力します。



コンピュータ名

ワークグループまたはドメイン内のコンピュータ名を入力します。

-  インストールプロセス中、コンピュータ名の英小文字は大文字に自動変換されます。

プロダクトキー(オプション)

Windows バージョンのライセンス番号を入力します。

-  クイックモードでインストールする場合：
添付の「インストールディスク」を使用してインストールを行う場合、プロダクトキーは入力しないでください。
-  Windows の DSP バージョンを使用している場合、ライセンス番号は CD に記録されており、インストール中にコンフィギュレーションファイルに追加されます。その他のバージョンの Windows では、インストール後に初めて OS を起動するときにライセンス番号を入力する必要があります。

Administrator パスワード/ パスワードの確認入力

サーバの Administrator のパスワードを入力します。セキュリティ上の理由のため、2 回入力する必要があります。このパスワードは 2 文字以上で、大文字と小文字、数字を含めてください。

自動ログオン回数

インストール後に Installation Manager が自動ログオンする回数を定義します。

タイムゾーン

作業するタイムゾーンです。タイムゾーンはコンフィギュレーションファイルにキーとして入力されます。日本語版 OS をインストールする場合は、「(GMT+09:00) 大阪、札幌、東京」を選択します。

地域と言語

ターゲットシステムに、OS の言語、キーボードレイアウト、および国固有の設定を定義します。日本語版 OS をインストールする場合、「日本語」を選択して、アプリケーションウィザードで日本語版ソフトウェアパッケージを指定します。

6.3.3.2 システムの設定

(ターゲットシステムパラメータとインストールソースの設定)

この手順では、ターゲットシステムについてのネットワーク識別情報を指定します。

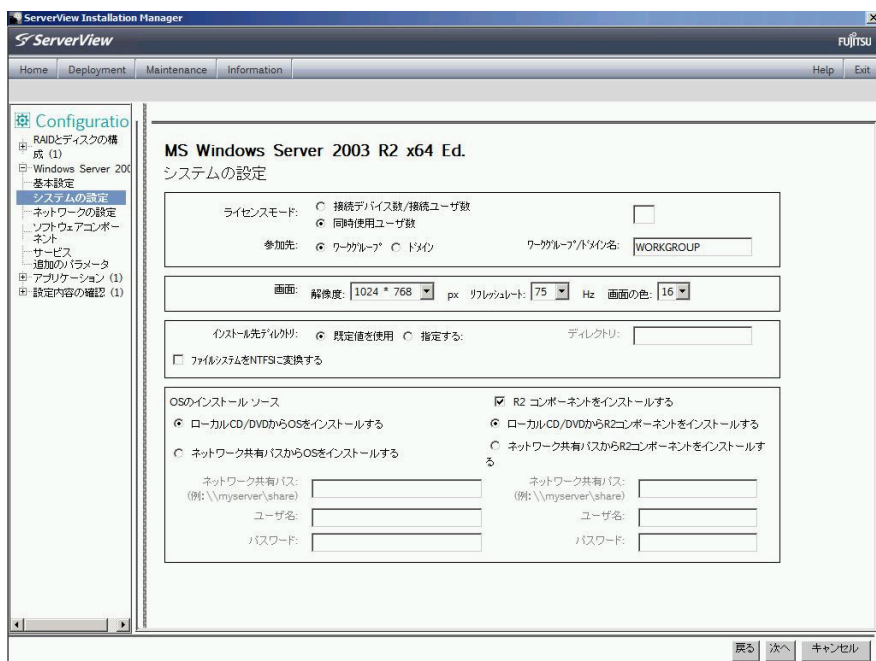


図 46: Windows のインストール(カスタマイズ): システムの設定ライセンスモード

ライセンスの有効性を定義します。

接続デバイス数/接続ユーザ数

各ライセンスは、1 台のワークステーションにつき有効です。

同時使用ユーザ数

このオプションでは、「User permitted」入力フィールドに、ライセンスで承認されるユーザ数を指定する必要があります。

User permitted

ライセンスで承認されるユーザ数です。

参加先

ターゲットシステムの所属グループを指定します。

ワークグループ

ワークグループに所属します。このワークグループも指定する必要があります。

ドメイン

ドメインに所属します。このドメインも指定する必要があります。

ワークグループ/ドメイン名

ワークグループ名またはドメイン名を入力します。

ドメインユーザ名

コンピュータをドメインに追加できるユーザアカウント。このエントリは、ドメインにシステムを追加する場合に必要です。この名前のコンピュータのエントリがドメイン内にすでに存在する場合は、ユーザアカウントも指定する必要があります。

パスワード

このユーザアカウントのパスワードです。

画面

初めて起動するときに Windows ユーザインターフェースの表示に使用される設定を指定します。

解像度

画面の解像度を、ピクセル単位で「横 × 縦」で設定します。接続したプラグアンドプレイ画面が設定した解像度で表示できない場合、初めて起動したときに Windows ディスプレイを標準 VGA にリセットできます。

リフレッシュレート

垂直画面リフレッシュレートを指定します。

画面の色

ビット数をピクセル単位で指定します。

インストール先ディレクトリ

オペレーティングシステムのインストール先ディレクトリを指定します。

デフォルトを使用

OS をデフォルトディレクトリにインストールします。

指定する

OS を指定したディレクトリにインストールします。

ファイルシステムを NTFS に変換する

インストール中の最初の再起動でファイルシステムを FAT から NTFS に変換します。ターゲットシステムがすでに NTFS の場合、関連したメッセージが表示されます。

OS のインストールソース

オペレーティングシステムのインストールパッケージの場所を定義します。

R2 コンポーネントをインストールする(R2 バージョンのみ)

指定したネットワークソースから Windows Server 2003 R2 コンポーネントをインストールします。

ローカル CD/DVD から OS をインストールする(ローカルインストールのみ)

ローカル DVD ドライブから OS をインストールします。

ネットワーク共有パスから OS をインストールする

オペレーティングシステムを指定したネットワークドライブからインストールします。

ネットワーク共有パス

UNC 形式のネットワークドライブのパスは

\\<server>\<path> です(例: \\myserver\share)。

ユーザ名

ネットワークドライブへのアクセスに必要な権限を持つユーザアカウントを入力します。URL で参照され、リソースを提供するコンピュータにアカウントが存在する必要があります。

アカウントは、上記で指定されたパスのディレクトリに対する読み込み権限をコンピュータ上で持っている必要があります。

パスワード

このユーザアカウントのパスワードです。

6.3.3.3 ネットワークの設定

このダイアログボックスでは、ネットワークカードのポートで通信を可能にするために使用するプロトコルの設定を行います。

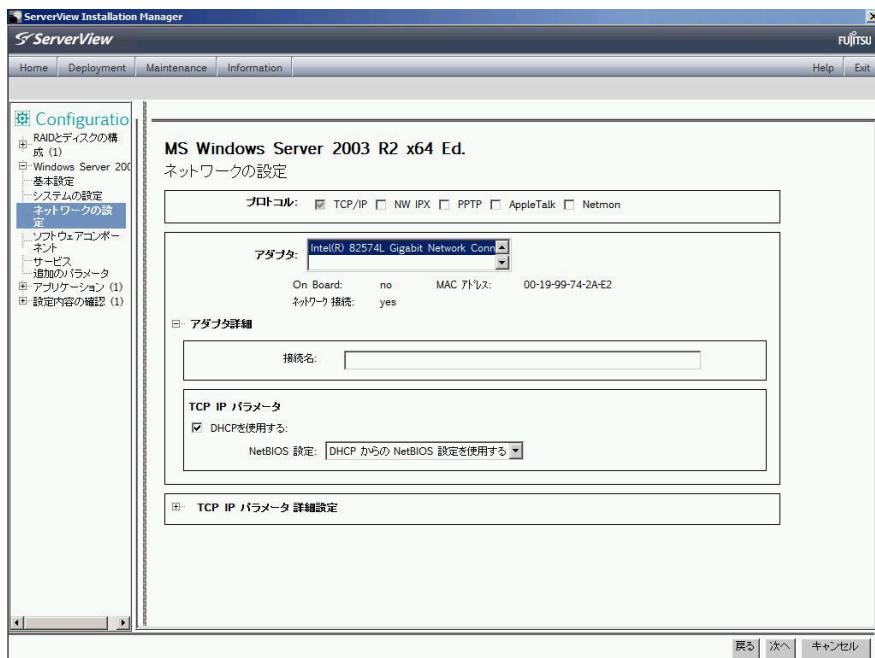


図 47: Windows のインストール(カスタム): ネットワークの設定

プロトコル

Windows でサポートするプロトコルのリストを表示します。

TCP/IP

選択したアダプタのインターネットプロトコルを選択します。設定パラメータ(TCP IP パラメータ)とセキュリティパラメータ(TCP IP パラメータ詳細設定)は区別されます。

NW IPX

Novell Netware の IPX プロトコルを選択します。設定パラメータ(**IPX パラメータ**)とセキュリティパラメータ(**IPX パラメータ詳細設定**)は区別されます。

PPTP

Point to Point Tunneling Protocol を選択します(追加パラメータなし)。

AppleTalk

AppleTalk プロトコルを選択します(追加パラメータなし)。

NetMon

Network Monitor プロトコルを選択します(追加パラメータなし)。

アダプタ

「アダプタ」では、ターゲットシステムの LAN アダプタ(ネットワークカード)を指定します。

Installation Manager がターゲットシステムを認識するかどうかによって、以下のように処理されます。

- ターゲットシステムにローカルインストールする場合、およびオンラインリモートインストールする場合は、Installation Manager にターゲットシステムの LAN アダプタのリストが表示されます。次にこのリストから、ターゲットシステムで有効にする LAN アダプタを選択します。
- オフラインリモートインストールの場合、Installation Manager はターゲットシステムを認識しません。この場合、「追加」ボタンを使用して、ターゲットシステムの LAN アダプタを Installation Manager に認識させる必要があります。次にこのリストから、ターゲットシステムで有効にする LAN アダプタを選択します。

remove

選択したアダプタをリモートインストールの設定から削除します。

追加

リモートインストールの新しいアダプタを作成します。

アダプタ詳細

選択したアダプタに使用できるオプションを表示します。

接続名

ネットワーク接続名

TCP/IP パラメータ

TCP/IP 設定のパラメータです。

DHCP を使用する

ターゲットシステムは、IP アドレスと追加のコンフィグレーションパラメータを DHCP を使用する サーバから取得します。このオプションのチェックを外すと、固定 IP 設定のパラメータが表示されます。

IP アドレス

選択したアダプタの IP アドレスを指定します。

サブネットマスク

IPv4 のみ: 選択したアダプタのサブネットマスクを指定します。サブネットマスクは、IP アドレスに特定のサブネットを割り当てます。

ゲートウェイ

ゲートウェイ(ホスト、ルータ)の IP アドレスを指定します。

追加の TCP/IP パラメータの設定

IP アドレスを追加し、以下を設定します。

- IP アドレス
- サブネットマスクまたはサブネットプレフィックス
- デフォルトゲートウェイ

DNS サーバの詳細設定

DNS 設定のパラメータを表示します。

- DNS ドメイン名
- DNS サーバ: DNS サーバの IP アドレス。「add」を選択して、各アダプタごとに最大 10 台の DNS サーバを指定できます。
- 削除: 選択した DNS サーバを削除します。

WINS サーバの詳細設定

WINS 設定のパラメータを表示します。

- **WINS を使用する** : 指定した WINS サーバを有効または無効にします。
- **WINS サーバ** : WINS サーバの IP アドレス。「**追加**」を選択して、各アダプタごとに最大 10 台の WINS サーバを指定できます。
- **「削除」**を選択して、選択した WINS サーバを削除することができます。

NetBIOS オプション

ターゲットシステムの NetBIOS プロトコルの設定を行います。

- DHCP からの NetBIOS サーバの設定を使用する
- NetBIOS over TCP/IP を有効にする : 以前の OS または特定のシステム機能との通信のために、指定します。
- NetBIOS over TCP/IP を無効にする

TCP/IP パラメータの詳細設定

TCP/IP 設定のセキュリティパラメータを表示します。

DNS サフィックス

DNS サーバで検索される順序で定義されたサフィックスのリストを表示します。

remove

選択したサフィックスを削除します。

追加

「DNS サフィックス」ダイアログボックスを開き、新しいサフィックスを追加します。サフィックスはドメインを示し、コンピュータ名に追加します(例: cswatcp.reskit.com)。

LMHosts の参照を有効にする

LMHosts の参照を有効にします。例: lmhosts

TCP/IP フィルタリングを有効にする

TCP/IP フィルタリングが、ポートとプロトコルによって受信 IP パッケージに適用されます。

DNS デボルブを有効にする

DNS キャッシュリゾルバが未修飾クエリを受信した場合、DNS デボルブを有効にします。

停止ゲートウェイの検出機能を有効にする

Dead Gateway Detection を有効にします。

デフォルトゲートウェイを使用する

TCP/IP プロトコルで事前定義したゲートウェイを使用します。

ICMPRedirect を使用する

ICMP リダイレクトで OSPF が生成したルートを有効にします。



ターゲットシステムが RAS サーバの場合、最後の 3 つのオプションのみ選択してください。

IPX パラメータの詳細設定(NW IPX のみ)

IPX コンフィグレーションのオプションパラメータを表示します。

内部ネットワーク番号

コントロールパネルに表示する内部ネットワーク番号を指定します。

RIP ルータを有効にする

Windows 内部の RIP ルータを有効にします。

専用ルータとしてインストールする

追加サービスをアクティブにせず、ターゲットシステムを専用ルータとしてインストールします。

6.3.3.4 ソフトウェアコンポーネント

このダイアログボックスでは、Installation Manager で OS にプレインストールする Windows 2003 コンポーネントを指定します。

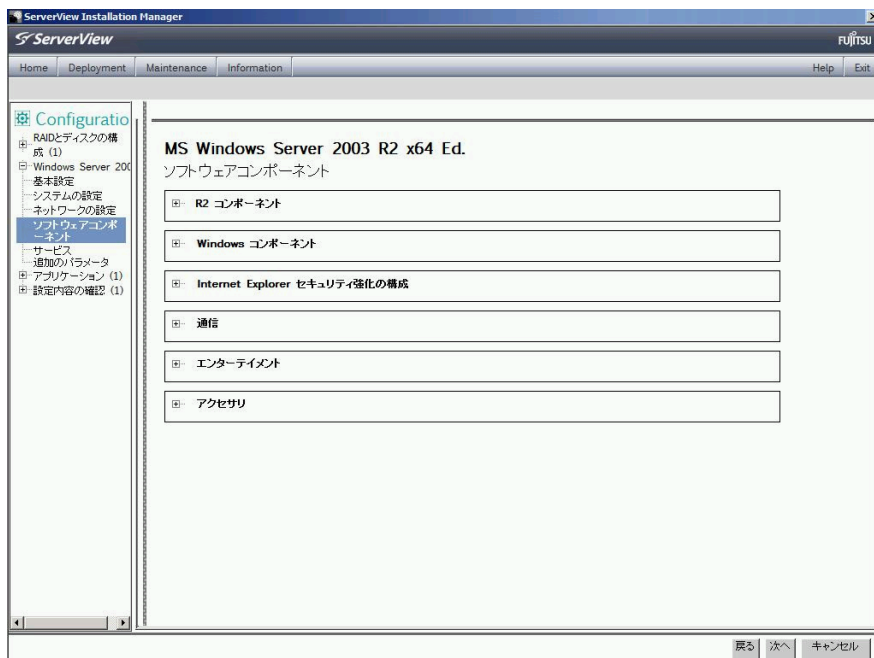


図 48: Windows のインストール(カスタム): ソフトウェアコンポーネントの選択/設定

R2 コンポーネント(R2 のみ)

R2 コンポーネントに選択できるサービスを表示します。



ボタンがあるサービスを設定できます。

フェデレーションサービス(ADFS)

ADFS Windows フェデレーションサービスを設定します。

デジタル証明書

トークンの署名の証明書を入力します。

ポリシーファイルのパス

ポリシーファイルへの絶対パスを入力します。

フェデレーションファイルプロキシ

フェデレーションサービスプロキシを、SSL による安全なパッシブクライアントに設定します。

SSL デジタル証明書

トークンの署名の証明書を入力します。

DNS ホスト名

サービスプロキシの DNS 名を入力します。

Windows SharePoint Services

SharePoint Services を設定して、Web ベースのチームコラボレーションを可能にします。

使用できる SQL サーバ

コンフィグレーションデータベースがある、SQL サーバ搭載のコンピュータを示します。

WMSDE のインストールフォルダ

WMSDE を保存するディレクトリ。全文検索に必要です。

フルアンインストール

SharePoint Services のフルアンインストールを可能にします。

ログファイルのフルパス

ログ分析に使用する SharePoint Services のログファイルの格納場所の絶対パスを入力します。

プロビジョン

SharePoint 製品とテクノロジーが独立モードでインストールされている場合に、ターゲットシステムでサービスを使用可能にし、サービスを「オンライン」として定義します。サービスのプロビジョンは、サービスが登録されていることも保証します。

Windows コンポーネント

Windows 2003 で使用できるオプションのコンポーネントを表示します。



ボタンで示すコンポーネントを設定できます。

ターミナル サーバー

ターミナルサーバとリモートデスクトップを設定します。

このコンピュータにユーザがリモートで接続することを許可する

リモートデスクトップを設定して、他のコンピュータからの接続を許可または拒否します。

セキュリティモード

ターミナルサーバセッション中にターミナルサーバの認証モードを設定します。

完全なセキュリティ

完全なセキュリティモード(デフォルト)。

このオプションは最も安全な環境でアプリケーションを実行できます。

緩和されたセキュリティ

ユーザに権限を追加します。

Windows で認定されていない一部のアプリケーションでは、一部のレジストリおよび特定のシステムディレクトリへの書き込み権限を要求します。

このオプションを選択すると、ユーザはレジストリやシステムファイルを変更できます。

License Mode

ターミナルサーバのライセンスの有効性を指定します。

- 接続デバイス数/接続ユーザ数
- 接続ユーザ数

FTP サービス

FTP サーバの設定を行います。

FTP サーバのディレクトリ: FTP サーバのルートディレクトリを指定します。

World Wide Web(WWW)

Web サーバを設定します。

WWW サーバのディレクトリ: WWW サーバのルートディレクトリを指定します。

Internet Explorer セキュリティ強化の構成

選択できるセキュリティパラメータを表示します。

通信

追加できる通信プログラムを表示します。



ボタンで示すプログラムを設定できます。

メッセージキュー

Active Directory 統合

ターゲットシステムがドメインに含まれない場合は、Microsoft Server がメッセージキューを Active Directory に統合します。つまり、Active Directory は、すべての設定とステータス情報を保存できるように拡張されます。この設定は、Message Queuing の最小インストールの場合に推奨します。

Provide access to Active Directory and site recognition for downstream clients

ダウンレベルクライアントは Active Directory と Active Directory データベースのサイト認識にアクセスできます。

ルーティング サポート

MSMQ を通じて効率的なルーティングを有効にします。

トリガー

ターゲットサービスを有効にし、内容に基づいて、各受信メッセージをキューに入れます。各キューには COM コンポーネントまたは自己実行型プログラムが割り当てられます。

MSMQ HTTP サポート(WWW サービスが必要)

HTTP プロトコルを使用したメッセージの送受信を有効にします。WWW サービスコンポーネントが同時にインストールされることと IIS(Internet Information Server) が必要です。

エンターテイメント

選択できるエンターテイメントメディアを表示します。

アクセサリ

アクセサリコンポーネントを表示します。

6.3.3.5 サービス

このダイアログボックスでは、Installation Manager で OS に事前インストールするサービスを指定します。



ボタンがあるサービスを設定できます。

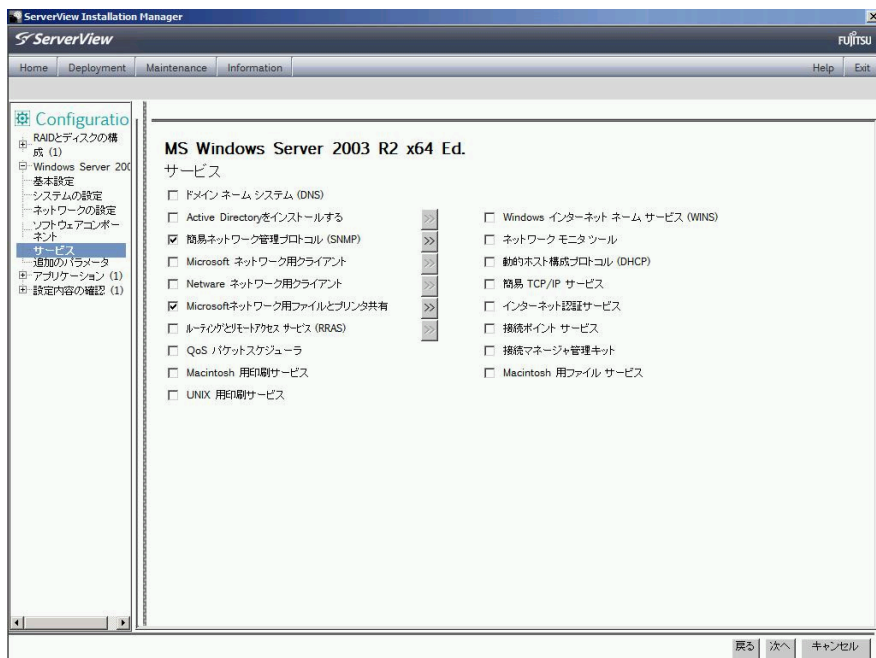


図 49: Windows のインストール(カスタム) : サービス

Active Directory をインストールする

ターゲットシステムをドメインコントローラとしてインストールします。以下のオプションから選択します。

新しいフォレストにドメインを作成する

新しいフォレストをドメインツリーに作成します。プライマリドメインコントローラになります。

データベースのフォルダ

ドメインデータベースを格納するディレクトリです。

ログのフォルダ

ドメインのログファイルを格納するディレクトリです。

SYSVOL フォルダの場所

ユーザログオンスクリプトのプロファイルを格納するディレクトリです(SysVol)。

新しいドメインの完全な DNS 名

新しいドメインの完全な DNS 名を入力します(abc.xyz.net など)。

ドメイン NetBIOS 名

新しいドメインの NetBIOS 名を入力します。my_domain などです。

既存ドメインの追加ドメインコントローラ

既存ドメインの追加ドメインコントローラを作成します。

データベースのフォルダ

ドメインデータベースを格納するディレクトリです。

ログのフォルダ

ドメインのログファイルを格納するディレクトリです。

SYSVOL フォルダの場所

ユーザログオンスクリプトのプロファイルを格納するディレクトリです(SysVol)。

ユーザ名

追加ドメインコントローラを作成する権限を持つユーザアカウントを入力します。

パスワード

このユーザアカウントのパスワードです。

ドメイン名

ユーザアカウントのドメイン

新しいドメインの完全な DNS 名

新しいドメインの完全な DNS 名を入力します(abc.xyz.net など)。

既存のドメインツリーに新しい子ドメインを作成する

このオプションでは、完全な構造の新しいドメインを作成し、プライマリドメインコントローラを作成します。

データベースのフォルダ

ドメインデータベースを格納するディレクトリです。

ログのフォルダ

ドメインのログファイルを格納するディレクトリです。

SYSVOL フォルダの場所

ユーザログオンスクリプトのプロファイルを格納するディレクトリです(SysVol)。

ユーザ名

新しいドメインとドメインコントローラを作成する権限を持つユーザアカウントを入力します。

パスワード

このユーザアカウントのパスワードです。

ドメイン名

ユーザアカウントのドメイン

親ドメイン名

その下に新しいドメインが作成される、ドメインを入力します。

子ドメイン名

その上に新しいドメインが作成される、ドメインを入力します。

ドメイン NetBIOS 名

新しいドメインの完全な NetBIOS 名を入力します。my_domain などです。

既存のフォレストに新しいドメインツリーを作成する

このオプションでは、ドメインフォレストに新しいドメイン構造を作成し、この構造内でプライマリドメインコントローラを作成します。

データベースのフォルダ

ドメインデータベースを格納するディレクトリです。

ログのフォルダ

ドメインのログファイルを格納するディレクトリです。

SYSVOL フォルダの場所

ユーザログオンスクリプトのプロファイルを格納するディレクトリです(SysVol)。

ユーザ名

新しいドメイン構造とドメインコントローラを作成する権限を持つユーザアカウントを入力します。

パスワード

このユーザアカウントのパスワードです。

ドメイン名

ユーザアカウントのドメイン

新しいドメインの完全な DNS 名

新しいドメインの完全な DNS 名を入力します(abc.xyz.net など)。

ドメイン NetBIOS 名

新しいドメインの完全な NetBIOS 名を入力します。my_domain などです。

簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP)

簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP) サービスをインストールします。

トラップ

SNMP エージェントのトラップ送信先の Management Station を指定します。

コミュニティ名

SNMP クエリをターゲットシステムに送信できるコミュニティ名です。この名前は、エージェントが管理プラットフォームに送信する SNMP メッセージのコンポーネントです。この設定は大文字と小文字を区別します。

SNMP はコミュニティを使用して、監視されるオブジェクト(MIB オブジェクト) への SNMP Manager による読み書きアクセスの認証を制御します。コミュニティ名は各 SNMP メッセージに含まれ、メッセージの送信者を該当するコミュニティのメンバーとして特定します。SNMP Manager とエージェントは、同じコミュニティに属している場合にのみ通信できます。

トラップ送信先

SNMP メッセージの送信先の IP アドレスを示します。アドレスを追加するには「**追加**」、削除するには「**削除**」をクリックします。

セキュリティ

SNMP メッセージのセキュリティパラメータを設定します。

認証トラップを送信する

SNMP メッセージが拒否された場合に、対応するターゲットシステムに通知します。認証されていないコミュニティまたはコンピュータから情報を要求されると、SNMP メッセージが拒否されます。

デフォルトのホストから SNMP パケットを受け付ける(localhost)

「ホスト名」リストに指定したコンピュータからのみ SNMP メッセージを受け付けます。このオプションを選択しない場合、すべてのホストからの SNMP パケットを受け付けます。

Read_only がデフォルト設定です。ASR などを持つ ServerView Operations Manager を使用して変更できないため、コミュニティの権限を **Read_write** に変更してください。

受け付けるホスト名(127.0.0.1 は常に含まれます)

SNMP メッセージを受け付けるコンピュータの IP アドレスを指定します。このリストには、IP アドレスを 3 つまで追加できます。

コミュニティ名

このリストには、ターゲットシステムがメッセージを受け付けるコミュニティ名が表示されます。各コミュニティ名に割り当てる権利(non-e、read、read_write)を指定し、コロンで区切ります。

エージェント

SNMP エージェントの情報。

連絡先

コンピュータに問題があった場合の連絡先を指定します。

場所

ターゲットシステムの場所を指定します。

サービス

提供される SNMP サービスを指定します。

- **物理** :このコンピュータでディスクやディスクドライブなどの物理デバイスを管理するかどうかを指定します。
- **データリンクとサブネットワーク** :ターゲットシステムはブリッジなどの TCP/IP サブネットまたはデータリンクを管理します。
- **End-to-End** :ターゲットシステムは IP ホストとして使用されます。
- **アプリケーション** :ターゲットシステムで、TCP/IP を使ってデータを送信するプログラムを使用します。
- **インターネット** :このコンピュータが IP ゲートウェイ(ルータ) であるかどうかを指定します。

Microsoft ネットワーク用クライアント

Microsoft ネットワークでリソースにアクセスするためのクライアントコンポーネントを設定します。DCE サーバやクライアントキットを使用しない場合は、この設定は必要ありません。

ドメイン

検索するドメインのリスト。ドメイン名を追加するには「追加」、削除するには「削除」をクリックします。

ネームサービスプロトコル

別のコンピュータのサービスを呼び出すためにネットワーク内の分散アプリケーションを許可する RPC プロトコルを指定します。RPC プロトコルを使用して、リモートでコンピュータを管理します。

ncacn_ip_tcp を選択した場合、ネットワークアドレスを入力する必要があります。

ネットワークアドレス

ネームサービスがインストールされているコンピュータの IP アドレスを入力します。

Netware ネットワーク用クライアント

Netware ネットワークでリソースにアクセスするためのクライアントコンポーネントを設定します。

デフォルトのツリーとコンテキスト、または優先サーバのいずれかを入力します。これらのエントリは、一方のみが有効です。

デフォルトのツリー

NDS ディレクトリツリー内のユーザオブジェクトの位置を指定します。コンテキストとともに、デフォルトツリーは NDS ファイルシステムにユーザオブジェクトの位置を示します。このファイルを使用して、Windows 2003 ベースのコンピュータとゲートウェイまたはクライアントのいずれかが自動的に接続されます。ユーザは NDS 環境でデフォルトツリーおよびコンテキストを指定するだけです。その他の環境の場合は、その代わりに優先サーバを入力します。

コンテキスト

デフォルトツリーのコンテキストを指定します。

優先サーバ

ユーザデータをチェックし、NetWare ネットワーク内のデータソースへのアクセスを許可するサーバの名前を入力します。

ログオンスクリプトを実行する

各ログオンに対して指定したログオンスクリプトを実行します。ログオンスクリプトでは、ログオン中にデフォルトで実行するアクションを指定します。

ファイルとプリンタ共有

ファイルとプリントサービスの設定を定義します。

サーバの最適化

ファイルとプリントサービスの実行時に、Windows がターゲットシステムのメインメモリロードを最適化する目的を定義します。

メモリの使用を最小にする

ファイルとプリントサービスによるメモリの使用を最小にします。

バランスをとる

すべてのファイルとプリントサービスの使用時の負荷を最適化します。

ファイル共有のデータスループットを最大にする

ファイル共有のデータスループットを最大にします。

ネットワークアプリケーションのデータスループットを最大にします。

ネットワークアプリケーションのデータスループットを最大にします。

LAN マネージャ 2.x クライアントにブラウザブロードキャストを行う

ターゲットシステムは LAN マネージャ 2.x クライアントにブラウザブロードキャストを送信します。

ルーティングとリモートアクセスサービス(RRAS)

ルーティングとリモートアクセスサービス(RRAS)を設定します。

RRASは Windows 2000 サーバがネットワークルータとして機能するのを許可し、Windows NT4.0 によって提供された RAS の機能性を高めます。

すべてのクライアントに同じネットワーク番号を割り当てる

すべてのクライアントに同じサブネットを割り当てます。

自動でネットワーク番号を割り当てる

すべてのクライアントに同じサブネットを割り当てます。

クライアントの IP アドレスの要求を許可する

TCP/IP クライアントは特定の IP アドレスを要求します。

クライアントの IPX ノード番号の要求を許可する。

TCP/IP クライアントは特定の IPX ノード番号を要求します。

ダイヤルインプロトコル

クライアントとの通信プロトコルです。

TCP/IP

TCP/IP クライアントのアクセス方法を指定します。

- ターゲットシステム内
- ネットワーク内

IPX

IPX クライアントのアクセス方法を指定します。

- ターゲットシステム内
- ネットワーク内

IP アドレスの範囲始め

クライアントが IP アドレスを要求できる場合、IP アドレスの範囲の始め。

IP アドレス の範囲終わり

クライアントが IP アドレスを要求できる場合、IP アドレスの範囲の終わり。

DHCP を使用する

クライアントはダイヤルアップネットワークの DHCP サーバから IP アドレスを要求します。

マルチリンク

より大きい帯域幅のモデムを通して複数の接続を可能にします。複数のモデムがインストールされている場合を除き、このオプションは無視されます。

IPX アドレス範囲の開始

クライアントが IPX ノード番号を要求できる場合、アドレス範囲の始まりを指定します。

RRAS の設定

ターゲットシステムでサポートするルータタイプを指定します(RRAS サーバ)。

Local RoutingOnly

リモートルーティングのみ実行します

Remote Access

リモートアクセスをサポートします。

Remote Access and Local Routing

リモートアクセスをサポートし、ローカルルーティングを実行します。

Local And Remote Routing

ローカルおよびリモートルーティングを実行します。

Remote Access and Local Routing

リモートアクセスをサポートし、ローカルおよびリモートルーティングを実行します

6.3.3.6 追加のパラメータ

このダイアログボックスではリモートアシスタンスの設定を行います。Windows リモートアシスタンスは Windows リモートデスクトップ技術を利用しているため、専門家がリモートターミナルサービスセッションでターゲットシステム管理者を支援できます。

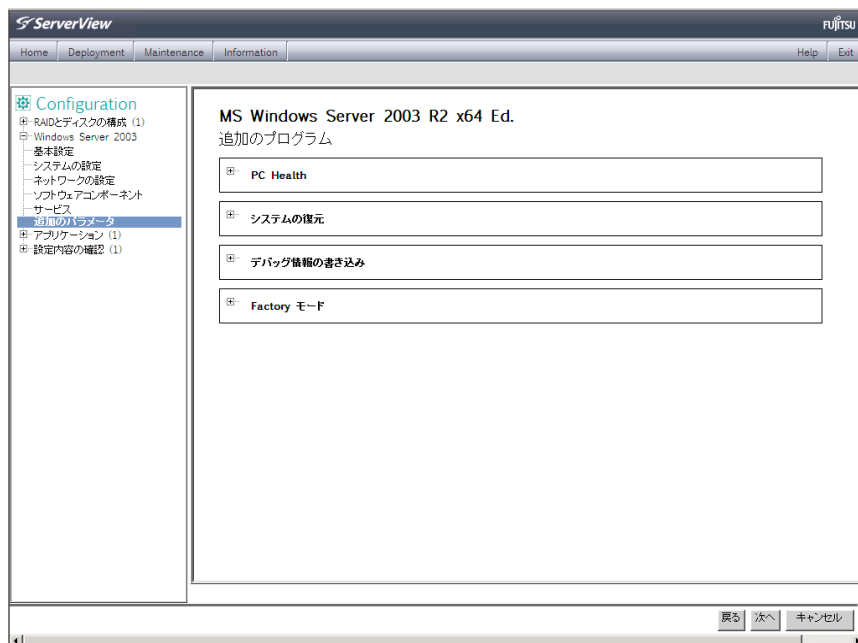


図 50: Windows Windows のインストール(カスタム) : 追加のプログラム

PC Health

エラー報告とリモートサービスに使用できるオプションを表示します。

エラー報告を有効にする

エラー報告を有効にし、追加のオプションを表示します。

Windows コンポーネントのエラーを報告する

すべての、または選択した Windows コンポーネントについて、エラー報告を有効にします。

カーネルのエラーを報告する

カーネルのエラーを報告します。

アプリケーションエラーを報告する

アプリケーションエラーを報告します。

全て

すべてのアプリケーションでエラーが報告されるようにするか、「アプリケーション」リストに指定されたアプリケーションにのみ報告されるようにするか、指定します。

アプリケーション

エラー報告を有効にするアプリケーションのリストを表示します。

追加

アプリケーションをアプリケーションリストに追加します。

remove

アプリケーションをアプリケーションリストから削除します。

リモートアシスタンスを有効にする

ユーザが確認するターゲットシステムのリモートアシスタンスを有効にし、提供するリモートアシスタンスの範囲を品質と時間の観点から定義できる2つの追加オプションを表示します。

このコンピュータがリモート制御されるのを許可する

ターゲットシステムのローカル画面を使用してフルコントロールを有効にします。また、リモートアシスタンスを使用してローカル画面を単に監視することもできます。

招待を有効にする最大時間 ... 時間

リモートアシスタンスの設定の有効期間。

要請されていないリモートアシスタンスを有効にする

要請されていないリモートアシスタンスを有効にします。

重大なエラーが発生した場合は有効にする

エラーメッセージを有効にします。

システムの復元

システムバックアップに必要な容量と、バックアップの処理方法の詳細の指定に使用するオプションを表示します。

デバッグ情報の書き込み

システムクラッシュ時にメモリダンプファイルを生成するかどうか、およびこのファイルのサイズを指定します。

Factory モード

Factory モードを有効にします。

6.3.4 Windows Server 2008 の設定

6.3.4.1 インストールイメージの選択

このダイアログボックスではインストールのタイプと、その詳細を選択します。

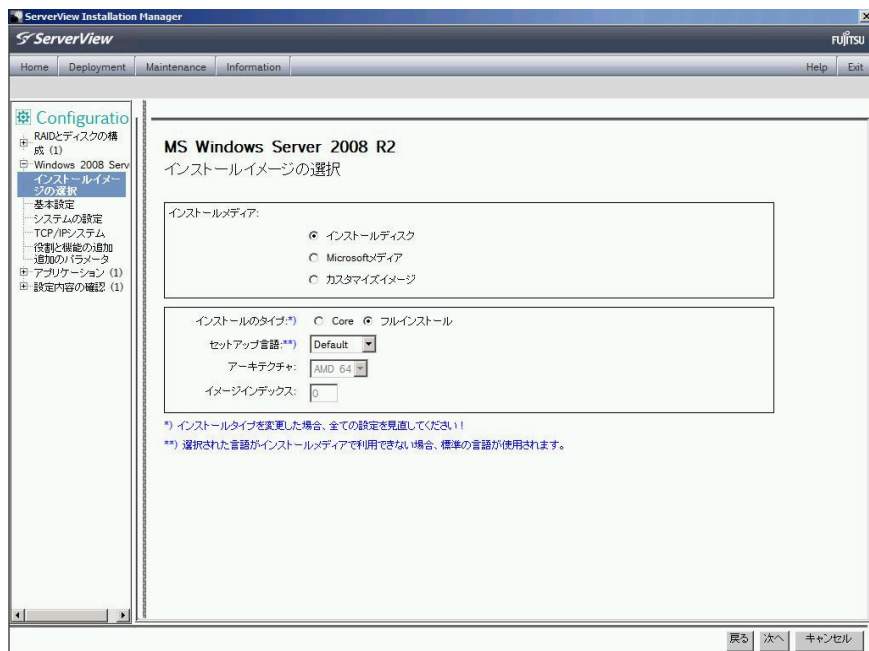


図 51: Windows のインストール(カスタム):インストールメディアの指定

インストールメディア

インストールメディアを選択します。

インストールディスク

Fujitsu OEM バージョンの Windows Server 2008 を収録した CD/DVD

Microsoft

オリジナルの Microsoft Windows Server 2008 インストール CD/DVD

カスタマイズイメージ

Microsoft Windows Server 2008 のカスタマイズインストール DVD または ISO イメージ。このオプションを選択すると、Windows Server 2008 のフルバージョンのみインストールできます。

インストールのタイプ

Windows 2008 のインストールのタイプです。



注意: 以下のいずれかのパラメータを変更した場合は、ウィザードでそれ以降のダイアログボックスをすべて実行し直す必要があります。

Core

Server Core のインストールを行います。Server Core では、グラフィカルユーザインターフェースを最小限にしたシステムで、Windows Server 2008 の特定のサーバの役割を実行できます。

フルインストール

Windows Server 2008 OS のフルインストールを行います。

セットアップ言語

Windows インストールの言語を選択します。Microsoft メディア、**カスタマイズイメージ**を使用する場合はインストールする言語を選択できません。

選択した言語が**Default**、またはインストールメディアにない場合、インストールメディアのデフォルト言語が使用されます。Operating System – Recovery DVD Windows Server 2008 R2 を使用して日本語OS をインストール「**Japanese**」を選択します。

する場合、

アーキテクチャ

ターゲットシステムの CPU のアーキテクチャ(Intel x86 / AMD64)。これは「**オペレーティングシステムの選択**」画面の「**OS の選択**」で選択したものです。アーキテクチャは変えることができません。ターゲットシステムへインストールを行うための必須の前提条件です。インストールメディアはこのアーキテクチャのタイプをサポートしている必要があります。

イメージインデックス

インストールメディアに関するイメージのインデックス。デフォルト設定は「0」で、カスタマイズイメージを使用する場合のみ設定を変更することができます。

6.3.4.2 基本設定

ターゲットシステムのデフォルトユーザの設定

このダイアログボックスでは、インストールするサーバのユーザの設定を行います。

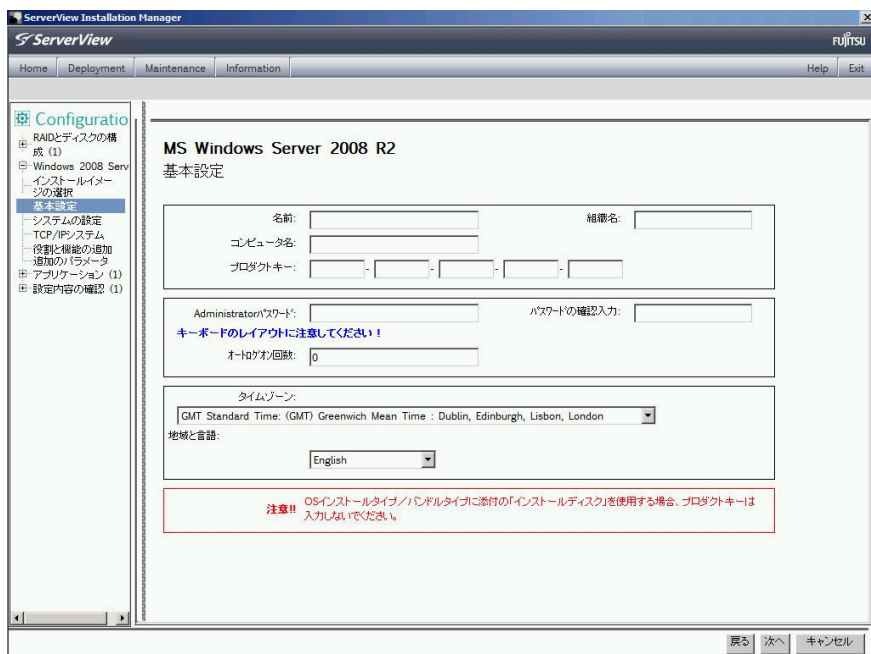


図 52: Windows のインストール(カスタム):基本設定

名前

デフォルトのターゲットシステムユーザ名です。この名前は、Windows ライセンスの所有者名と同一にしてください。

ユーザ名はユーザアカウントの指定ではありません。

組織名

デフォルトユーザの会社名または組織名を入力します。

コンピュータ名

ワークグループまたはドメイン内のコンピュータ名を入力します。



インストールプロセス中、**コンピュータ名**の英小文字は大文字に自動変換されます。

プロダクトキー(オプション)

Windows バージョンのライセンス番号を入力します。



クイックモードでインストールする場合:添付の「インストールディスク」を使用してインストールを行う場合、プロダクトキーは入力しないでください。

ガイドモードで Windows 2008 をインストールする場合:

インストールメディアの選択ダイアログで「インストールディスク」を選択した場合、この入力フィールドはグレースアウトされます。



Windows の DSP バージョンを使用している場合、ライセンス番号は CD に記録されており、インストール中にコンフィギュレーションファイルに追加されます。その他のバージョンの Windows では、インストール後に初めて OS を起動するときにライセンス番号を入力する必要があります。

Administrator パスワード

サーバの Administrator のパスワードを入力します。セキュリティ上の理由のため、2 回入力する必要があります。

Windows 2008 の場合は、以下の要件を満たす必要があります。

- 6 文字以上の有効なパスワードを使用します。
- 有効なパスワードは、以下の条件を 3 つ以上満たす必要があります。
 - 1 文字以上の大文字(A ~ Z、英字)
 - 1 文字以上の小文字(a ~ z、英字)
 - 1 文字以上の数字(0 ~ 9)
 - 1 文字以上のアルファベット以外の記号('!', '\$', '#', '%' など)

自動ログオン回数

インストール後に Installation Manager が自動ログオンする回数を定義します。

タイムゾーン

作業するタイムゾーンです。タイムゾーンはコンフィグレーションファイルにキーとして入力されます。日本語版 OS をインストールする場合は、「(GMT+09:00) 大阪、札幌、東京」を選択します。

クイックモードのパラメータ

DHCP を使用する

ターゲットシステムは、IP アドレスと追加のコンフィグレーションパラメータを DHCP を使用する サーバから取得します。「**使用しない**」を選択すると、固定 IP アドレス設定のパラメータが表示されます。

IP アドレス

選択したアダプタの IP アドレスを指定します。

サブネットマスク

IPv4 only: 選択したアダプタのサブネットマスクを指定します。サブネットマスクは、IP アドレスに特定のサブネットを割り当てます。

ゲートウェイ

デフォルトゲートウェイ(ホスト、ルータ)の IP アドレスを指定します。

ServerView Management Station の SNMP 設定

SNMP エージェントのトラップ送信先の Management Station を指定します。

トラップ送信先 IP アドレス

SNMP メッセージの送信先の IP アドレスを示します。

コミュニティ

ターゲットシステムへ SNMP クエリを送信できるコミュニティグループ名を入力します。この名前は、エージェントが管理プラットフォームに送信する SNMP メッセージのコンポーネントです。この設定は大文字と小文字を区別します。

SNMP はコミュニティグループを使用して、SNMP Manager のモニタされたオブジェクト(MIB オブジェクト)への読み書きアクセスの認証を制御します。コミュニティ名は各 SNMP メッセージに含まれ、メッセージの送信者を該当するコミュニティのメンバーとして特定します。SNMP Manager とエージェントは、同じコミュニティに属している場合にのみ通信できます。

コミュニティの権利

コミュニティ名に割り当てる権利を指定します。none、notify、read only、read and write、read、create から指定します。

ガイドモード/リモートインストール

地域と言語

ターゲットシステムに、OS の言語、キーボードレイアウト、および国固有の設定を定義します。

6.3.4.3 システムの設定

ターゲットシステムパラメータとインストールソースの設定

この手順では、ターゲットシステムについてのネットワーク識別情報を指定します。

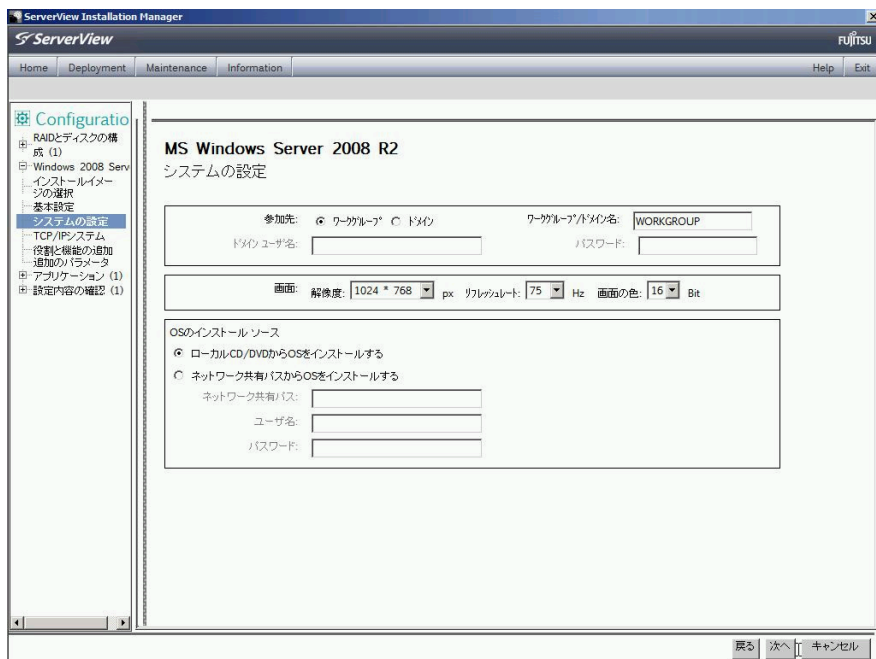


図 53: Windows のインストール(カスタム): システム設定

参加先

ターゲットシステムの所属グループを指定します。

ワークグループ

ワークグループに所属します。このワークグループも指定する必要があります。

ドメイン

ドメインに所属します。このドメインも指定する必要があります。

ワークグループ/ドメイン名

ワークグループ名またはドメイン名を入力します。

ドメインユーザ名

コンピュータをドメインに追加できるユーザアカウント。このエントリは、ドメインにシステムを追加する場合に必要です。この名前のコンピュータのエントリがドメイン内にすでに存在する場合は、ユーザアカウントも指定する必要があります。

パスワード

このユーザアカウントのパスワードです。

画面

初めて起動するときに Windows ユーザインターフェースの表示に使用される設定を指定します。

解像度

画面の解像度を、ピクセル単位で「横 × 縦」で設定します。接続したプラグアンドプレイ画面が設定した解像度で表示できない場合、初めて起動したときに Windows ディスプレイを標準 VGA にリセットできます。

リフレッシュレート

垂直画面リフレッシュレートを指定します。

画面の色

ビット数をピクセル単位で指定します。

OS のインストールソース

オペレーティングシステムのインストールパッケージの場所を定義します。

ローカル CD/DVD から OS をインストールする(ローカルインストールのみ)

ローカル DVD ドライブから OS をインストールします。

ネットワーク共有パスから OS をインストールする

オペレーティングシステムを指定したネットワークドライブからインストールします。

ネットワーク共有パス

UNC 形式のネットワークドライブのパスは

\\<server>\<path> です。例: \\myserver\share

ユーザ名

ネットワークドライブへのアクセスに必要な権限を持つユーザアカウントを入力します。URL で参照され、リソースを提供するコンピュータにアカウントが存在する必要があります。新しく作成したユーザは、上記で指定したディレクトリに対して読み取り権限を持つ必要があります。

Remote Password

このユーザアカウントのパスワードです。

6.3.4.4 ネットワークの設定

このダイアログボックスでは、ネットワークカードのポートで通信を可能にするために使用するプロトコルの設定を行います。

- ターゲットシステムにローカルインストールする場合、Installation Manager はこのリストにターゲットシステムの LAN アダプタを表示します。次にこのリストから、ターゲットシステムで有効にする LAN アダプタを選択します。
- リモートインストールの場合、Installation Manager はターゲットシステムを認識しません。この場合、「追加」ボタンを使用して、ターゲットシステムの LAN アダプタを Installation Manager に認識させる必要があります。次にこのリストから、ターゲットシステムで有効にする LAN アダプタを選択します。

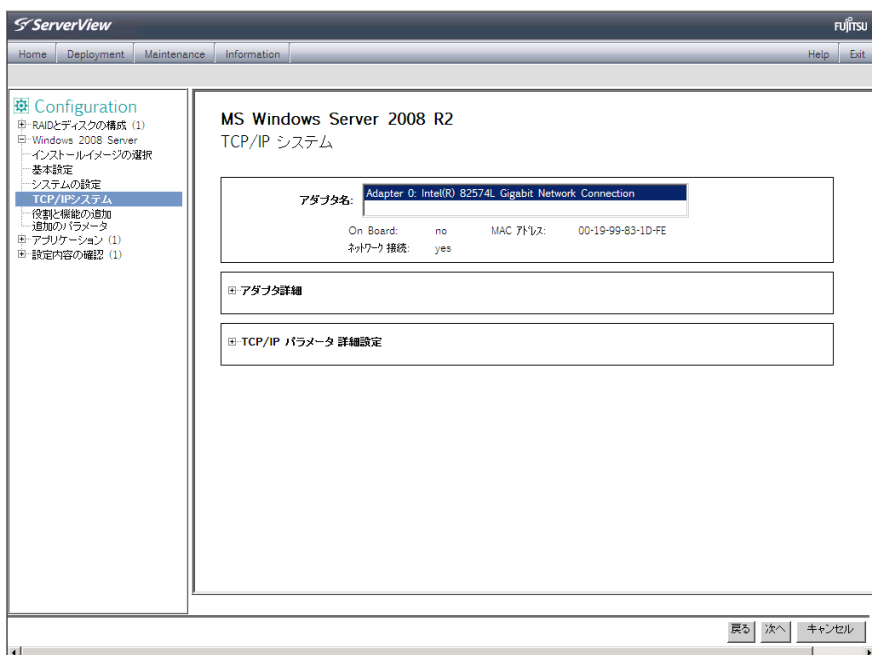


図 54: Windows のインストール(カスタム) : TCP/IPシステム

アダプタ名

「アダプタ名」では、ターゲットシステムに搭載されている LAN アダプタ(ネットワークカード)が表示されます。また、Installation Manager がターゲットシステムを認識するかどうかによって、LAN アダプタをターゲットシステムに構成する必要があります。

- ターゲットシステムにローカルインストールする場合、Installation Manager はこのリストにターゲットシステムの LAN アダプタを表示します。次にこのリストから、ターゲットシステムで有効にする LAN アダプタを選択します。
- リモートインストールの場合、Installation Manager はターゲットシステムを認識しません。この場合、「追加」ボタンを使用して、ターゲットシステムの LAN アダプタを Installation Manager に認識させる必要があります。次にこのリストから、ターゲットシステムで有効にする LAN アダプタを選択します。



複数のアダプタを設定する場合、アダプタの論理番号は、物理スロット順と必ずしも一致するわけではありません。これは BIOS でのみ定義されます。

解除

構成から選択されているアダプタを削除します。

追加

リストに LAN アダプタを含めます。

アダプタ詳細

ここで新しい LAN アダプタの TCP/IP 設定を行います。「**アダプタ**」ですでに設定されている選択されているアダプタに対して行った TCP/IP 設定がここに表示されます。

Internet Protocol バージョン 4 パラメータ

ここで、選択されている LAN アダプタの Internet Protocol バージョン 4 パラメータ (IPv4) を設定します。

DHCP を使用する

DHCP を有効にする場合、LAN アダプタは、ネットワークの DHCP サーバから LAN アダプタの IPv4 設定を受け取ります。

はい

DHCP が有効になります。

いいえ

DHCP は有効になりません。



ネットワーク上に DHCP がない場合は、DHCP を有効にしないでください。有効にすると、サーバは IP アドレスを取得できないため、起動できません。



選択された LAN アダプタを設定するための、以下で説明する IPv4 パラメータは、「**DHCP**」で「**いいえ**」を選択した場合のみ表示されます。

IP アドレス

LAN アダプタの IPv4 アドレスを指定します。

サブネットマスク

LAN アダプタのサブネットマスクを指定します。サブネットマスクは IP アドレスを使用して LAN アダプタにサブネットを割り当てます。

ゲートウェイ

LAN のデフォルトゲートウェイ/デフォルトルータの IP アドレスを指定します。

TCP/IP 設定の追加

ここで、追加の IP アドレスを設定できます(サブネットマスクおよびデフォルトゲートウェイ/デフォルトルータを含む)。

IP アドレス

IPv4 アドレスを設定するには、「**追加**」をクリックして表示されたダイアログに IPv4 アドレスとサブネットマスクを入力し、「**OK**」をクリックして確定します。

すでに設定されている IPv4 アドレスをリストから削除するには、IPv4 アドレスを選択して「**削除**」をクリックします。

ゲートウェイ

ゲートウェイを設定するには、「**追加**」をクリックして表示されたダイアログに IPv4 アドレスとゲートウェイを入力し、「**OK**」をクリックして確定します。

すでに設定されているゲートウェイをリストから削除するには、ゲートウェイをハイライトして「**削除**」をクリックします。

DNS サーバの詳細設定

DNS サーバの設定を行います。

DNS ドメイン名

DNS サーバまたはサーバへのクエリ用のデフォルトドメイン名です。

DNS サーバ

DNS サーバを設定するには、「追加」をクリックして該当する DNS サーバの IP アドレスを表示されたダイアログに入力し、「OK」をクリックして確定します。

すでに設定されているDNS サーバをリストから削除するには、サーバをハイライトして「削除」をクリックします。

DNS 更新の登録を無効にする

動的アップデートではありません。DNS サーバへの変更後、DNS クライアントコンピュータのリソースエントリの登録および動的アップデートを行うには、動的アップデートを使用します。

Enable "Adapter Domain Name Registration"

アダプタのドメイン登録を行います。

WINS サーバの詳細設定

WINS サーバの設定を行います。1 台または多くても 2 台の WINS サーバを設定すれば通常は十分です。

WINS サーバ

WINS サーバを設定するには、「追加」をクリックして WINS サーバの IP アドレスを表示されたダイアログに入力し、「OK」をクリックして確定します。

すでに設定されている WINS サーバをリストから削除するには、サーバをハイライトして「削除」をクリックします。

NetBIOS オプション

NetBIOS over TCP/IP の有効/無効を切り替えます。**NetBIOS over TCP/IP** は、ターゲットシステムが以前の OS と通信する場合または NetBIOS 機能を使用する場合のみ必要です。

以下のオプションから選択できます。

- DHCP からの NetBIOS 設定を使用する

DHCP が有効な場合のデフォルト設定です。

ターゲットシステムの LAN カードが DHCP を使用する場合、受信した DHCP Offer メッセージの DHCP オプションが選択され、DHCP サーバの構成によって、**NetBIOS over TCP/IP** を無効にするか、**NetBIOS over TCP/IP** を有効にして設定します。

- NetBIOS 設定を使用する

DHCP が無効な場合のデフォルト設定です。

NetBIOS over TCP/IP は、受信した DHCP オプションに関係なく有効になります。

- NetBIOS over TCP/IP を無効にする

NetBIOS over TCP/IP は、受信した DHCP オプションに関係なく有効になります。

Internet Protocol バージョン 6 パラメータ

ここで、選択されている LAN アダプタの Internet Protocol バージョン 6 パラメータ(IPv6)を設定します。

モード

LAN アダプタを設定するモードを設定します。

DHCP

LAN アダプタは、ネットワークの DHCP サーバから LAN アダプタの IPv6 設定を受け取ります。

ネットワーク上に DHCP がない場合は、DHCP モードを有効にしないでください。

自動設定

ターゲットシステムは IPv6 自動構成プロセスを介してインターネット接続を開きます。ターゲットシステムは対応するルータと通信して、通信パラメータを検出します。

手動設定

Installation Manager は、LAN アダプタの設定に必要な IPv6 パラメータを明示的に要求します。



選択された LAN アダプタを設定するための、以下で説明する IPv6 パラメータは、「**手動設定**」モードが選択されている場合のみ表示されます。

IP アドレス

LAN アダプタの IPv6 アドレスを指定します。

サブネットプレフィックスの長さです。

サブネットプレフィックスの長さです。サブネットプレフィックスは、グローバルルーティングプレフィックスとサブネット ID で構成されています。

TCP/IP 設定の追加

ここで、追加の IP アドレスを設定できます(サブネットマスクおよびデフォルトゲートウェイ/デフォルトルータを含む)。

IP アドレス

IPv6 アドレスを設定するには、「**追加**」をクリックして表示されたダイアログに IPv6 アドレスとサブネットマスクを入力し、「**OK**」をクリックして確定します。

すでに設定されている IPv6 アドレスをリストから削除するには、IPv6 アドレスを選択して「**削除**」をクリックします。

DNS サーバの詳細設定

DNS サーバの設定を行います。

DNS ドメイン名

DNS サーバまたはサーバへのクエリ用のデフォルトドメイン名です。

DNS サーバ

DNS サーバを設定するには、「**追加**」をクリックして該当する DNS サーバの IP アドレスを表示されたダイアログに入力し、「**OK**」をクリックして確定します。

すでに設定されている DNS サーバをリストから削除するには、サーバをハイライトして「**削除**」をクリックします。

TCP/IP パラメータの詳細設定

TCP/IP 設定のセキュリティパラメータを表示します。

これらのグループでは、ターゲットシステム(アダプタが有効)の TCP/IP 設定のセキュリティオプションを設定できます。

ドメイン名

DNS サーバまたはサーバへのクエリ用のデフォルトドメイン名です。

DNS サフィックス

DNS サーバが検索される順序で定義されたサフィックスのリストを表示します。

解除

選択したサフィックスを削除します。

追加

「DNS サフィックス」ダイアログボックスを開き、新しいサフィックスを追加します。サフィックスはドメインを示し、コンピュータ名に追加します(例: *cswatcp.reskit.com*)。

DNS デボルブを有効にする

Microsoft DNS キャッシュリゾルバは、DNS デボルブを使用して非修飾クエリを解決します。

ICMP リダイレクトを有効にする


OSPF(Open Shortest Path First)に生成されたルートの ICMP(Internet Control Message Protocol)リダイレクトを使用した上書きを許可します。



サーバルーティングまたはリモートアクセスサービスをターゲットシステムにインストールする場合のみこのオプションを有効にします。

6.3.4.5 サービス

このダイアログボックスでは、Installation Manager で OS に事前インストールするサービスを指定します。

ボタン  で示されるサービスを設定できます。

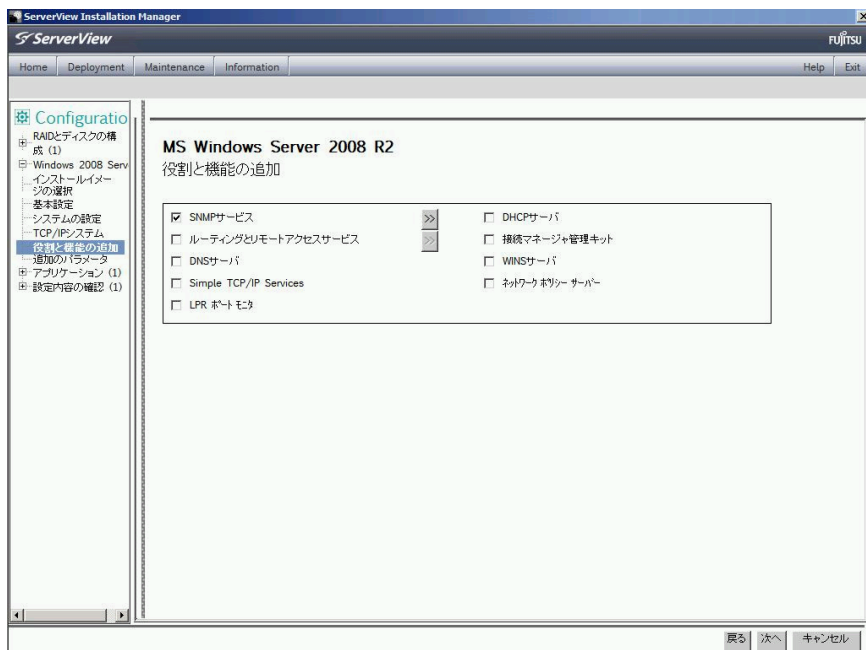


図 55: Windows のインストール(カスタム):役割と機能の追加

SNMPサービス

簡易ネットワーク管理プロトコル(SNMP) サービスをインストールします。

トラップ構成項目

SNMP エージェントのトラップ送信先の Management Station を指定します。

コミュニティ名

SNMP クエリをターゲットシステムに送信できるコミュニティ名です。この名前は、エージェントが管理プラットフォームに送信する SNMP メッセージのコンポーネントです。この設定は大文字と小文字を区別します。

SNMP はコミュニティを使用して、監視されるオブジェクト(MIB オブジェクト)への SNMP Manager による読み書きアクセスの認証を制御します。コミュニティ名は各 SNMP メッセージに含まれ、メッセージの送信者を該当するコミュニティのメンバーとして特定します。SNMP Manager とエージェントは、同じコミュニティに属している場合にのみ通信できます。

トラップ送信先

SNMP メッセージの送信先の IP アドレスを示します。アドレスを追加するには「**追加**」、削除するには「**削除**」をクリックします。

セキュリティ

コミュニティに SNMP セキュリティを設定します。

受け付けるコミュニティ名

このリストには、ターゲットシステムがメッセージを受け付けるコミュニティ名が表示されます。各コミュニティ名に権利(**none**、**read**、**read_write**)を指定してください。

認証トラップを送信する

ターゲットシステムのエージェントが SNMP の要求を拒否する場合、トラップを経由して要求している管理プラットフォームに通知します。

認証されていないコミュニティまたはコンピュータからの SNMP 要求は、常に SNMP エージェントから拒否されます。

Accept SNMP packets from the default source

SNMP パケットは `localhost` のみから(デフォルト)、または「受け付けるホスト名」フィールドで指定されたホストから、受理されます。

`read only` がデフォルト設定です。ASR などを持つ ServerView Operations Manager を使用して変更できないため、コミュニティの権限を `read_write` に変更してください。

受け付けるホスト名(127.0.0.1 は常に含まれます)

ターゲットシステムに受け付けられる SNMP パケットのコンピュータの IP アドレスまたはホスト名です。

エージェント

SNMP エージェントの情報。

連絡先

(オプション) コンピュータに問題があった場合の管理者などの連絡先を指定します。

場所

(オプション) ターゲットシステムの物理位置

サービス

提供される SNMP サービスを指定します。

物理

ターゲットシステムで、物理デバイス(ハードディスクまたはディスクドライブなど)を管理するかどうかを指定します。

アプリケーション

ターゲットシステムで、TCP/IP を使ってデータを送信するプログラムを使用します。

データリンクとサブネットワーク

ターゲットシステムは TCP/IP サブネットまたはデータリンク(ブリッジなど)を管理します。

インターネット

ターゲットシステムは IP ゲートウェイ(ルータ)として使用されます。

End-to-End

ターゲットシステムは IP ホストとして使用されます。

ルーティングとリモートアクセスサービス(RRAS)

ターゲットシステムでサポートするルータタイプを指定します(RRAS サーバ)。

ルートタイプ

ターゲットシステム(RRAS サーバ) がサポートするルータタイプを指定します。

RASをサポート

ターゲットシステムは RAS ルーティングをサポートします。

LANをサポート

ターゲットシステムは LAN ルーティングのみをサポートします。

RASとLANをサポート

ターゲットシステムは RAS ルーティングと LAN ルーティングの両方をサポートします。

WANをサポート

ターゲットシステムは WAN ルーティングをサポートします。

RASとWANをサポート

ターゲットシステムは RAS ルーティングと WAN ルーティングの両方をサポートします。

LANとWANをサポート

ターゲットシステムは LAN ルーティングと WAN ルーティングの両方をサポートします。

RASとLANとWANをサポート

ターゲットシステムは RAS、LAN、および WAN ルーティングをサポートします。

6.3.4.6 追加のパラメータ

このダイアログボックスではリモートアシスタンスの設定を行います。リモートサポートは Windows リモートデスクトップテクノロジーを利用しているため、専門家がリモートターミナルサービスセッションを使用して、インストールされたターゲットシステムをサポートできます。

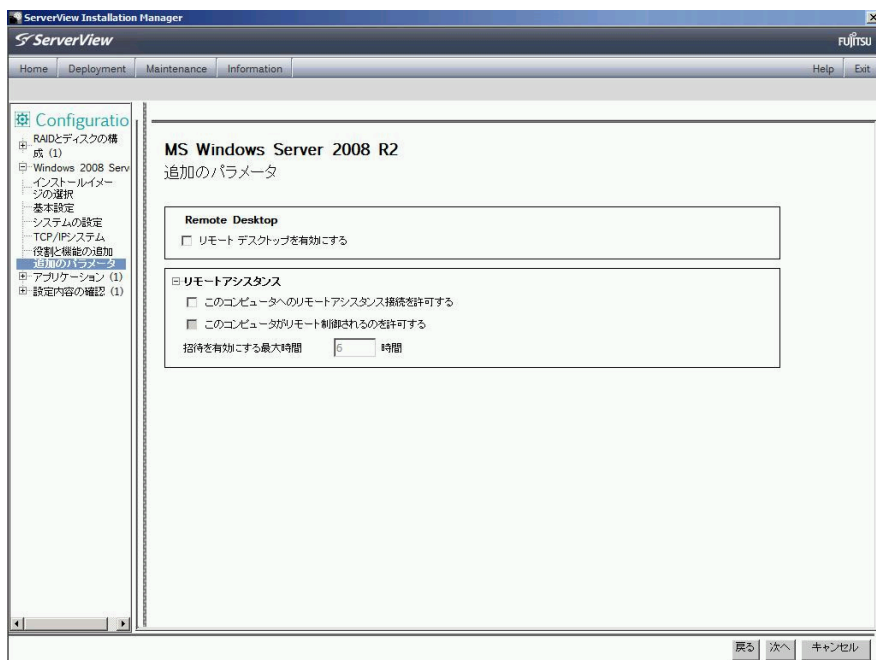


図 56: Windows のインストール(カスタム): 追加のパラメータ

Remote Desktop

リモートデスクトップを有効にする

リモートデスクトッププログラムからターゲットシステムにアクセスできるようにします。

リモートアシスタンス

以下のオプションを使用して、リモートアシスタンスの定性的な範囲および期間を定義できます。



OS の Server Core では使用できません。

このコンピュータへのリモートアシスタンス接続を許可する

ターゲットシステムでリモートアシスタンスを有効にします。

このコンピュータがリモート制御されるのを許可する

リモートサポートにターゲットシステムのローカルモニタのフルコントロールを与えます。また、リモートアシスタンスを使用してローカル画面を単に監視することもできます。

招待を有効にする最大時間

リモートアシスタンスの設定の有効期間。

6.3.5 アプリケーションの選択と設定

このダイアログボックスでは、Installation Manager が OS に加えてインストールすべきアプリケーションソフトウェアを選択できます。

Installation Manager はインストールするシステムにドライバとソフトウェアパッケージを直接コピーします。このようにすると、別のインストールツールを使用している場合でも、ユーザはリファレンスインストールを実行できます。



地域と言語のダイアログボックスで「日本語」を選択しなかった場合、日本語ソフトウェアパッケージは提供されません。

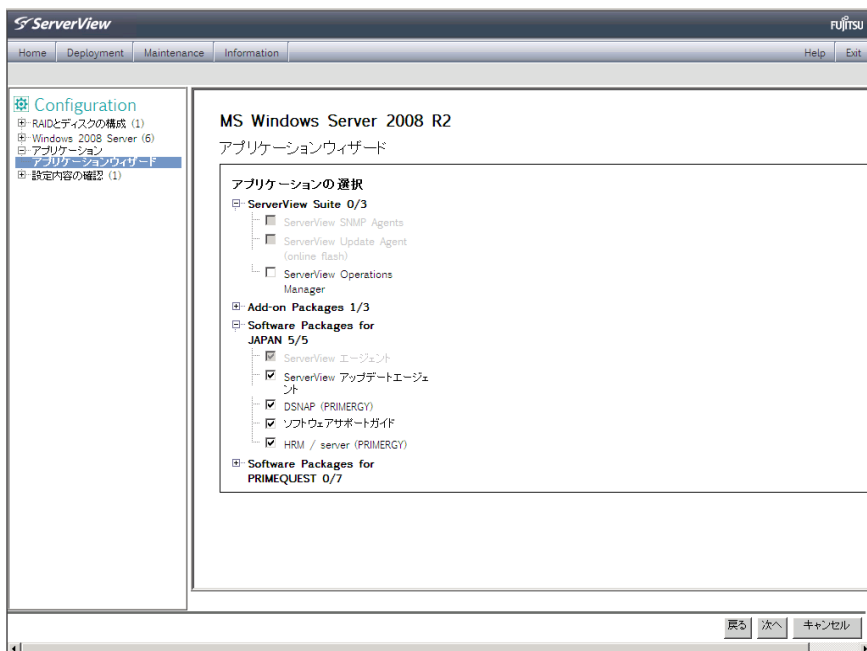


図 57: Windows のインストール(カスタム):アプリケーションウィザード

アプリケーションの選択

選択可能なプログラムグループが表示されます。



次の条件により、あらかじめパッケージが選択されている場合もあります。

- OS
- OS の言語
- PRIMERGY サーバのハードウェアのタイプ
- FUJITSU LTD および Fujitsu Technology Solutions の推奨



それぞれのグループ名に付いている(n/n)は、グループの中で利用できるプログラムの総数(右の数字)と、その中から選択したプログラムの数(左の数字)を示します。

「+」をクリックすると、そのグループで利用できるプログラムのリストが表示されます。

Add-on Packages (n/n)


追加ソフトウェア(例: Java Runtime Environment、カスタムスクリプトおよびパッケージ)

ServerView Suite (n/n)

ServerView Suite のコンポーネント


Software Packages for JAPAN (n/n)

日本向けのソフトウェアです。

 このパッケージは OS 言語が日本語の場合にのみ利用できます。

Software Packages for PRIMEQUEST (n/n)


PRIMEQUEST サーバで利用できるソフトウェアです。

 パッケージの一部のコンポーネントは、OS 言語が日本語の場合にのみ利用できます。

2 つに分けられた画面

オプションを選択したり、プログラム名をクリックしたりすると、ダイアログボックスが 2 つに分けられます。


- 選択できるプログラムは左側に表示されます。
- 右側には、選択されたアプリケーションに関する情報とインストールに必要なパラメータが表示されます。

 Windows Server OS およびコンフィグレーションウィザードで指定した設定によっては、表示されたアプリケーションの一部が選択できないこともあります。

アプリケーションで別のアプリケーションのインストールが要求される場合

一部のアプリケーションのインストールでは、他のアプリケーションのインストールも必要になります。

たとえば、*ServerView Suite - ServerView RAIDManager* には *Add-on packages - Java Runtime Environment* が必要になります。

 インフォメーションには、可能なソフトウェアの状態が表示されます。

インストールに伴い、他のアプリケーションのインストールが必要なアプリケーションを選択した場合、必要なアプリケーションが選択されていないと次のダイアログボックスが表示されます。

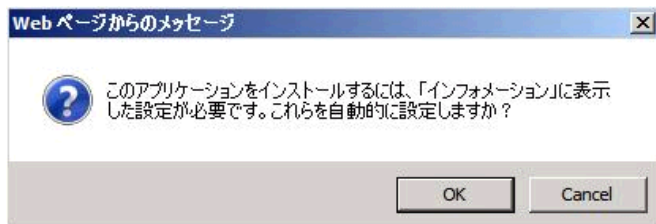


図 58: アプリケーションウィザードは、必要なパラメータを自動設定しようとします。

OK

アプリケーションウィザードが、必要なアプリケーションを選択しようとします。

アプリケーションウィザードが成功すると、選択が持続します。成功しなかった場合は、選択はリセットされます。

Cancel

選択をリセットします。

右側に表示された選択アプリケーションの詳細

説明

選択されたオプションの簡単な説明が表示されます。

選択したアプリケーションの設定

(一部のアプリケーションでは表示されません)

選択したアプリケーションの設定を指定します。

OS のインストールソース

Installation Manager のインストールファイルの格納場所を定義します。

ローカルインストール:

ServerView Suite DVD1

ServerView Suite DVD1 からインストールを行う場合に選択します。

ローカルCD/DVD

手元に所持しているCD/DVD を使用する場合に選択します。

ネットワーク共有

承認されたネットワークドライブです。

リモートパス

UNC 形式のネットワークドライブのパスは

\\<Server>\<Path>です。例: \\myserver\directory.

ユーザ名

ネットワークドライブに対し必要な権限を持ったユーザアカウントです。アカウントは、URL が参照し、リソースを提供するコンピュータ上に存在する必要があります。新しく作成されたユーザは、上記で指定されたパスのディレクトリに対する読み込み権限をコンピュータ上で持っている必要があります。

Remote Password

このユーザアカウントのパスワードです。

リモートインストール:

ServerView Installation Manager data packages

リモートインストール用の Installation Manager のデータパッケージです(Deployment サーバ上)。

ネットワーク共有

承認されたネットワークドライブです。

リモートパス

UNC 形式のネットワークドライブのパスは

\\<Server>\<Path>です。例: \\myserver\directory.

リモートユーザ名

ネットワークドライブに対し必要な権限を持ったユーザアカウントです。アカウントは、URL が参照し、リソースを提供するコンピュータ上に存在する必要があります。新しく作成されたユーザは、上記で指定されたパスのディレクトリに対する読み込み権限をコンピュータ上で持っている必要があります。

Remote Password

このユーザアカウントのパスワードです。

インフォメーション

選択されたプログラムのインストール要件として可能性のある情報(特定のサービスまたはアプリケーションを同時にインストールする必要があるなど)を提供します。

6.3.6 設定値のバックアップ/インストールの開始

設定情報の確認画面が表示されます。これらのパラメータをファイルにバックアップして、示されたコンフィグレーションに基づいて自動インストールを開始できます。




図 59: Windows のインストール(カスタム): コンフィグレーションの保存/インストール開始


コンフィグレーションファイル名

コンフィグレーションファイル名(デフォルト名: `serstartbatch.xml`)を定義し、ここに設定パラメータが保存されます。

フォルダアイコンをクリックするとコンフィグレーションファイルの名前を指定するためのダイアログボックスが表示されます。

- ファイル名を指定できます(デフォルト名: `serstartbatch.xml`)。このデフォルト名は、任意の名前で上書きできます。
- Installation Manager がコンフィグレーションファイルを保存するフォルダを選択または作成できます。フォルダは以下の通り保存されます。
 - ローカルインストール(ガイドモードのみ):
フォルダはローカルバックアップメディアに保存されます。
 - リモートインストール:
フォルダは Installation Manager リポジトリの **configfiles** ディレクトリに保存されます。

 デフォルト名を設定データの長期バックアップに使用しないでください。

 ターゲットシステムでのローカルインストールの場合:
コンフィグレーションはガイドモードのみ保存できます。

コンフィグレーションファイルは、現在の Installation Manager プロセスに対して、一時ファイルとして作成されるものであり、Installation Manager を今後開始する場合には利用できません。

永久的にコンフィグレーションファイルを保存するには、外部メディアにバックアップします(例: メモリスティック)。


保存

設定したパラメータを「コンフィグレーションファイル名」ダイアログで指定したファイルにバックアップします。


自動インストールは開始されません。


インストール開始

オペレーティングシステムの自動インストールを開始して、設定したパラメータを「コンフィグレーションファイル名」ダイアログで指定したファイルにバックアップします。

 PXE ベースのリモートインストールを起動する方法については、[90 ページの PXE ベースのリモートインストールの開始](#)の章を参照。

ローカルドライブをソースドライブとして選択した場合、Installation Manager から必要なメディア(CD/DVD)を挿入するよう求められます。この場合、メディアを挿入して「OK」をクリックします。

 Windows Server 2003 をインストールする場合、ライセンス許諾のウィンドウが表示されます。その場合は、ライセンス許諾の内容を読みます。同意する場合は「適用」をクリックします。


 外部バックアップメディア(USB スティック)を使用している場合は、以下の点に注意してください。

- メディアを取り外さないでください。取り外すと、自動インストールプロセスが停止する場合があります(Windows Server 2008 x64 Edition のインストール時など)。
- Windows Server 2008 x64 Edition のインストールにV10.09.10 より前のInstallation Manager バージョンを使用すると、ターゲットシステムの再起動後に「Select save location for the configuration file」ダイアログが表示されます。

この場合は、以下の手順に従います。

1. 「local drive」オプションを選択して外部のバックアップメディアを選択します。
2. 「次へ」をクリックしてインストールを続行します。

PXE ベースのインストールを開始した後、ターゲットシステムはリブートされます。OS が起動する前に、ターゲットシステムのハードウェアが構成されます。

 自動インストールの際に、ターゲットシステムは数回リブートすることがあります。

Installation Monitor を使用して、リモートインストールの進捗状況とステータスを把握できます([257 ページの Installation Monitor - リモートインストールの監視の章を参照](#))。

7 Linux および VMware ESX の設定とインストールの開始

Linux または VMWare ESX オペレーティングシステムを設定するときに、Installation Manager のウィザードを使用して各設定ステップを順に進めることができます。また、各設定ステップを直接有効にして、自分で設定ステップの順序を決めることもできます。



ここでは、ウィザードに表示される順序で設定ステップを説明します。

7.1 ユーザーインターフェース

ウィザードのユーザーインターフェース構造は統一されています。

- 左側の領域では、ツリー構造の適切なリンクをクリックして直接設定ステップを選択できます。
- 右側の領域には、現在の設定のパラメータが表示されます。

7 Linux および VMware ESX の設定とインストールの開始

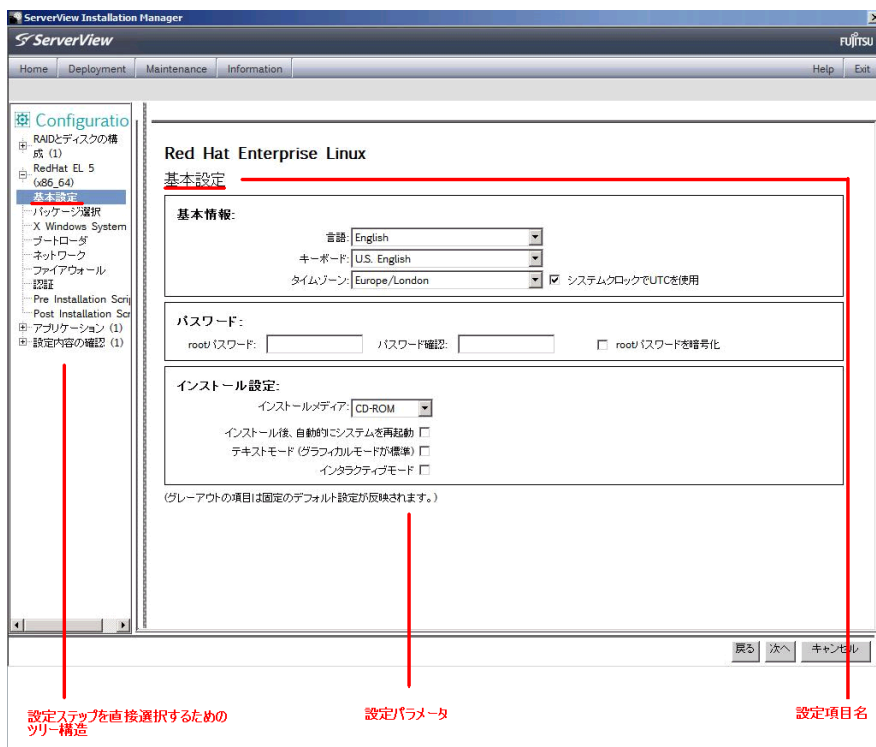


図 60: 自動インストールの設定用のユーザインターフェース

次へ

「次へ」をクリックして次の設定ステップに進みます。

戻る

「戻る」をクリックして前の設定ステップに進みます。

キャンセル

「キャンセル」をクリックして現在のウィザードで設定を中止します。

7.2 Linux/VMware ESX のインストール(標準)

Linux の標準インストールは、以下の手順に従います。

- RAIDとディスクの構成を使用してハードディスク/RAID コントローラを設定する
- Linux OS のインストールを設定する
- アプリケーションのインストールを設定する



必要な環境:

1. Installation Manager をターゲットシステムで起動し、ローカルインストールを開始しておく必要があります。
2. 「Installation Manager Deployment Process Selection」画面で「クイックモード」インストールモードを選択しておく必要があります。
3. 自動インストール設定の**最初の画面**で、オペレーティングシステム、オペレーティングシステムのタイプ、サービスパックを選択しておく必要があります。
4. その他の設定が完了したら「次へ」をクリックします。

7.2.1 RAIDとディスクの構成(標準)

このダイアログボックスで、ディスクと RAID コントローラを構成します。

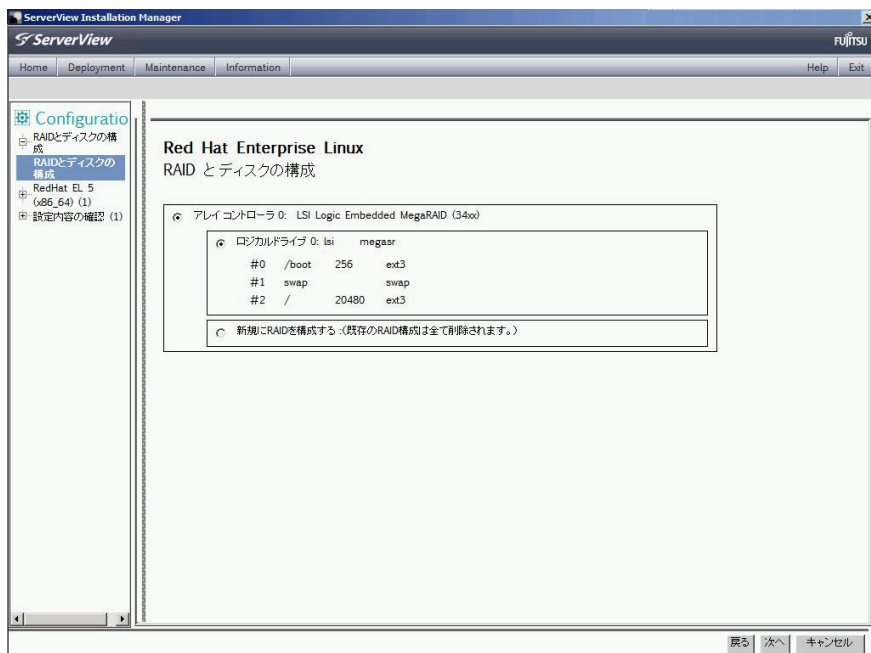


図 61: Linux/VMware のインストール(標準):RAIDとディスクの構成

アレイコントローラ

システムで検出されたアレイコントローラを表示します。

ロジカルドライブ 0


既存の RAID アレイを使用し、選択した RAID コントローラの構成を変更しません。この場合、ブートパーティションサイズのみを選択します。

新規に RAID を構成する

選択した RAID コントローラに新しい RAID アレイを構成します。このコントローラの既存のすべての RAID 構成がクリアされます。

RAID レベル

データセキュリティのレベルを指定します。

-  RAID レベルは、使用するコントローラの機能と、接続するハードディスク数に依存します。構成可能な RAID レベルのみが表示されます。

自動

搭載されているすべてのディスクに RAID アレイを構成します。RAID コントローラの機能と接続されたディスク数によって、コントローラがサポートする場合、RAID レベルが決定されます。

- ディスク 1 台 :JBOD
- ディスク 2 台 :RAID 1
- ディスク 3 台 :RAID 5(コントローラがレベル 5 をサポートする場合)
- 4 台以上 :RAID 5、ディスク故障時のリカバリ付き

RAID 0

Striping (no redundancy):データの復元はできません。ハードディスクが故障した場合、ハードディスク上のデータは失われます。

RAID 1

ミラーリング :ハードディスクが故障して交換されると、データは自動的に再構成されます(リビルド)。追加のハードディスクをスタンバイディスクとして使用できる場合(「ホットスペア」オプションを参照)、故障したディスクの代替として自動的にアクティブになり、故障したディスクからこのスタンバイディスクにデータが再構成(リビルド)されます。

RAID 5

分散パリティ情報: ハードディスクが故障して交換されると、データは自動的に再構成されます(リビルド)。追加のハードディスクをスタンバイディスクとして使用できる場合、故障したディスクの代わりに自動的にアクティブになり、故障したディスクからこのスタンバイディスクにデータが再構成(リビルド)されます。

RAID 6

RAID 5 と似ていますが、より高速です。

RAID 10

ストライピングとミラーリングの組み合わせです。RAID 1 より高速ですが、RAID 0 とは異なり、冗長です。

ブートパーティションサイズ

ブートパーティションのサイズを指定します。

最小値

ブートパーティションの最小サイズとして 25000 MB を指定します。

全てのディスク

ブートパーティションにディスク全体を指定します。

手動設定

ブートパーティションに指定したサイズを使用します。

7.2.2 Linux/VMware ESX 設定の指定

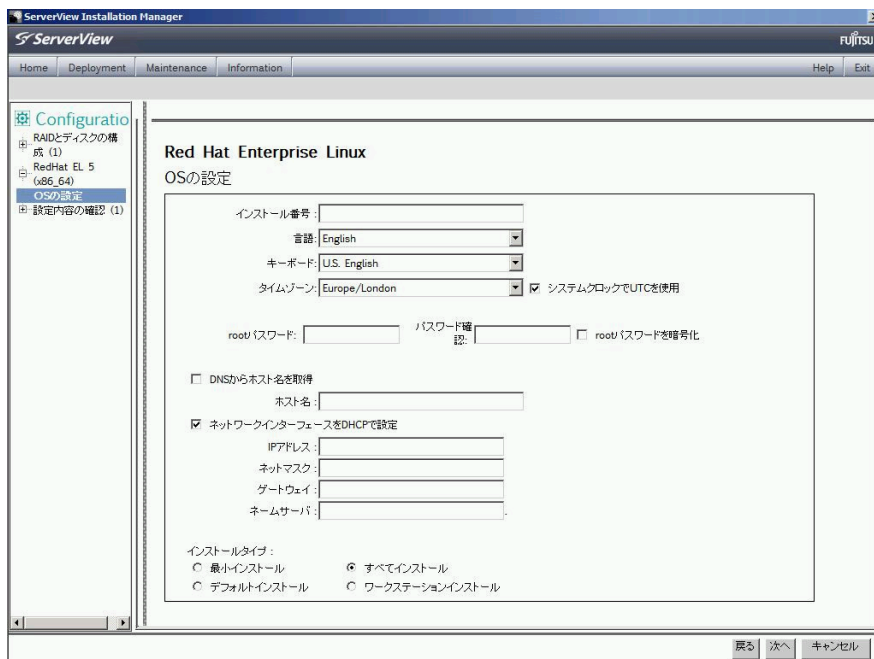


図 62: Linux/VMware のインストール(標準): OSの設定

インストール番号(Red Hat Linux 5 の場合のみ)

インストール番号を入力します。配布する機能の範囲は、インストール番号に基づいて正確に定義されます。

言語

ターゲットシステムの言語です。

キーボード

ターゲットシステムのキーボードタイプです。

タイムゾーン

ターゲットシステムの OS のタイムゾーン

システムクロックで UTC を使用

ターゲットシステムのシステムクロックで UTC(Universal Time Coordinated) を使用することを指定します。デフォルト設定です。

追加言語(Red Hat Linux 4 の場合にみ)

言語グループから追加言語をインストールします。

root パスワード/パスワード確認

root パスワードを入力し、もう一度入力します。

root パスワードを暗号化

入力した root パスワードは暗号化され、暗号化された形式でターゲットシステムに送信されます。

DNS からホスト名を取得

ターゲットシステムはコンピュータ名を DNS サーバから取得します。



DNS サーバをターゲットシステムのネットワークで使用できない場合は、このオプションを選択しないでください。

ホスト名

ターゲットシステムの名前。

ネットワークインターフェースを DHCP で設定

ターゲットシステムは、IP アドレスと追加のコンフィグレーションパラメータを DHCP サーバから取得します。



DHCP サーバをターゲットシステムのネットワークで使用できない場合は、このオプションを選択しないでください。

このオプションのチェックを外した場合は、固定 IP アドレス設定のパラメータを設定する必要があります。

IP アドレス

選択した LAN アダプタの IP アドレスを指定します。

ネットマスク

選択したアダプタのサブネットマスクを指定します。サブネットマスクは IP アドレスを使用して LAN アダプタにサブネットを割り当てます。

ゲートウェイ

ターゲットシステムの LAN のデフォルトゲートウェイおよびデフォルトルータの IP アドレスを指定します。

ネームサーバ

ターゲットシステムの LAN の DNS サーバの IP または名前です。

インストールオプション

インストールするパッケージを選択します。

最小インストール

Red Hat 5 および VMware ESX のデフォルトです。

システムの実行に不可欠なパッケージのみをインストールします。追加パッケージは、システムを起動した後で「手動」でインストールできます。

すべてインストール

すべてのパッケージをインストールします。

デフォルトインストール

サーバ用途に合わせたインストールです。

ワークステーションインストール

ワークステーション用途に合わせたインストールです。

7.2.3 コンフィグレーションの保存/インストールの開始

このステップでは、設定したパラメータが表示されます。これらのパラメータをファイルに保存して、示されたコンフィグレーションに基づいて自動インストールを開始できます。

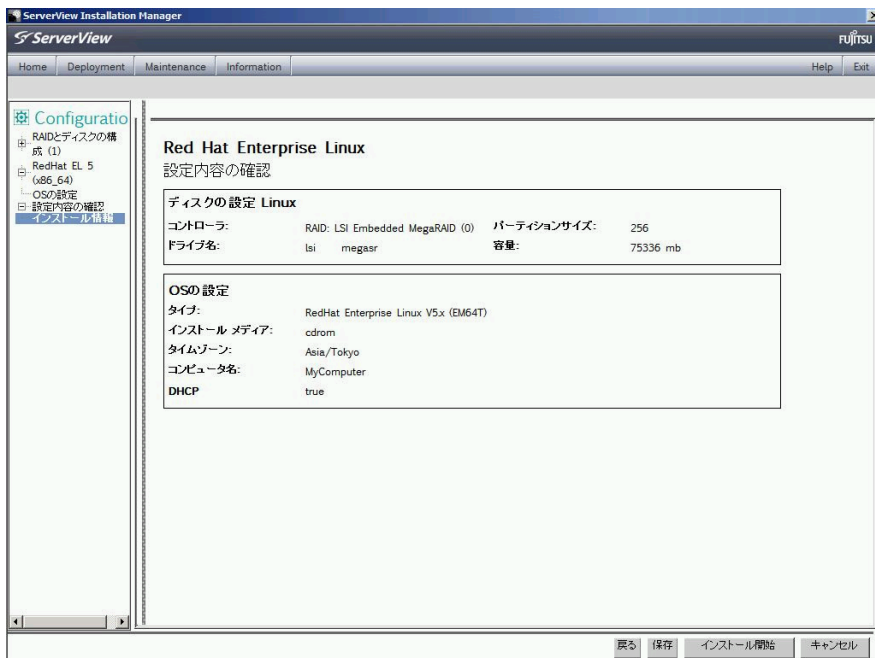


図 63: コンフィグレーションの保存/インストール開始

保存

設定されたパラメータを一時ファイル *SerStartBatch.xml* に保存します。自動インストールは開始されません。

外部バックアップメディア(USB メモリスティックなど)を指定した場合は、コンフィグレーションファイルはそのメディアに保存されます。

インストール開始

OS の自動インストールを開始します。

7.3 Linux のインストール(カスタム)

Linux のカスタムインストールは、以下の手順に従います。

- ターゲットシステムを指定する
- 一般的なシステム動作とリモートマネジメントコントローラを Server Configuration Manager を使用して設定する(オプション)
- RAIDとディスクの構成を使用してハードディスク/RAID コントローラを設定する
- Linux OS のインストールを設定する
- アプリケーションのインストールを設定する



必要な環境:

1. Installation Manager を起動して以下の仕様に従う必要があります。

- ローカルインストールの場合:


「Installation Manager Deployment Process Selection」画面で「ガイドモード」インストールモードを選択しておく必要があります。

- リモートインストールの場合:

「ターゲットシステムの選択」ステップで、ターゲットシステムの必要な情報を設定しておく必要があります(Deployment サーバとの通信に使用する LAN アダプタの MAC アドレス、機種名など)。

2. 自動インストール設定の最初の画面で、オペレーティングシステム、オペレーティングシステムのタイプ、サービスパックを選択しておく必要があります。
3. その他の設定が完了したら「次へ」をクリックします。

7.3.1 Server Configuration Manager

 Server Configuration Manager の設定ステップを表示するには、インストールプロセスの設定の最初の画面で、「サーバ管理の設定を行う」オプションを有効にしておく必要があります。

Server Configuration Manager にはいくつかのコンフィグレーションステップがあり、インストールプロセスの設定の他にターゲットシステムの追加設定を指定できます(95 ページの [Server Configuration Manager](#) の章を参照)。

7.3.2 RAIDとディスクの構成

このステップで、ハードディスクと RAID コントローラを構成できます。

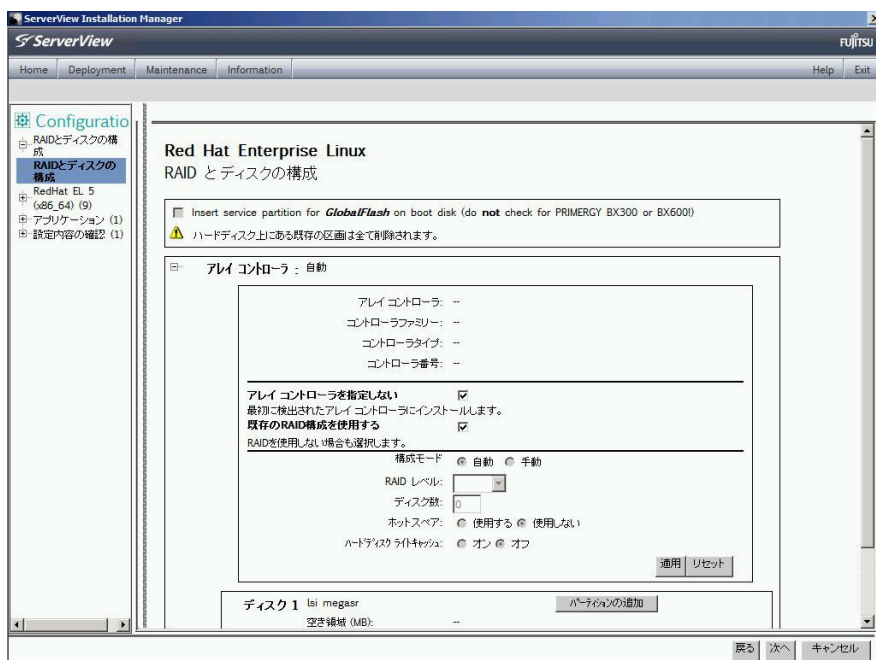


図 64: RAIDとディスクの構成

ハードディスクと RAID コントローラの構成手順については、[110 ページの RAID とディスクの構成](#)を参照してください。

7.3.3 Linux/VMware ESX の設定

OS の設定には、さまざまな設定ステップがあります。提供される設定ステップのシーケンスは、選択する OS によって異なります。

次の説明は、Red Hat 5 の場合の設定ステップのシーケンスに沿っています。

- 基本設定
- パッケージ選択
- X Windows
- VMware ESX 4.0 のみ(カスタム): 仮想ディスクの設定
- VMware ESX のみ: ライセンスオプション
- Grub ブートローダオプション
- ネットワーク
- セキュリティとファイアウォール
- 認証
- Pre Installation Script
- Post Installation Script

7.3.3.1 基本設定

このダイアログボックスでは、ターゲットシステムの基本情報を設定します。

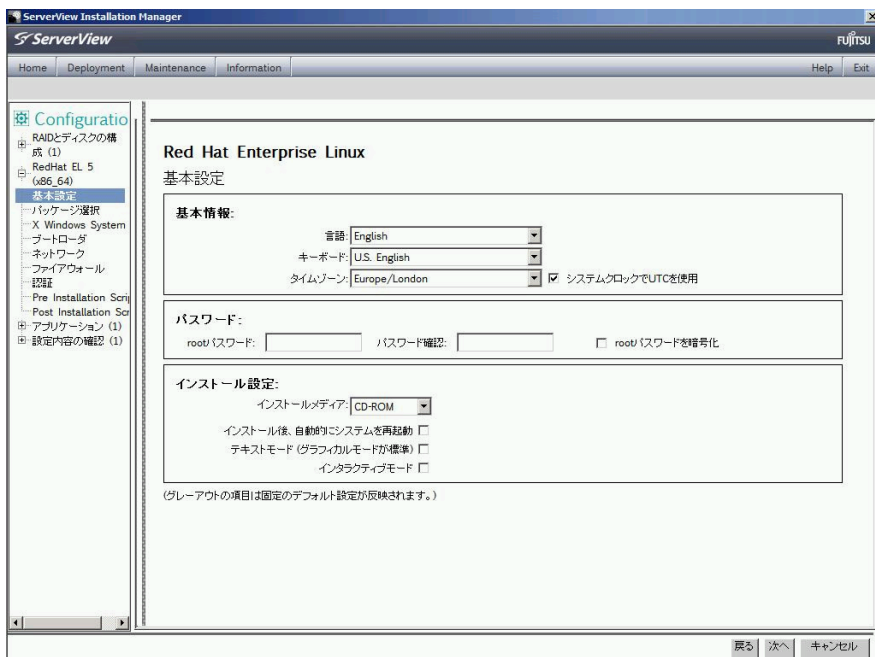


図 65: Linux/VMware のインストール(カスタム): 基本設定

基本情報

地域の要件にターゲットシステムを適合させます。

言語

ターゲットシステムの OS 言語

キーボード

キーボード言語

タイムゾーン

ターゲットシステムの OS のタイムゾーン

システムクロックで UTC を使用

システムクロックが協定世界時(UTC)を使用するよう指定します。デフォルト設定です。

追加言語(Red Hat EL 4 のみ)

OS にインストールする追加言語

マウス(SuSE のみ)

マウスタイプを設定します。

3 キーマウスのエミュレート(SuSE のみ)

3 ボタンマウスをエミュレートします。ターゲットシステムで 2 ボタンマウスを使用する場合、このオプションを選択します。左と右の両ボタンを同時にクリックした場合(2 ボタンマウス上)、3 ボタンマウスの 3 番目のボタンのクリックとしてシステムが認識します。

パスワード

root ID を持つユーザのパスワードを設定します。

root パスワード/パスワード確認

root ユーザのパスワード。パスワード確認のため 2 回入力します。

root パスワードを暗号化

入力したルートパスワードを即座に暗号化します。つまり、読み取り可能な形式でバッファに格納されません。

インストール設定

インストールの追加パラメータを設定します。

インストールメディア

Installation Manager のインストールファイルの格納場所を選択します。

CD-ROM

ローカル CD-ROM ドライブからインストールします。

NFS

以下のパラメータを使用して定義したネットワークドライブからインストールします。

- **サーバ**: インストールソースとなるサーバの DNS 名または IP アドレス(たとえば、Deployment サーバ)。
- **ディレクトリ**: インストールファイルを含むディレクトリのフルパス。

FTP/HTTP

FTP または HTTP サーバの URL。

ハードドライブ

以下のパラメータを使用して定義したローカルドライブからインストールします。

- **パーティション**: インストールファイルがあるディレクトリを含むパーティション。
- **ディレクトリ**: インストールファイルを含むディレクトリのフルパス。

インストール後、自動的にシステムを再起動

インストールが正しく完了した後に、再起動します。キックスタートでは通常は再起動する前にメッセージを表示して、ユーザのキー入力を待ちます。

テキストモード(グラフィカルモードがデフォルト)

デフォルトのグラフィカルモードではなく、テキストモードでインストールを実行します。

インタラクティブモード

インタラクティブモードでインストールを実行します。インストール中、キックスタートファイル内の設定を変更することができます。

7.3.3.2 パッケージ選択

このダイアログボックスでは、ターゲットシステムにインストールするパッケージを指定します。

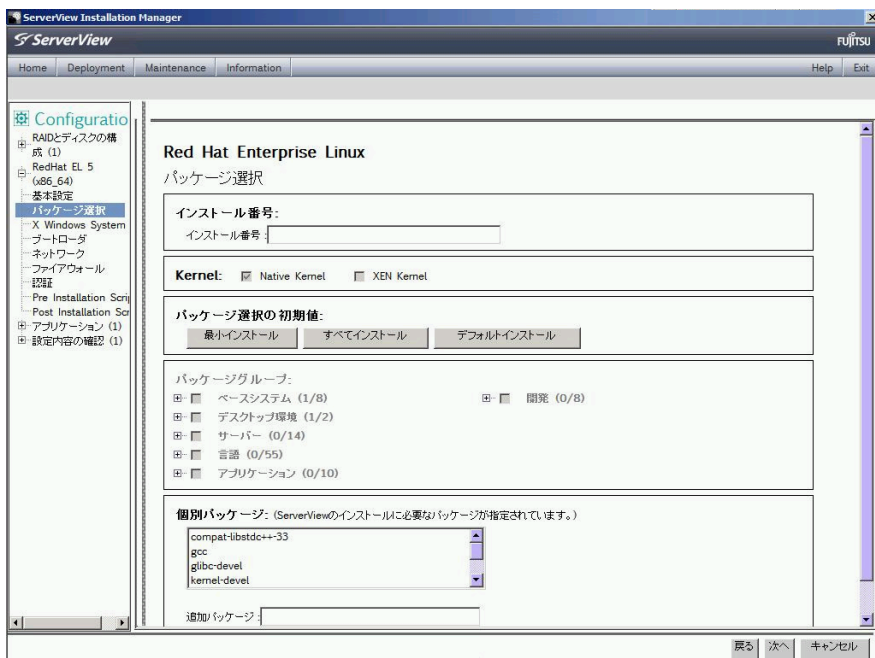


図 66: Linux のインストール(カスタム): パッケージの選択

インストール番号(Red Hat EL5 のみ)

インストール番号によりディストリビューションの機能的な範囲を定義します。

Kernel(Red Hat EL 5 ではない場合)

インストールする標準(ネイティブ)カーネルを選択します。

Native Kernel

ネイティブカーネルのパッケージをインストールします。

PAE Kernel

PAE ネイティブカーネルのパッケージをインストールします。

XEN Kernel(仮想化パッケージ)

仮想化のために XEN カーネルのパッケージをインストールします。このパッケージは XEN カーネルの起動に必要です([ブートローダ](#)を参照)。

パッケージ選択の初期値

対応するボタンを使用して、インストールするパッケージを事前に選択できます。有効なパッケージに対応する数字がパッケージの選択中に表示されます。

最小インストール

最小構成の OS で必要なすべてのインストールパッケージが選択されます。

すべてインストール

すべてのインストールパッケージが選択されます。

デフォルトインストール

Fujitsu Technology Solutions の推奨するパッケージグループです。

個別パッケージ

すべてのインストールパッケージがグループに分類して表示されています。ボタンを使用して事前に選択したパッケージがアクティブとして表示されます。必要に応じてパッケージを追加または削除して、要件に合わせて事前選択内容を変更できます。

Red Hat EL5 の場合 :

有効なインストール番号を入力した場合のみ、変更可能です。

個別パッケージ

追加でインストールする個別パッケージのリストです。

追加

「追加」をクリックして、リストに追加するインストールパッケージの名前を入力します。

解除

選択したインストールパッケージを削除します。

すべて削除

すべてのインストールパッケージをリストから削除します。

7.3.3.3 X Windows System の設定 (Red Hat および SuSE のみ)

このダイアログボックスでは、X Windows System を設定します。

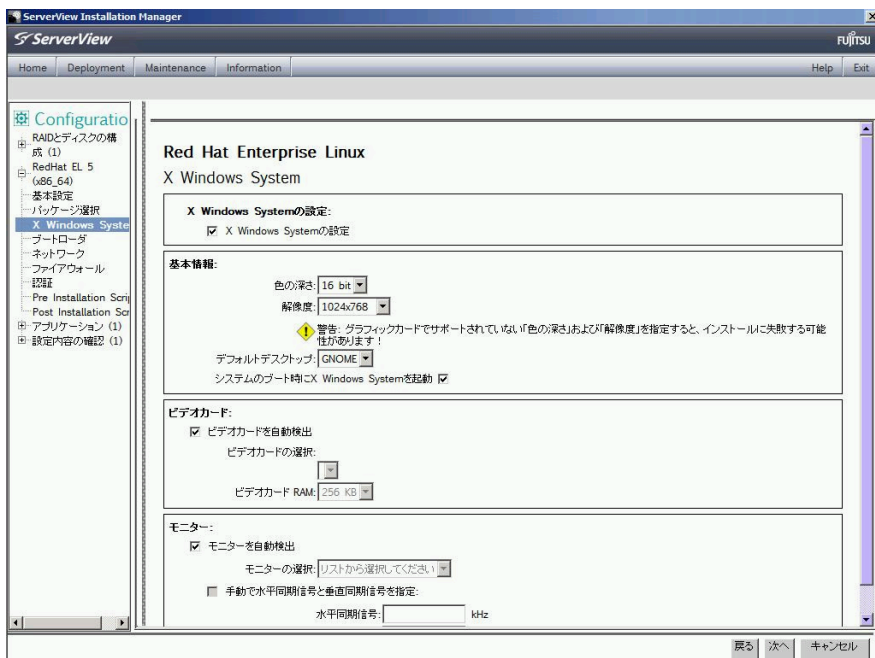


図 67: Linux のインストール(カスタム): X Windows System の設定

X Windows System の設定

X Windows System の設定を有効にします。このオプションを選択しない場合、以下に続くオプションは無効になります。

X Windows System インストールパッケージを選択する必要があります(Red Hat EL 4)。

基本情報

表示オプション。

色の深さ

X Windows System の色深度。色深度はグラフィックカードとモニタに適合している必要があります。

解像度

X Windows System の解像度。解像度はグラフィックカードとモニタに適合している必要があります。

デフォルトデスクトップ

デフォルトデスクトップを定義します。以下のパラメータを選択する必要があります。

- GNOME
- KDE
- なし

システムのブート時に X Windows System を起動

ターゲットシステムでグラフィカルなログオン画面を使用する場合に指定します。

ビデオカード

ビデオカードタイプを指定します。

ビデオカードを自動検出

ビデオカードタイプを自動的に決定します。この場合、インストールプログラムはカードの PCI バスを検索します。検索順序はマザーボードの PCI スキャンにより定義されています。

このオプションを選択した場合、以下の 2 つのオプションは無効になります。

ビデオカードの選択

指定されたカードを使用します。カード名は `hwdata` パッケージの `/usr/share/hwdata/Cards` 内にあるカードリストに含まれている必要があります。

ビデオカード RAM

ビデオカードのメモリを指定します。

モニタ

モニタタイプを指定します。

モニターを自動検出

モニタタイプを自動的に決定します。このオプションを選択した場合、以下に続くすべてのオプションは無効になります。

モニターの選択

指定されたモニターを使用します。モニター名は `hwdata` パッケージの `/usr/share/hwdata/MonitorsDB` 内にあるモニターリストに含まれている必要があります。「手動で水平同期信号と垂直同期信号を指定」オプションを選択した場合、このオプションは無視されます。

手動で水平同期信号と垂直同期信号を指定

水平および垂直リフレッシュレートオプションを有効にします。

水平同期信号 (kHz)

モニタの水平リフレッシュレートを指定します。

垂直同期信号 (kHz)

モニタの垂直リフレッシュレートを指定します。

7.3.3.4 VMware 仮想ディスクの設定 (VMware ESX のみ)

この手順では、VMware ESX 4.0 のバーチャルディスクを設定します。

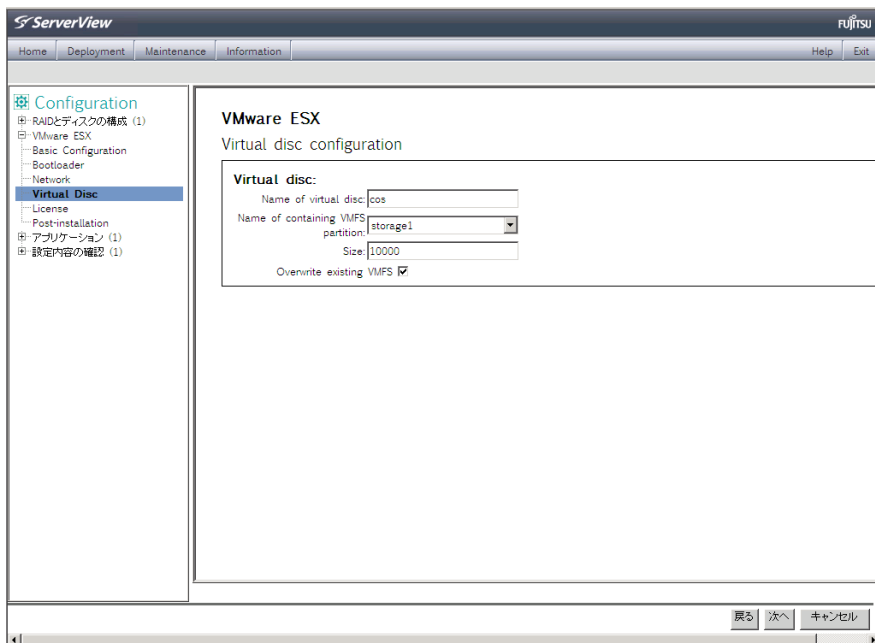


図 68: VMware ESX 4.0 のインストール(カスタム): 仮想ディスクの設定

VMware Service Console は、ホストのローカルハードディスク上、またはホストに割り当てられているゾーン内の適切にマスクされた SAN ハードディスクにある VMFS データストア上にインストールする必要があります。

データストアは、複数のホストから同時に使用することはできません。

Name of virtual disc

仮想ディスクの名前です。

Name of containing VMFS partition

VMDK ファイルが作成される、VMFS データストアの名前です。

Size

仮想ディスクのサイズです(メガバイト)。

Overwrite existing VMFS

指定されたドライブの VMFS パーティションを上書きします。ハードディスクに単一の VMFS パーティションしかない場合は、このオプションを選択する必要があります。

7.3.3.5 VMware ライセンスオプション (VMware ESX のみ)

ここでは、適用されるライセンスオプションを設定します。

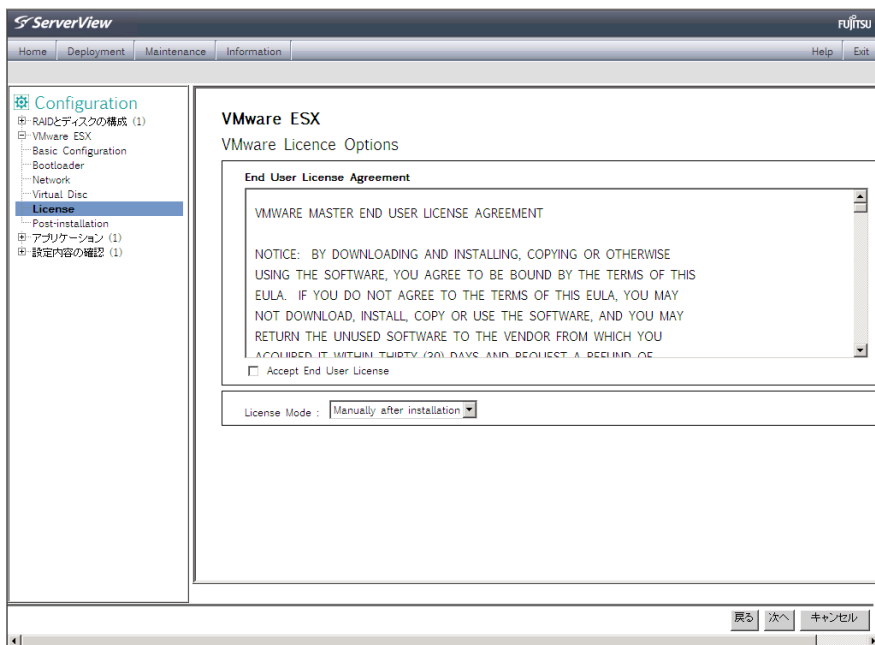


図 69: VMware ESX のインストール(カスタム): VMware ライセンスオプションの設定

End User License Agreement

エンドユーザライセンスが表示されます。

Accept End User License

ライセンスの許諾を確認します。

License Mode

ライセンスのタイプを指定します。

Use license server

ライセンスサーバを使用して複数ユーザのライセンスを管理します。

Manual input of license

ターゲットシステムのための個々のライセンスです(入力フィールドに入力します)。

Manual after installation

ターゲットシステムのための個々のライセンスです(インストールの後に入力します)。

7.3.3.6 Grub ブートローダオプション/マウントオプション

このダイアログボックスでは、ターゲットシステムでマルチブートが可能な GRUB のインストールを設定できます。

SUSE Linux Enterprise Server(SLES 10、SLES 11) の場合、マウントオプションも指定できます。

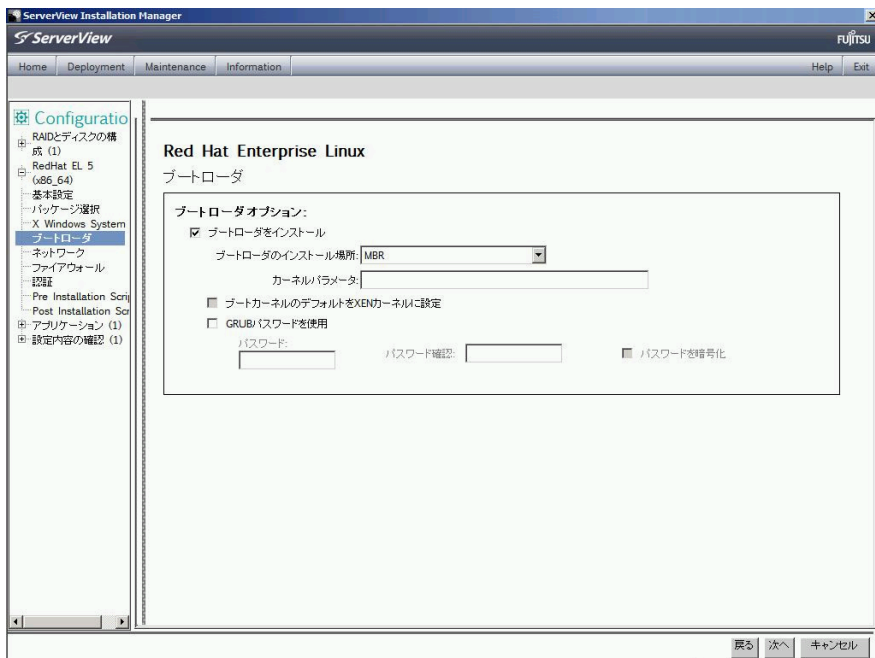


図 70: Linux/VMware のインストール(カスタム): ブートローダオプションの設定

ブートローダオプション

ターゲットシステムでマルチブートが可能な GRUB のインストールを設定できます。

ブートローダをインストール

ブートマネージャのインストール設定を指定します。このオプションを選択しない場合、以下に続くすべてのオプションは無効になります。

ブートローダのインストール場所

ブートマネージャがインストールされる場所を指定します。

MBR

ブートマネージャを MBR にインストールします。これはデフォルト設定です。

ブートパーティションの最初のセクター

カーネルを含むパーティションの最初のセクターにブートマネージャをインストールします。

カーネルパラメータ

カーネルのコマンドラインにパラメータを追加します。

Boot XEN kernel as default(Red Hat EL 4 および VMware の場合を除く)

XEN カーネルを起動します。この場合、XEN Hypervisor がインストールされるので、ターゲットシステムは XEN ベースの仮想化環境を提供します。

このオプションを使用する場合、インストールパッケージ選択画面で XEN Kernel を選択する必要があります。

GRUB パスワードの設定

GRUB ブートマネージャにパスワードが必要になることを設定します。このオプションを選択しない場合、以下に続くオプションは無効になります。

パスワード/パスワード確認

ブートマネージャのパスワードです。パスワード確認のため 2 回入力します。

パスワードを暗号化

入力したパスワードを即座に暗号化します。つまり、読み取り可能な形式でバッファに格納されません。

マウントオプション

ハードディスクを ID 単位でマウントするかデバイス単位でマウントするかを指定します。

(SLES 10 および SLES 11 の場合のみ)



注意！

USB デバイスがターゲットシステムに接続されている場合：インストール時にデバイス順序が変更されるので、オペレーティングシステムのインストールを成功させるために、「**mount by id (udev-id)**」オプションを選択する必要があります。



オペレーティングシステムのデプロイメントに ServerView Deployment Manager を使用する場合は、「**mount by device**」オプションを選択します。この場合は USB デバイスをターゲットシステムに接続しないでください。

mount by id (udev-id)

ハードディスクを「デバイス ID によって」マウントします。

デバイス ID を使用してデバイスをマウントすると、デバイス名が維持されるという利点があります。

udev プログラムは Linux カーネルを使用して、ファイルの入出力を管理するデバイスファイルを管理します。Linux カーネルバージョン 2.6 の時点で、以前使用されていた devfs システムが udev に変更されました。

mount by device(/dev/sda など)

ハードディスクを「デバイス名によって」マウントします。

7.3.3.7 ネットワークの設定

このダイアログボックスでは、ターゲットシステムのネットワーク接続を設定します。

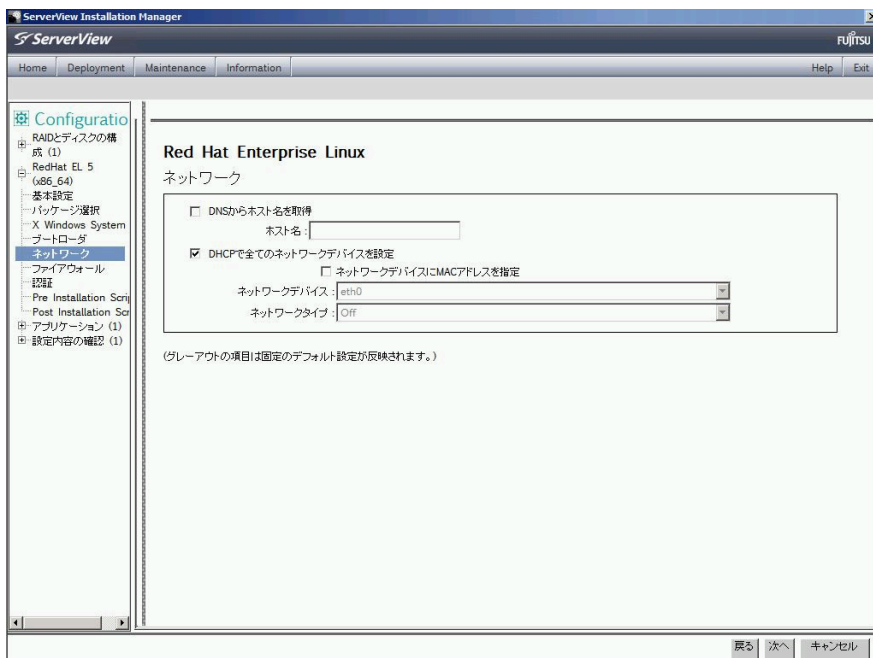


図 71: Linux/VMware のインストール(カスタム): ネットワークの設定

Configure standard network for VMs(VMware のみ)

VM ポートグループを使用して、標準ネットワークの VMware を設定します。
デフォルト設定です。

Use VLAN ID(VMware のみ)

VLAN のネット ID として 0 ~ 4095 の整数を入力します。

DNS からホスト名を取得

インストール時に DNS サーバから直接コンピュータ名を取得します。このオプションを指定しない場合は、ターゲットシステムに直接名前を入力します。

ホスト名

「DNS からホスト名を取得」オプションを選択していない場合、ターゲットシステムのホスト名を指定します。

DHCP ですべてのネットワークデバイスを設定

DHCP サーバを使用して、接続されているすべてのデバイスのネットワーク設定を取得します。Red Hat および SuSE SLES 10 のデフォルト設定です。このオプションを選択する場合、以下のすべてのパラメータも設定する必要があります。

ネットワークデバイスに MAC アドレスを指定

MAC アドレスを使用して PXE ブートデバイスを指定します。

ネットワークデバイス

ネットワークタイプが有効であるターゲットシステムの LAN カードのポート。

ネットワークタイプ

ネットワーク接続のために IP コンフィギュレーションを定義します。

DHCP

DHCP サーバから、設定パラメータを取得します。

Fixed IP

以下のパラメータにより固定 IP アドレスを指定します。

IP アドレス

ターゲットシステムの IP アドレス

ネットマスク

サブネットマスク

ゲートウェイ

デフォルトゲートウェイ

ネームサーバ

名前解決のための DNS サーバ

Off

「ネットワークデバイス」で選択したポートにネットワークを設定しません。

7.3.3.8 セキュリティとファイアウォール (Red Hat および SuSE のみ)

このダイアログボックスでは、ターゲットシステムの追加セキュリティ対策としてファイアウォールを設定します。ファイアウォールはターゲットシステムとネットワークの間に存在し、ネットワークユーザが利用できるターゲットシステムリソースを指定します。

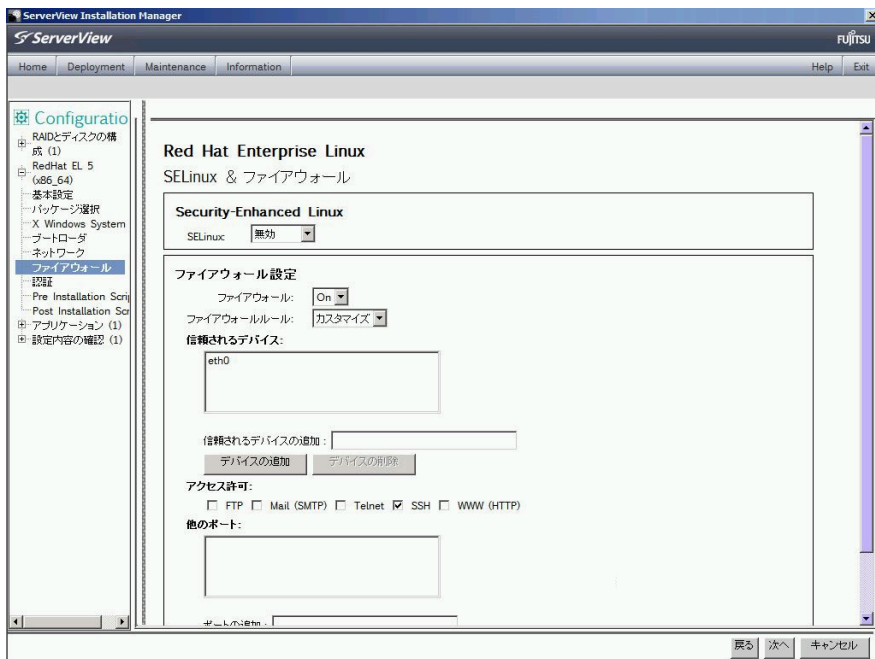


図 72: Linux のインストール(カスタム): ファイアウォールの設定

Security Enhanced Linux

SELinux(Red Hat のみ)

Security-Enhanced Linux モードを選択します。SEL は、特定のリソースへのアクセスに対するより厳しいアクセス制御を定義できる、カーネルの補助として役立ちます。

有効

SELinux を有効にします。権限のないユーザによる特定のファイルやプログラムへのアクセス拒否など、すべてのセキュリティガイドラインへのコンプライアンスを実現します。

警告

アクセスが拒否されるときに通知を出力します。警告の状態は、データやプログラムに名前を指定して、`/var/log/auditd` ファイルにこれらを記録します。しかし、セキュリティガイドラインへのコンプライアンスを強制しません。

無効

SELinux を無効にします。

ファイアウォール設定

ファイアウォール

ファイアウォールのオン/オフを切り替えます。ファイアウォールを有効にする場合、ターゲットシステムは明示的に定義した(デフォルト設定を除外した)接続のみを許可します。

カスタム

ファイアウォールの動作を決定するルールを定義します。

標準ファイアウォールルール

この設定は DNS 応答や DHCP 要求など、送信要求に対応する接続のみ許可します。

カスタム

定義された通信ポートを通してアクセスできるように、LAN カードのアダプタを設定します。このために追加オプションを表示します。

信頼されるデバイス

ファイアウォールによってモニタされるアダプタのリスト。

信頼されるデバイスの追加

アダプタ。「**デバイスの追加**」を選択して作成できます。「**デバイスの削除**」を選択するとリストからアダプタを削除できます。

アクセスを許可

プロトコルを指定し、これによってファイアウォールで許可される通信ポートを指定します。

FTP

ターゲットシステムがパブリック FTP サーバの場合の FTP プロトコル。vsftpd パッケージをインストールする必要があります。

Mail (SMTP)

ターゲットシステムがパブリックメールサーバの場合の SMTP プロトコル。

Telnet

ターゲットシステムへ非暗号化されリモートログオンを実行するための telnet プロトコル。telnet-server パッケージをインストールする必要があります。

SSH

ターゲットシステムへ暗号化されたりリモートログオンを実行するための SSH プロトコル。openssh-server パッケージを SSH ツールと一緒にインストールする必要があります。

WWW (HTTP)

ターゲットシステムがパブリック Web サーバの場合の HTTP と HTTPS プロトコル。httpd パッケージをインストールする必要があります。

他のポート

追加の通信ポートのリスト。

ポートの追加/削除

通信ポート。「**ポートの追加**」を選択して作成できます。「**ポートの削除**」を選択するとリストから通信ポートを削除できます。次の形式でポートを入力してください：

<port>: (tcp|udp)

<port>: 通信ポート名またはポート番号。

7.3.3.9 認証

このダイアログボックスでは、認証パラメータを設定します。

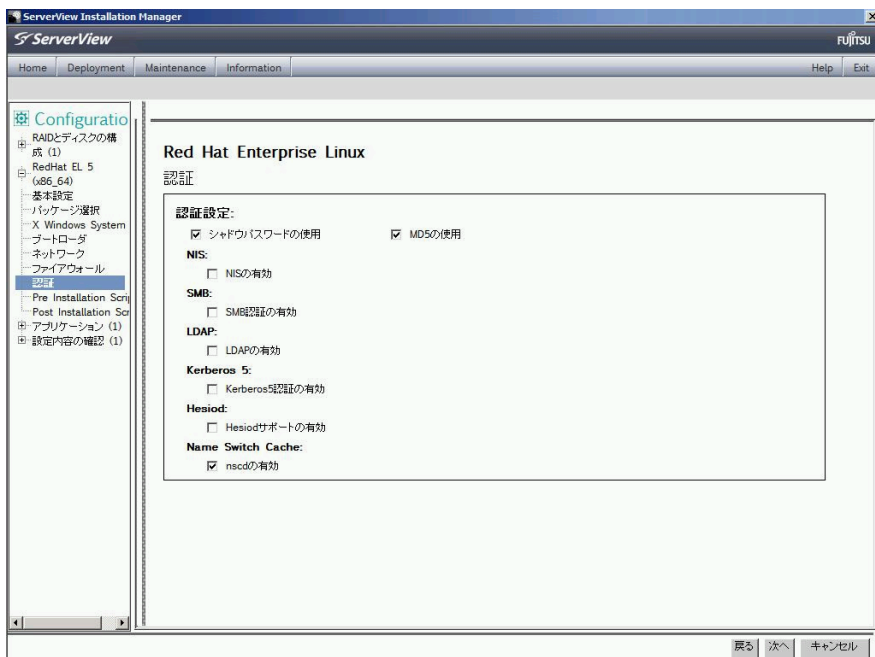


図 73: Linux/VMware のインストール(カスタマイズ): 認証の設定

シャドウパスワードの使用

ユーザアカウントのパスワードを別のファイルに保存します。デフォルト設定です(SuSE SLES 10 は除く)。

MD5 の使用

パスワードを MD5 Message Digest Algorithm 5 アルゴリズムで暗号化します。デフォルト設定です(SuSE SLES 10 は除く)。

NIS:**NIS の有効**

NIS サポートを有効にします。Linux ユーザは標準でネットワーク上のすべてのドメインを使用します。そのため、適切なドメインを指定する必要があります。

NIS ドメイン

NIS サービスに使用するドメイン名。

NIS の検索にブロードキャストを使用

一般的なブロードキャストを使用して NIS サーバを決定します。デフォルト設定です。

SMB:**SMB 認証の有効(Red Hat のみ)**

SMB サーバ(標準的な Samba または Windows サーバ)に対してユーザ認証を有効にします。SMB 認証サポートは、ホームディレクトリ、UID、シェルを認識していません。このオプションを使用するには、`pam_smb` パッケージをインストールする必要があります。

SMB サーバ

SMB 認証に使用するサーバ名。複数のサーバを指定するには、名前をカンマ(,)で区切ります。

SMB ワークグループ

SMB サーバのワークグループ名。

LDAP:**LDAP の有効(Red Hat のみ)**

`/etc/nsswitch.conf` 内で LDAP サポートを有効にします。ターゲットシステムがユーザに関する情報(UID、ホームディレクトリ、シェルなど)を LDAP ディレクトリから取り込めるようにします。このオプションを使用するには、`nss_ldap` パッケージをインストールする必要があります。

LDAP サーバ

使用する LDAP サーバ名。このオプションは `/etc/ldap.conf` ファイル内で設定されます。

LDAP ベースネーム

情報が格納されている LDAP ディレクトリ内で DN を指定するのに使用します。このオプションは `/etc/ldap.conf` ファイル内で設定されます。

Kerberos 5 :

Kerberos5 認証の有効(Red Hat のみ)

Kerberos サポートを有効にします。Kerberos 自身はホームディレクトリ、UID、シェルなどを呼び出すことはできません。Kerberos を有効にすると、LDAP、NIS、または Hesiod を有効にする必要があります。このオプションを使用する場合、`pam_krb5` パッケージをインストールする必要があります。

Kerberos レルム

ターゲットシステムの所属先である realm(レルム)。

Kerberos ドメインコントローラ

realm への要求に対してサービスを提供する KDC。realm 内に複数の KDC がある場合には、名前をカンマ(,) で区切って指定します。

Kerberos マスターサーバ

`kadmind` が動作しているマスター KDC。このマスターサーバはパスワードの変更やその他の管理関連要求を処理します。

Hesiod :**Hesiod サポートの有効**(Red Hat のみ)

ユーザのホームディレクトリ、UID、シェルの検索用に Hesiod のサポートを有効にします。Hesiod のセットアップと使用方法に関する詳細情報は `glibc` パッケージに含まれている `/usr/share/doc/glibc-2.x.x/README.hesiod` で閲覧できます。Hesiod は DNS の拡張であり、ユーザ、グループ、その他についての情報を提供します。

Hesiod LHS

Hesiod LHS(left-hand side) オプションは、`/etc/hesiod.conf` 内に設定されています。このオプションは、Hesiod ライブラリによって使用され、情報を検索する時に DHS 検索用の名前を決定します(ベース DN は LDAP の場合に同じように使用されます)。

Hesiod RHS

Hesiod RHS(right-hand side) オプションは、`/etc/hesiod.conf` 内に設定されています。このオプションは、Hesiod ライブラリによって使用され、情報を検索する時に DHS 検索用の名前を決定します(ベース DN は LDAP の場合に同じように使用されます)。

Name Switch Cache :**nscd の有効**(Red Hat のみ)

`nscd` サービスを有効にします。`nscd` サービスはユーザ、グループ、その他の情報をキャッシュします。キャッシングは、特に NIS、LDAP または Hesiod を使用して、情報を配布する場合に役立ちます。デフォルト設定です。

7.3.3.10 Pre Installation Script (Red Hat および SuSE のみ)

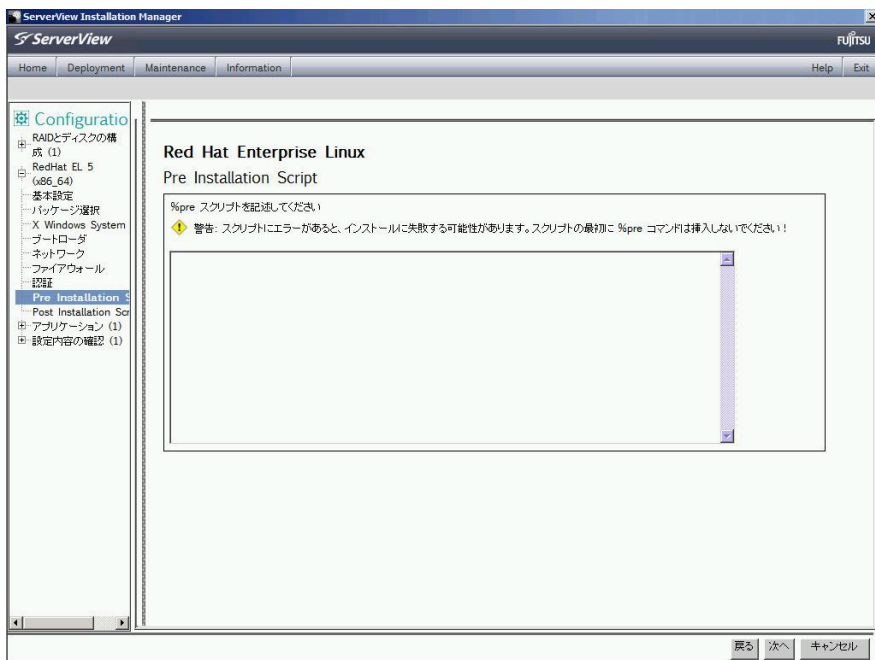


図 74: Linux のインストール(カスタム): プレインストールスクリプトの入力

このダイアログボックスでは、以下の操作を実行できます。

- スクリプトコマンドを直接入力できます。
- ネットワークで利用可能なスクリプトを指定できます。

%pre 定数は使用できません。このスクリプトは、コンフィグレーションファイルを読み込んだ後、Linux をインストールする前に実行されます。この時点ではまだネームサーバは認識されていないので、ネットワークのコンピュータにアクセスするために IP アドレスのみ指定できます。

7.3.3.11 Post Installation Script

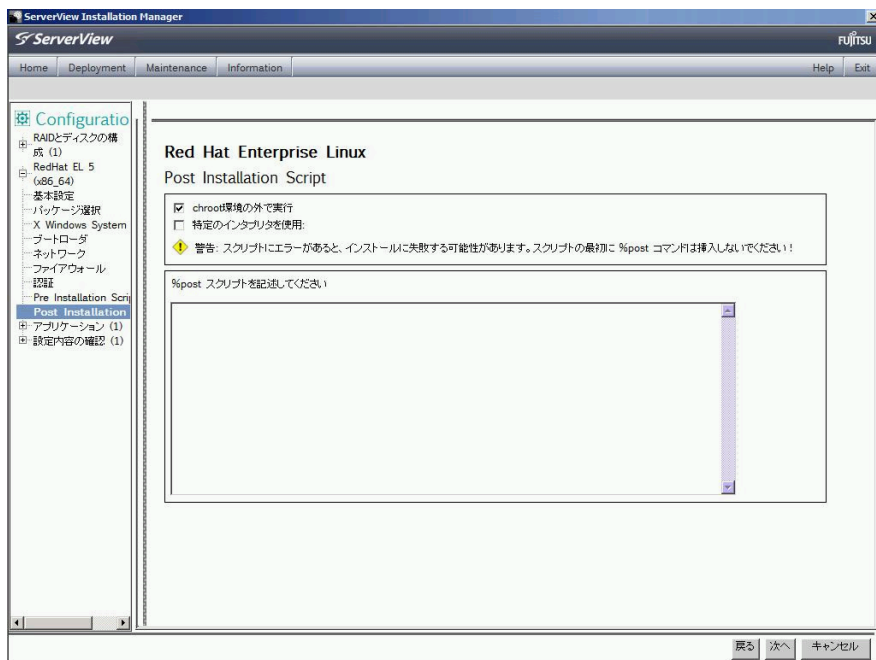


図 75: Linux のインストール(カスタム): ポストインストールスクリプトの入力

このダイアログボックスでは、以下の操作を実行できます。

- スクリプトコマンドを直接入力できます。
- ネットワークで利用可能なスクリプトを指定できます。

`%post` 定数は使用できません。Linux インストール後、スクリプトが実行されます。

ネットワークで固定 IP アドレス設定を使用する場合は、ネットワークリソースに直接 IP アドレスを入力できます。動的 IP 設定(DHCP)の場合は、スクリプトの実行時にはまだ `/etc/resolv.conf` ファイルが完成していません。IP アドレスがまだ決定されていないので、ここでこれらの IP アドレスを定義する必要があります。

chroot 環境の外で実行

インストール後にスクリプトが実行される chroot 環境を無効にします。スクリプトまたは RPM をインストールメディアからコピーすることもできます。

特定のインタプリタを使用

別のスクリプト言語(たとえば、Perl)のインタプリタを定義します。デフォルト設定です。

%post スクリプトを記述してください

ここにスクリプトを記述します。

7.3.4 アプリケーションの選択と設定

このステップでは、Installation Manager で OS に加えてインストールすべきアプリケーションソフトウェアを選択できます。

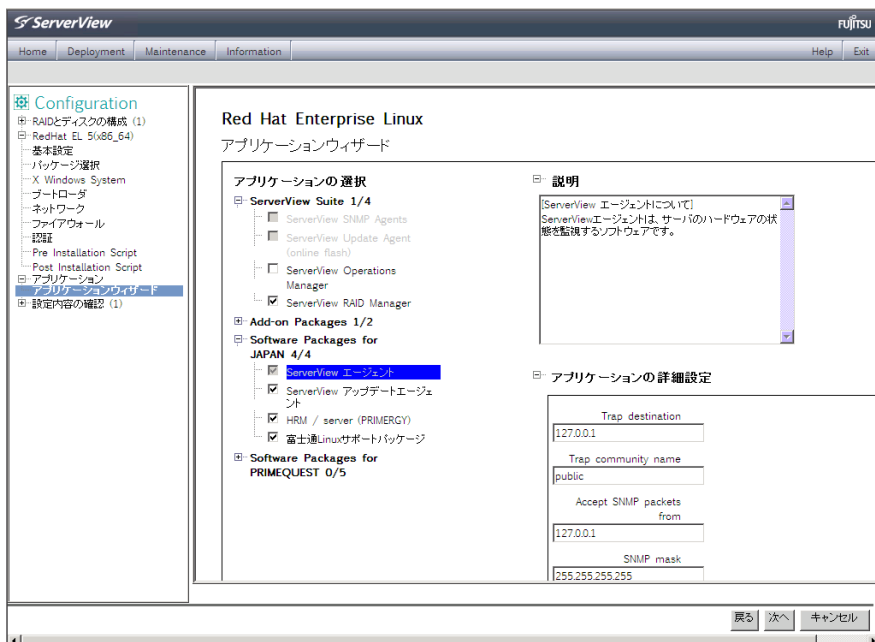


図 76: Linux のインストール(カスタム): アプリケーションの選択/設定

アプリケーションの選択

選択可能なプログラムグループが表示されます。



次の条件により、あらかじめパッケージが選択されている場合もあります。

- OS
- OS の言語
- PRIMERGY サーバのハードウェアのタイプ
- FUJITSU LTD および Fujitsu Technology Solutions の推奨



それぞれのグループ名に付いている(n/n)は、グループの中で利用できるプログラムの総数(右の数字)と、その中から選択したプログラムの数(左の数字)を示します。

「+」をクリックすると、そのグループで利用できるプログラムのリストが表示されます。

Add-on packages

追加ソフトウェア(例: Java Runtime Environment、カスタムスクリプトおよびパッケージ)

ServerView Suite (n/n)

ServerView Suite のコンポーネント

Software Packages for JAPAN (n/n)

(SLES 10、SLES 11 は除く)

日本向けのソフトウェアです。




このパッケージは OS 言語が日本語の場合にのみ利用できます。

Software Packages for PRIMEQUEST (n/n)

(SLES 10、SLES 11 は除く)


PRIMEQUEST サーバで利用できるソフトウェアです。

-  OS 言語が日本語の場合にのみ利用できるパッケージのコンポーネントもあります。

2 つに分けられた画面

オプションを選択したり、プログラム名をクリックしたりすると、ダイアログボックスが 2 つに分けられます。


- 選択できるプログラムは左側に表示されます。
- 右側には、選択されたアプリケーションに関する情報とインストールに必要なパラメータが表示されます。

-  Linux ディストリビューションに依存するため、すべてのアプリケーションを選択できるわけではありません。

アプリケーションで別のアプリケーションのインストールが要求される場合

一部のアプリケーションのインストールには、他のアプリケーションのインストールが必要になります。

たとえば、*ServerView Suite - ServerView RAIDManager* には *Add-on packages - Java Runtime Environment* が必要になります。

-  「インフォメーション」フィールドには、有効なソフトウェアの依存関係が表示されます。

インストールに伴い、他のアプリケーションのインストールが必要なアプリケーションを選択した場合、必要なアプリケーションが選択されていないと次のダイアログボックスが表示されます。

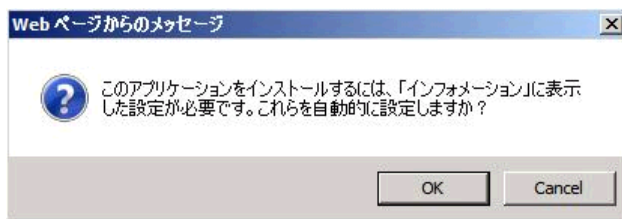


図 77: アプリケーションウィザードが、必要なパラメータを自動的に設定しようとしています。

OK

アプリケーションウィザードが、必要なアプリケーションを選択しようとしています。

アプリケーションウィザードが成功すると、選択が持続します。成功しなかった場合は、選択はリセットされます。

Cancel

選択をリセットします。

右側に表示された選択アプリケーションの詳細

説明

選択されたオプションの簡単な説明が表示されます。

アプリケーションの詳細設定

(一部のアプリケーションでは表示されません)

選択したアプリケーションの設定を指定します。

OS のインストールソース

Installation Manager のインストールファイルの格納場所を定義します。

ローカルインストール:

ローカルCD/DVD

手元に所持しているCD/DVD を使用する場合に選択します。

ServerView Suite DVD1

ServerView Suite DVD1 からインストールを行う場合に選択します。

ネットワーク共有

承認されたネットワークドライブです。

リモートパス

UNC 形式のネットワークドライブのパスは

¥¥<Server>¥¥<Path> です。例: ¥¥myserver¥¥directory

ユーザ名

ネットワークドライブに対し必要な権限を持ったユーザアカウントです。アカウントは、URL が参照し、リソースを提供するコンピュータ上に存在する必要があります。新しく作成されたユーザは、上記で指定されたパスのディレクトリに対する読み込み権限をコンピュータ上で持っている必要があります。

Remote Password

このユーザアカウントのパスワードです。

リモートインストール:

ServerView Installation Manager data packages

リモートインストール用の Installation Manager のデータパッケージです (Deployment サーバ上)。

ネットワーク共有

承認されたネットワークドライブです。

リモートパス

UNC 形式のネットワークドライブのパスは

¥¥<Server>¥¥<Path> です。例: ¥¥myserver¥¥directory

リモートユーザ名

ネットワークドライブに対し必要な権限を持ったユーザアカウントです。アカウントは、URL が参照し、リソースを提供するコンピュータ上に存在する必要があります。新しく作成されたユーザは、上記で指定されたパスのディレクトリに対する読み込み権限をコンピュータ上で持っている必要があります。

Remote Password

このユーザアカウントのパスワードです。

インフォメーション

選択されたプログラムのインストール要件として可能性のある情報(特定のサービスまたはアプリケーションを同時にインストールする必要があるなど)を提供します。

7.3.5 設定値のバックアップ/インストールの開始

設定情報の確認画面が表示されます。

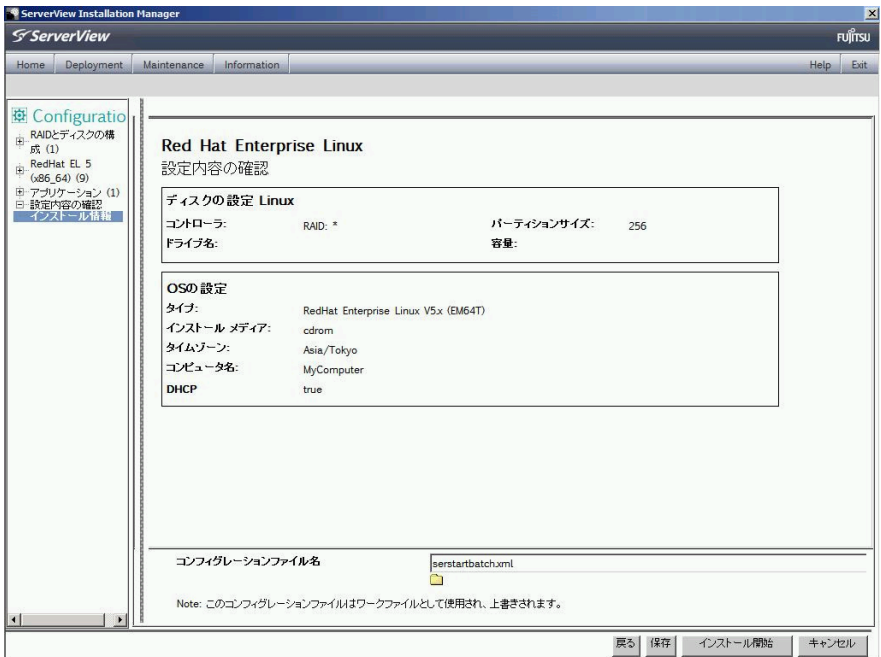


図 78: Linux のインストール(カスタム):設定値のバックアップ/インストールの開始


コンフィグレーションファイル名


コンフィグレーションファイル名(デフォルト名: `serstartbatch.xml`)を定義し、ここに設定パラメータが保存されます。

フォルダアイコンをクリックするとコンフィグレーションファイルの名前を指定するためのダイアログボックスが表示されます。

- ファイル名を指定できます(デフォルト名: `serstartbatch.xml`)。このデフォルト名は、任意の名前で上書きできます。

- Installation Manager がコンフィグレーションファイルを保存するフォルダを選択または作成できます。フォルダは以下の通り保存されます。
 - ローカルインストール(ガイドモードのみ):
フォルダはローカルバックアップメディアに保存されます。
 - リモートインストール:
フォルダは Installation Manager リポジトリの **configfiles** ディレクトリに保存されます。

 デフォルト名を設定データの長期バックアップに使用しないでください。

 ターゲットシステムでのローカルインストールの場合:
コンフィグレーションはガイドモードのみ保存できます。

コンフィグレーションファイルは、現在の Installation Manager プロセスに対して、一時ファイルとして作成されるものであり、Installation Manager を今後開始する場合には利用できません。

永久的にコンフィグレーションファイルを保存するには、外部メディアにバックアップします(例: メモリスティック)。

保存

設定したパラメータを「コンフィグレーションファイル名」ダイアログで指定したファイルにバックアップします。

自動インストールは開始されません。

インストール開始

オペレーティングシステムの自動インストールを開始して、設定したパラメータを「コンフィグレーションファイル名」ダイアログで指定したファイルにバックアップします。

Installation Monitor を使用して、リモートインストールの進捗状況とステータスを把握できます。

8 Installation Monitor – リモートインストールの監視

Installation Monitor は、開始されているリモートインストールプロセスの進捗と状態を通知します。**Installation Monitor**を開始するには、「Installation Manager へようこそ」画面の「**Monitoring**」の下に「Installation Monitor」リンクをクリックします。



Installation Monitor はリモートインストールが開始された後に、自動的に開始されます。

8.1 Installation Monitor のグラフィカルユーザインターフェース

以下の図は、2 つのリモートインストールが開始されたことを示す Installation Monitor ウィンドウです。

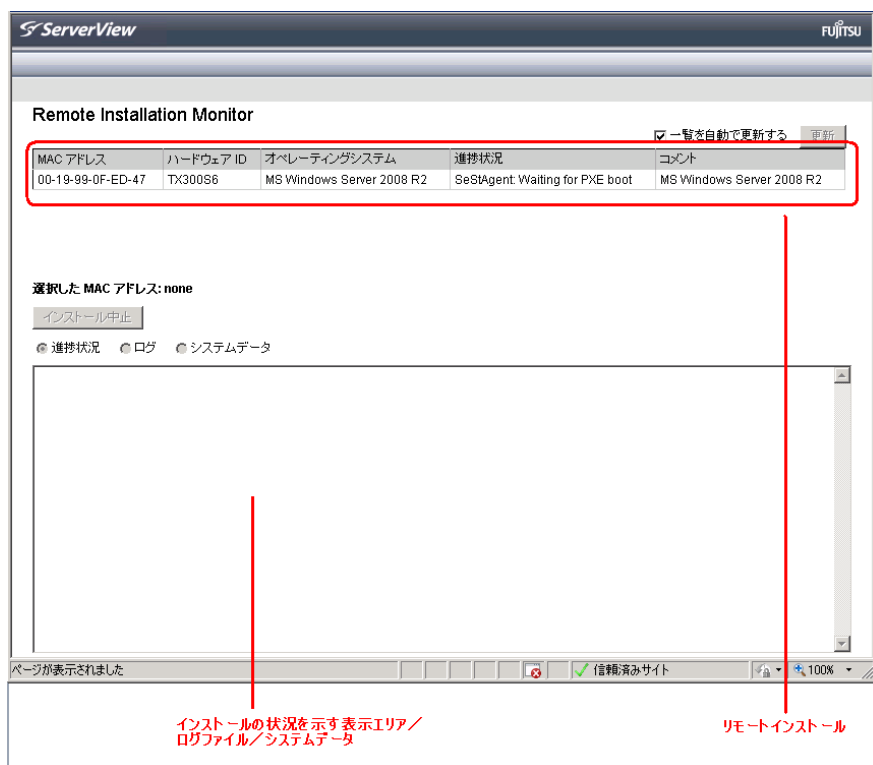


図 79: Installation Monitor ウィンドウ: 現在1つのリモートインストールプロセスが開始されている

- ❗ 「インストール中止」を使用してリストから明示的に削除しない限り、すでに完了しているリモートインストールも表示されます。

Remote Installation Monitor

現在開始されているリモートインストールをテーブル形式で示しています。

- ❗ 少なくとも1つのリモートインストールプロセスが開始されているときのみ、テーブルが表示されます。

テーブルの各行には、開始されたインストールプロセスについての、プロセスを設定したときに定義した主な数値と、インストールの現在の状態が表示されます。

MAC アドレス

Deployment サーバがインストール中にターゲットシステムとの通信に使用する、ターゲットシステム上の LAN ポート(ネットワークカード)の MAC アドレス

ハードウェア ID

ターゲットシステムの PRIMERGY のタイプ

OS

ターゲットシステムにインストールされた OS

進捗状況

現在のインストールプロセス状況

コメント

インストールプロセスに関する情報

リフレッシュ

「一覧を自動で更新する」の選択を解除すると、「更新」ボタンを使用して表示を更新できます。

一覧を自動で更新する

このオプションを選択すると、開始されたインストールプロセスの表示は自動的に更新されます。

- 進捗状況を把握したいインストールプロセスを示すテーブル行をクリックします。

選択した MAC アドレス

リモートインストールテーブルで選択したインストールプロセスの MAC アドレスを表示します。

インストール中止

選択したインストールプロセスを停止し、関連するエントリをリストから削除します。

進行状況

選択したインストールプロセスの進捗を表示します。

ログファイル

選択したインストールプロセスのログ情報を表示します。

システムデータ

選択したインストールプロセスに対する、ターゲットシステムのシステムデータを表示します。

一覧を自動で更新する

このオプションを選択すると、表示エリアの情報は自動的に更新されます。

リフレッシュ

「一覧を自動で更新する」の選択を解除すると、「更新」ボタンを使用して表示エリアの情報を更新できます。

8.2 リモートインストールの監視

Installation Monitor は、現在 Deployment サーバ上で開始されているすべてのリモートインストールプロセスをテーブルに一覧表示します。設定された内容(ターゲットシステム、OS など)に加えて、Installation Monitor は各プロセスの現在の状態も表示します。

インストールが開始され、ターゲットシステムの PXE ブートがまだ実行されていない場合

以下の図では、MAC アドレスが 00-0A-E4-15-37-56 のターゲットシステムのインストールプロセスが Installation Monitor による監視対象に選択されています。

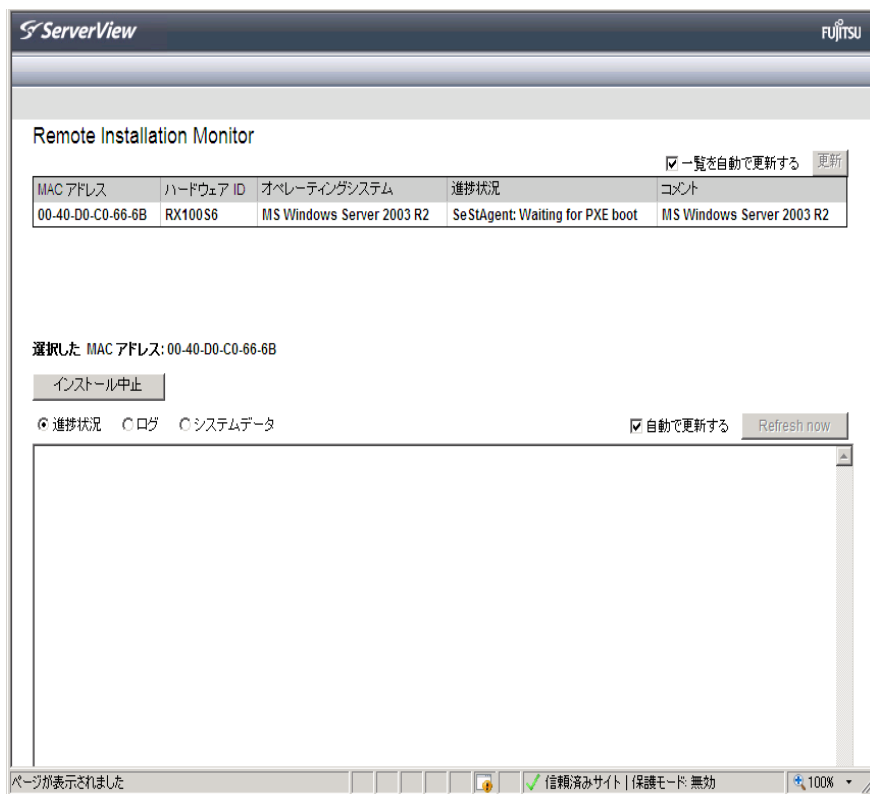


図 80: Installation Monitor :インストールが開始され、ターゲットシステムの PXE ブートがまだ実行されていない場合

MAC アドレスが 00-0A-E4-15-37-56 のターゲットシステムではまだ PXE ブートは実行されていないため、関連付けられたインストールプロセスの状態は「SeStAgent: Waiting for PXE boot」です。

インストールが開始され、ターゲットシステムの PXE ブートが実行された場合 MAC アドレスが 00-0A-E4-15-37-56 のターゲットシステムの PXE ブートがまもなく開始されます。つまり、インストールプロセスで OS(ここでは Windows Server 2003) のターゲットシステム上でのインストールを開始できるということです。



図 81: Installation Monitor .OS のターゲットシステムへのインストール

現時点では、インストールプロセスの状態は「SeSt: Create Partition」で、インストールプロセスは設定したデフォルト値に従ってターゲットシステム上にパーティションを作成します。

「進行状況」オプションが選択されているため、プロセスの進行状況が表示エリアに表示されます。現在実行されているプロセスステップの他に、すでに実行済みのプロセスステップも記録されます。

ターゲットシステム上への OS のインストールが正常に完了した場合
OS(ここでは Windows Server 2003) のターゲットシステムへのインストールが正常に完了しました。

以下の図では「**進行状況**」オプションが選択されているため、プロセスの進行状況が表示エリアに表示されます。実行されたすべてのプロセスステップが記録されます。



図 82: Installation Monitor :インストールが正常に完了しました。表示 :プロセスの進行状況

8 Installation Monitor – リモートインストールの監視

以下の図では、「ログ」オプションが選択されています。

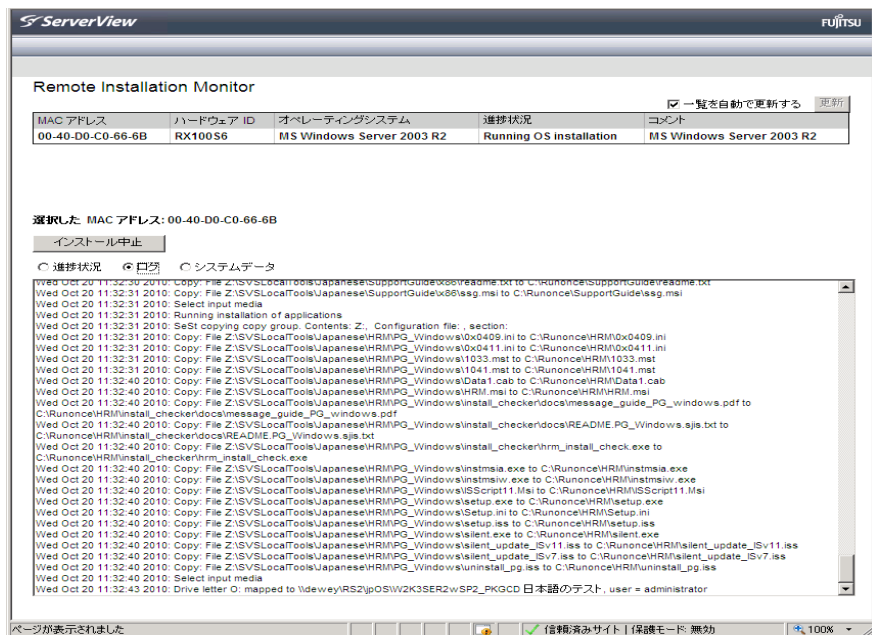


図 83: Installation Monitor: インストールが正常に完了しました。表示: ログ情報

以下の図では、「システムデータ」オプションが選択されています。

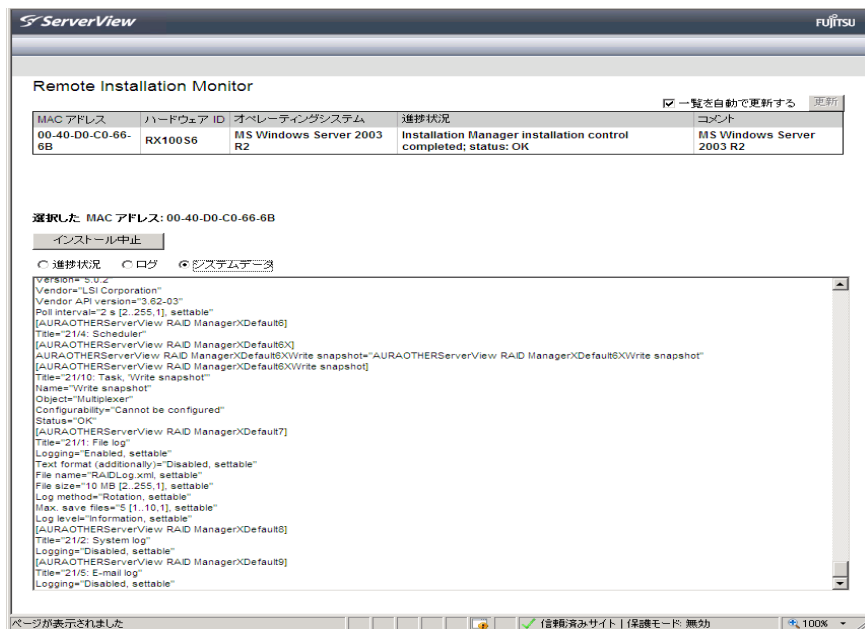


図 84: Installation Monitor :インストールが正常に完了しました。表示 :システムデータ

9 Maintenance

Installation Manager を ServerView Suite DVD 1 から起動するか、Deployment サーバ上のアプリケーションとしてインストールするかによって、ユーザインターフェースの開始ページの「**Maintenance**」をクリックした後以下の機能を使用できます。

- Installation Manager を ServerView Suite DVD 1 から開始した場合：
インストール済みのサーバのメンテナンスとコンフィグレーションの各種オプション(267 ページの [PRIMERGY サーバのメンテナンスとコンフィグレーション](#)の章を参照)。
- Installation Manager が Deployment サーバで開始済みの場合：
 - Multi Deployment(MDP) セットを設定し、管理します。
 - Installation Manager の PXE インフラストラクチャを使用して、任意の必要なブートイメージを起動します。
 - Installation Manager リポジトリのバックアップを作成します。
 - バックアップを使用して Installation Manager リポジトリを復元します。

詳細は、272 ページの [Deployment サーバのメンテナンス](#)を参照してください。

9.1 PRIMERGY サーバのメンテナンスとコンフィグレーション

PRIMERGY サーバのデプロイメントの他に、Installation Manager にはすでにインストールされているサーバのメンテナンスとコンフィグレーションのための各種オプションが備わっています。

これらを使用するには、ServerView Suite DVD 1 からサーバ上で Installation Manager を起動して、Installation Manager のようこそ画面のメニューバーのエントリまたは表示エリアで「**Maintenance Installation Manager**」をクリックします。

「**ServerView Installation Manager Maintenance**」画面が表示されます。



図 85: 「ServerView Installation Manager Maintenance」画面

ServerView RAID

ServerView RAID Manager を開始して、サーバの RAID コントローラのコンフィグレーションとメンテナンスを行います。

Server Configuration Manager

Server Configuration Manager を開始して、サーバの一般的なシステム動作と、存在する場合は BMC、iRMC、または iRMC S2 を設定します。

iSCSI Boot Wizard

iSCSI Boot Configuration Wizard を開始して、ローカルにインストールされた Windows Server OS を iSCSI ターゲット LUN にクローンまたはコピーします。

9.1.1 ServerView RAID

ServerView RAID Manager によって、サーバに接続されている RAID コントローラを監視し、構成できます。

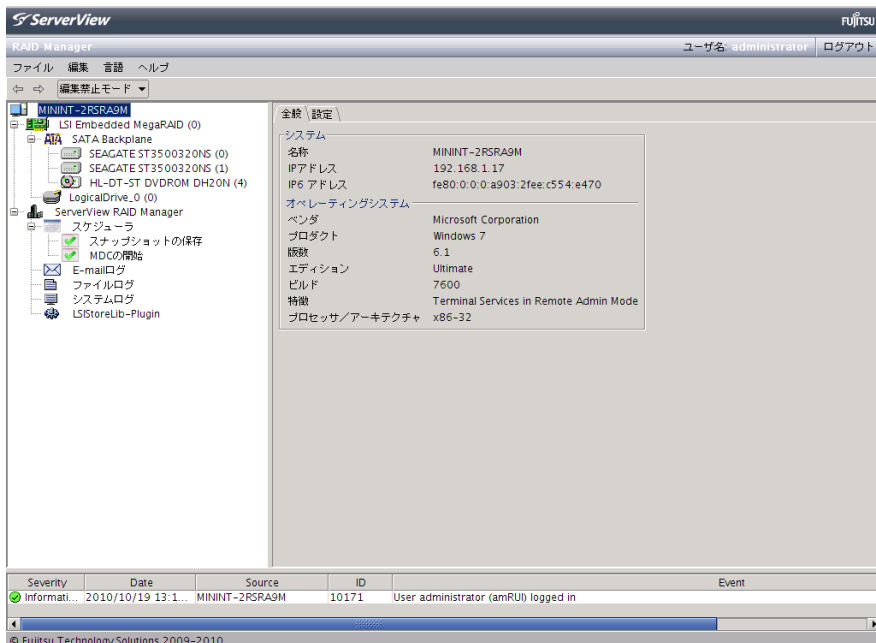


図 86: ServerView RAID Manager

ServerView RAID Manager の操作方法については、マニュアル『ServerView Suite ServerView RAID Manager』で説明しています。

9.1.2 Server Configuration Manager

Server Configuration Manager では、一連の手順を通じてサーバの一般的なシステム動作と、存在する場合は BMC、iRMC、または iRMC S2 の設定を指定できます。



ここで開かれるダイアログの順序と機能は、[95 ページの Server Configuration Manager](#)を参照してください。レイアウトのみが異なります。

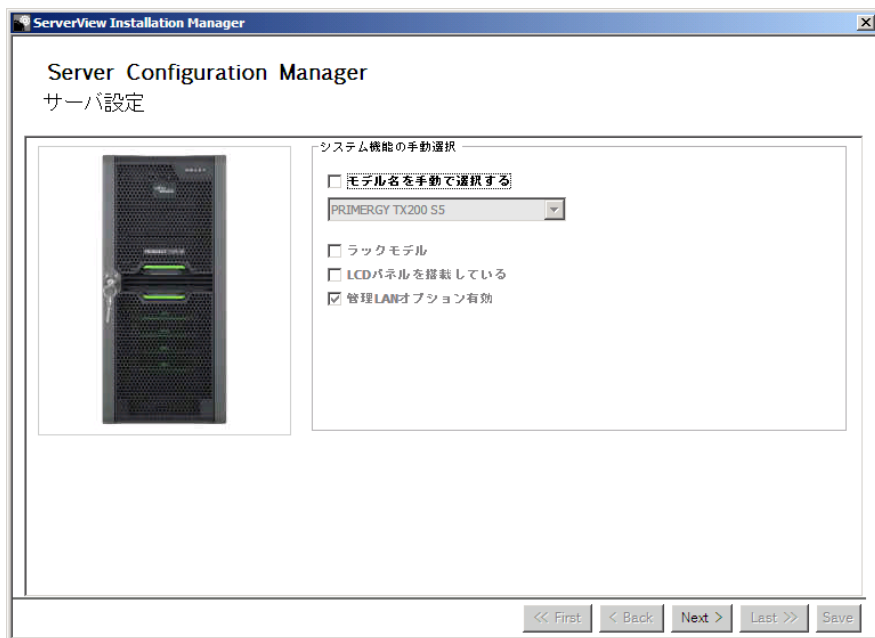


図 87: Server Configuration Manager

<<First

最初のコンフィグレーション手順に移動します。

<Back

前のコンフィグレーション手順に移動します。

Next>

次のコンフィグレーション手順に移動します。

Last>>

最後のコンフィグレーション手順に移動します。

Save

現在のセッションのコンフィグレーションパラメータを PRIMERGY システムの不揮発性メモリ領域に書き込みます。この領域はサーバ管理機能に予約されています。

9.1.3 iSCSI Boot Wizard(Windows Server 2003 のみ)

iSCSI Boot Configuration Wizard では、サーバにインストールされている Windows Server OS を iSCSI ブートのリファレンスシステムとして準備し、この OS のクローンまたはコピーを iSCSI ターゲット LUN に転送できます。

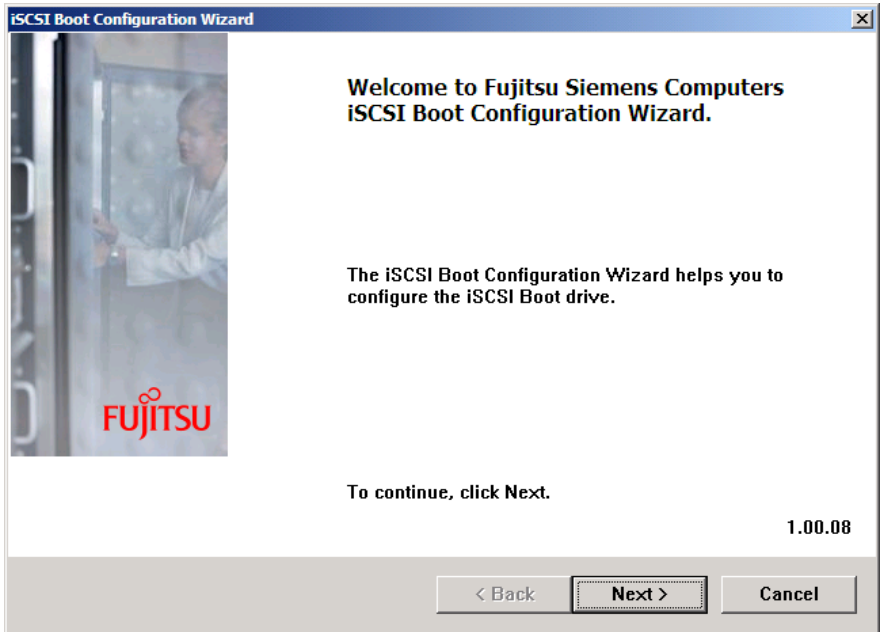


図 88: iSCSI Boot Configuration Wizard の開始ウィンドウ

- ❶ iSCSI ブートに必要なコンポーネントは、ServerView Suite DVD 1 に収録されています。

iSCSI Boot Configuration Manager の詳細は、ServerView Suite DVD 2 に収録されているマニュアル『BIOS integrated iSCSI Boot for PRIMERGY Servers』に記載されています。

9.2 Deployment サーバのメンテナンス

Deployment サーバで Installation Manager を起動してユーザインターフェースで「Maintenance」をクリックすると、「ServerView Installation Manager Maintenance」画面で以下の機能を使用できます。

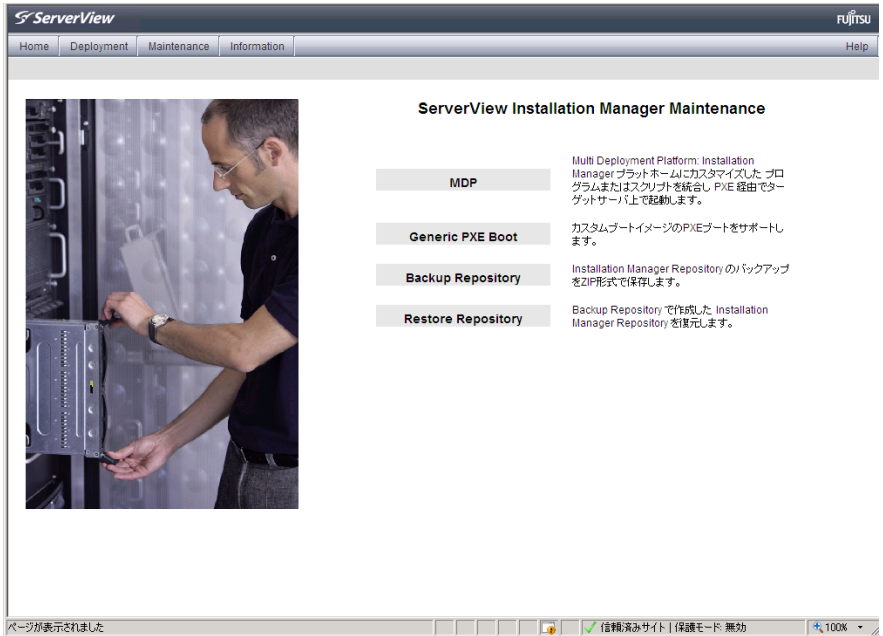


図 89: 「ServerView Installation Manager Maintenance」画面

MDP

Installation Manager プラットホーム(MS Windows PE) にカスタマイズしたプログラムまたはスクリプトを統合し、PXE ブート経由でターゲットシステムのパッケージを起動します。

Generic PXE Boot

Installation Manager の PXE インフラストラクチャを使用して、任意の必要なブートイメージを起動します。

Backup Repository

Installation Manager リポジトリのバックアップを作成します。

Restore Repository

バックアップを使用して Installation Manager リポジトリを復元します。

9.2.1 Multi Deployment(MDP) セットのコンフィグレーションと管理

Multi-Deployment Platform(MDP) は起動可能なプラットフォームで、Installation Manager からユーザ固有の目的で提供されています。MDP は、ServerView Suite DVD 1 を使用してローカルに開始することも、PXE を介してリモートで開始することもできます。



MDP インフラストラクチャについては、ServerView Suite DVD 2 に収録されている「MDP – Multi-Deployment Platform」ホワイトペーパーで説明しています。

MDP によって、「MDS セット」に基づく PXE ブートを開始できます。MDP セットはユーザ固有のスクリプト及びプログラムのコレクションで、MDP プラットフォームで PXE ブートを実行するために実行されます。

PXE ブートに必要な MDP 構造情報(コンフィグレーションファイルなど) は、すべてカスタム MDP セットに集約されます。

MDP セットには 2 種類あります。

- 事前設定された MDB セット

MDP セットの事前設定は、ユーザが作成し、Installation Manager で利用できるようにした既存の MDP セットです。MDP セットには MDP 処理に必

要な MDP インフラストラクチャ情報(設定データ、メタデータなど) がすべて含まれている必要があります。

- MDPコンフィグレーション

MDP コンフィグレーションでは、実行可能ファイルのみを提供します。Installation Manager はこれらのファイルを使って必要な MDP インフラストラクチャ情報を自動的に生成します。MDP コンフィグレーションは、Installation Manager 内でのみ管理できます。

「MDP コンフィグレーション」ダイアログボックスでは、以下の処理を実行できます。

- 新しい MDP セットを設定する(MDP セットコンフィグレーション)
- テーブル内の MDP セットを管理する(事前設定 MDP セットと MDP コンフィグレーション)
- 選択した MDS セットに基づいて PXE ボートを準備し、開始する

以下の手順に従います。

「ServerView Installation Manager Maintenance」ウィンドウで、「MDP」リンクをクリックして「MDP コンフィグレーション」ダイアログを開きます。

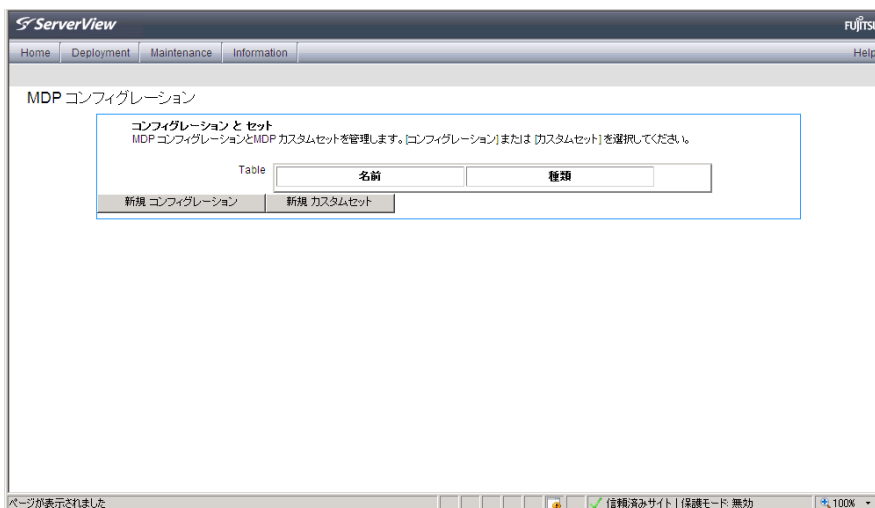


図 90: 「MDP コンフィグレーション」ダイアログ

「MDP コンフィグレーション」ダイアログボックスには、現在 Installation Manager で使用できるすべての MDP セットが表形式で表示されます。事前設定された MDP セットはタイプ「カスタムセット」として表示されます。MDP コンフィグレーションはタイプ「コンフィグレーション」として表示されます。

新規コンフィグレーション

「ジェネリック MDP コンフィグレーション」ダイアログボックスを開きます。ここで、新しい MDP セットの構成に必要な MDP インフラストラクチャ情報(パラメータ、エージェント、ファイルなど)を指定できます。また、MDP セットに名前を割り当てることもできます。

新規カスタムセット

「MDP セットの事前設定」ダイアログボックスを開き、「MDP コンフィグレーション」テーブルにカスタム MDP セットを追加します。

編集

選択した MDP セットの編集ダイアログボックスが表示されます。



このボタンは、「MDP コンフィグレーション」テーブルで MDP セットを選択した場合にのみ有効になります。

開くダイアログボックスは、カスタム MDP セットを選択したか、MDP コンフィグレーションを選択したかによって異なります。

カスタム MDP セットを選択した場合：

「MDP セットの事前設定」ダイアログボックスで、選択したカスタム MDP セットの名前を変更できます。

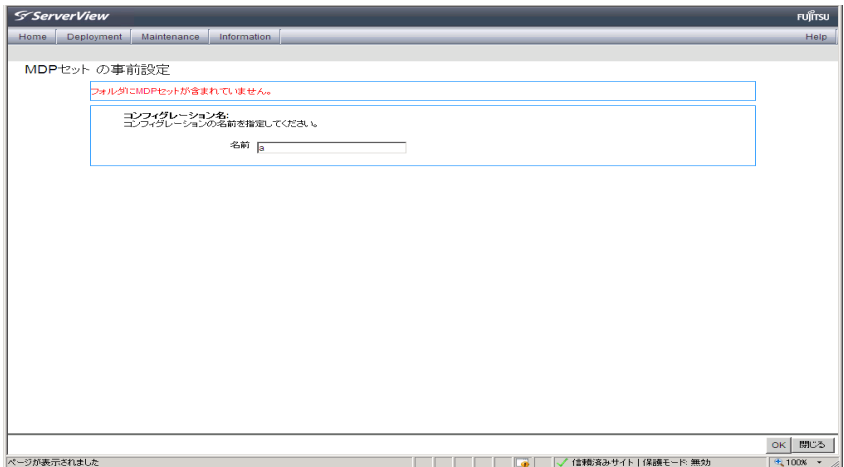


図 91: Multi Deployment Platform – 事前設定 MDP セットの名前変更

名前

選択した MDP セットの新しい名前。

Ok

新しい名前を選択した MDP セットに適用します。

閉じる

ダイアログを閉じます。

MDP コンフィグレーションを選択した場合：

「ジェネリック MDP コンフィグレーション」ダイアログボックスで、選択した MDP コンフィグレーションの現在の設定を表示および変更できます。

削除

確認ダイアログに従って、選択した MDP セットを削除します。

このボタンは、「MDP コンフィグレーション」テーブルで MDP セットを選択した場合にのみ有効になります。

Boot

「Generic PXE Boot」ダイアログが表示され、選択した MDP セットに基づいた PXE ブートを準備して開始できます。

閉じる

「MDP コンフィグレーション」ダイアログが閉じます。

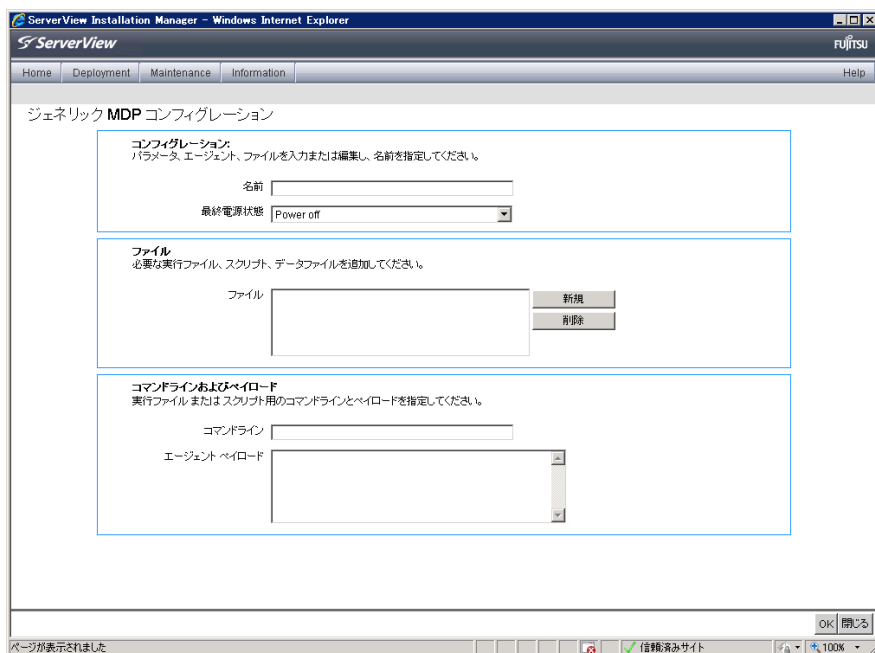
9.2.1.1 新しい MDP セットの設定

図 92: Multi Deployment Platform – ジェネリック MDP コンフィグレーション

「ジェネリックMDP コンフィグレーション」ダイアログボックスでは、新規 MDP セットの設定に必要な MDP インフラストラクチャ情報(パラメータ、エージェント、ファイルなど)を指定します。また、MDP セットに名前を割り当てることもできます。

MDP コンフィグレーションでは、実行可能ファイルのみを提供します。Installation Manager はこれらのファイルを使って必要な MDP インフラストラクチャ情

報を自動的に生成します。MDP コンフィグレーションは、Installation Manager 内でのみ管理できます。

MDP コンフィグレーションは「**コンフィグレーションとカスタムセット**」テーブルに表示されます。

設定

MDP セットの名前と、MDP セットの PXE ベースの実行に続くターゲットシステムの最終電源状態を設定します。

名前

MDP セットの名前を入力します。

最終電源状態

MDP セットの PXE ベースの実行に続くターゲットシステムの最終電源ステータスを設定します。

Power Off

デフォルト値。ターゲットシステムの電源が切断されます。

リブート

ターゲットシステムをリブートします。

ファイル

必要な MDP インフラストラクチャ情報(パラメータ、エージェント、実行可能ファイル、スクリプト、およびその他ファイル)を指定します。

新規

ダイアログボックスが開き、現在のコンフィグレーションにファイルを追加できます。

追加したすべてのファイルは「**ファイル**」フィールドに表示されます。

削除

「**ファイル**」フィールドで選択したエントリを削除します。また、該当するファイルをコンフィグレーションから削除します。

コマンドラインおよびペイロード

実行可能ファイルまたはスクリプトに対するコマンドライン、および実際のパラメータを入力します。

コマンドライン

実行可能ファイルまたはスクリプトに対するコマンドラインです。

エージェントペイロード

MDP プロセスに

<drive>:\\$MDP\Config.ini ファイル経由で指定されるデータ。

Ok

新しい MDP セットを「コンフィグレーションとカスタムセット」テーブルにコピーします。

既存の MDP コンフィグレーションの場合 : 変更した設定を適用します。

閉じる

ダイアログを閉じます。

9.2.1.2 新しいセットの追加/カスタムセットの編集

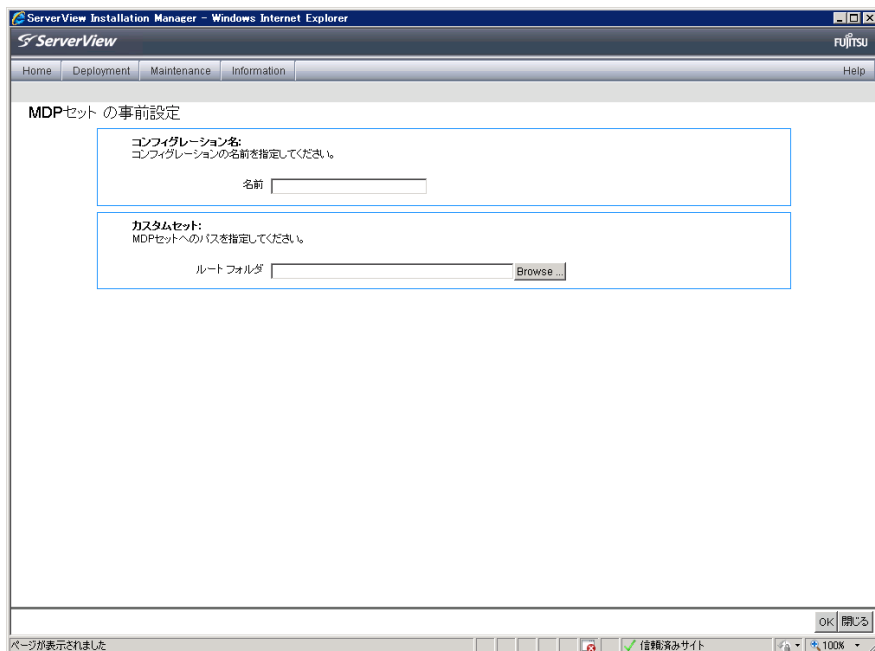


図 93: Multi Deployment Platform – 事前設定された MDP セットの追加

「MDP セットの事前設定」ダイアログボックスで、「**コンフィグレーションとカスタムセット**」テーブルにカスタム MDP セットを追加したり、テーブルに対応するエントリのあるカスタム MDP セットの名前を変更したりできます。

MDP セットの事前設定は、ユーザが作成し、Installation Manager で利用できるようにした既存の MDP セットです。MDP セットには MDP 処理に必要な MDP インフラストラクチャ情報(設定データ、メタデータなど)をすべて含んでいる必要があります。

コンフィグレーション名

今後使用する MDP セットの名前を定義または変更します。

名前

今後使用する MDP セットの名前を指定します。

カスタムセット



「MDP コンフィグレーション」ダイアログボックスで**編集**をクリックした場合は、「**カスタムセット**」グループは表示されません。

既存の MDP セットへのパスを指定します。

ルートフォルダ

コンフィグレーションに追加する MDP セット。

フォルダアイコンをクリックすると、ファイルブラウザで MDP セットパスを選択できます。

Ok

選択した MDP セットを「**コンフィグレーションとカスタムセット**」テーブルにコピーします。

「MDP コンフィグレーション」ダイアログボックスで**新規カスタムセット**をクリックしてダイアログボックスを開いた場合：

選択した MDP セットを「**コンフィグレーションとカスタムセット**」テーブルにコピーします。

「MDP コンフィグレーション」ダイアログボックスで**編集**をクリックしてダイアログを開いた場合：

MDP セットに新しい名前が付けられます。

閉じる

ダイアログを閉じます。

9.2.1.3 PXE ブートの準備と開始

「Generic PXE Boot」ダイアログで、選択した MDP セットに基づいて PXE ブートを準備して開始できます。

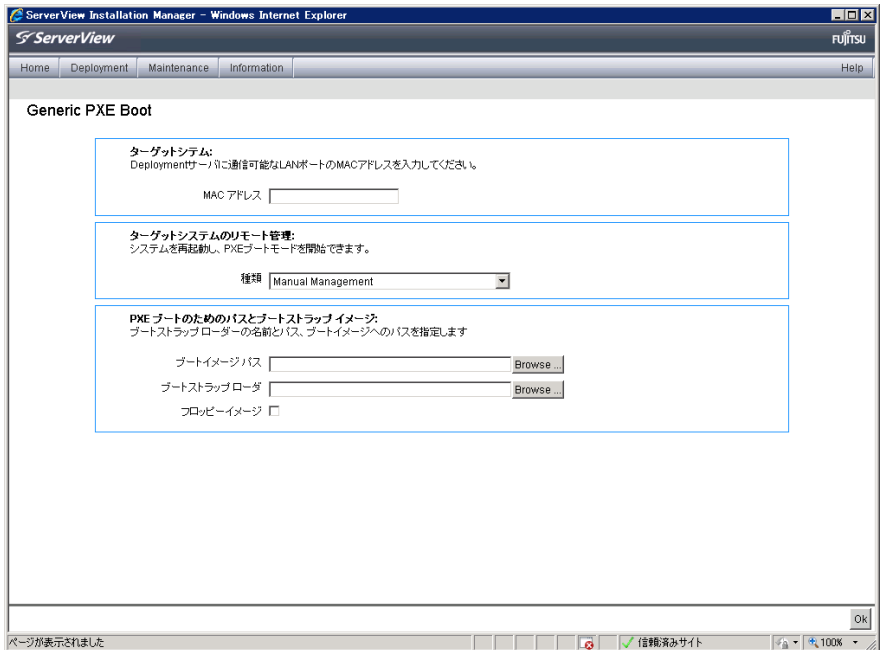


図 94: MDS セットに基づくジェネリック PXE ブート

「Generic PXE Boot」ダイアログボックスについては、[283 ページの 任意の必要なブートイメージを PXE から起動する](#)を参照してください。

Ok

MDP セットベースの Generic PXE Boot を開始します。リモートインストールを開始すると、Installation Monitor が自動的に開始します。Installation Monitor の画面はリモートインストールの進捗と状況を表示します。

9.2.2 任意の必要なブートイメージを PXE から起動する

PXE ブートインフラストラクチャは、PRIMERGY サーバのコンフィグレーションとインストール全般のみでなく、ターゲットシステム上の任意の必要なブートイメージを PXE を介して起動する際にも使用できます。

- 「ServerView Installation Manager Maintenance」画面で「Generic PXE Boot」をクリックして「Generic PXE Boot」ダイアログを開きます。

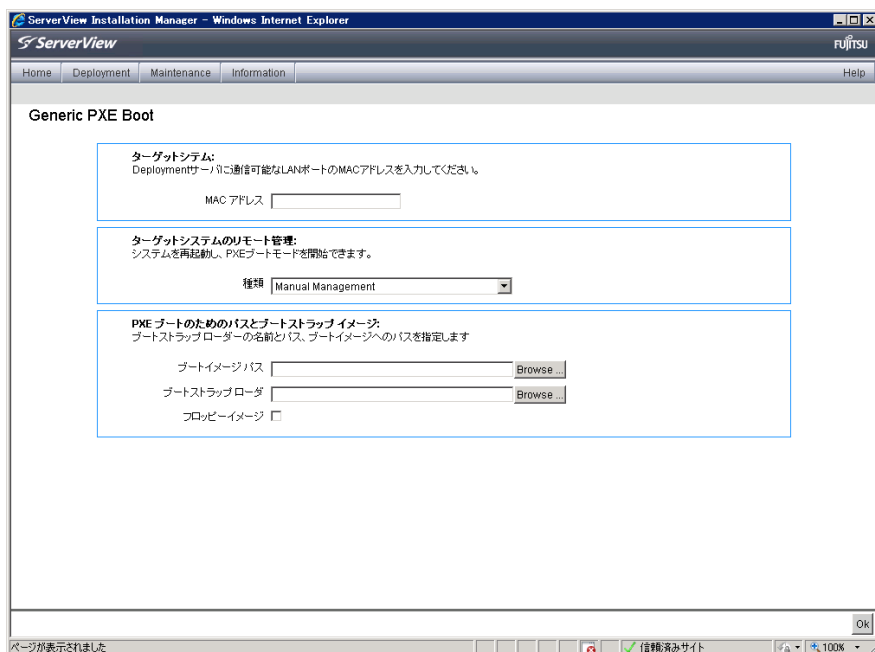


図 95: Generic PXE Boot

保存されたMAC アドレス

ここで、以前保存した MAC アドレスをリストから選択できます。この MAC アドレスはターゲットシステムグループの「MAC アドレス」フィールドに自動的に表示されます(以下を参照)。

ターゲットシステム

ブートイメージを起動させるターゲットシステムを指定します。

MAC アドレス

LAN ポート(ネットワークカード)の MAC アドレス。インストール中に Deployment サーバとターゲットシステム間の通信を有効にするために使用します。

ターゲットシステムのリモート管理インターフェース

ここでは、一般ブート処理(ターゲットシステムのリブートがある場合とない場合)の一部として、以下の場合に PXE モードがターゲットシステム上で自動的に有効になるように設定できます。

- ターゲットシステムがリモート管理インターフェース(BMC、iRMC、iRMC S2、マネジメントブレード)を持つ場合
- ターゲットシステムに Wake on LAN(WoL) 対応 LAN アダプタ(ネットワークカード)がある場合



ターゲットシステムにこれらのリモート管理インターフェースがない場合は、PXE ブートするターゲットシステムをローカル操作で明示的に開始する必要があります。

タイプ

ターゲットシステムのリモート管理インターフェースのタイプ。

以下のオプションから選択できます。

- リモートマネジメントコントローラ(IPMI): BMC、iRMC、または iRMC S2 搭載の PRIMERGY サーバの場合。
- マネジメントブレード(SNMP): PRIMERGY ブレードサーバの場合。

- **Wake On LAN** : Wake on LAN(WoI) 対応ネットワークカード(NIC) 搭載のターゲットシステムの場合。ターゲットシステムの電源がオフの場合でも、ターゲットシステムのスタンバイブランチから給電されます。
- **No remote control** : ターゲットシステムにリモート管理インターフェースがない場合。この場合、PXE ブートするようターゲットシステムをローカル操作で開始する必要があります。

「リモートマネジメントコントローラ(IPMI) 」パラメータ

IP アドレス

BMC、iRMC、または iRMC S2 の IP アドレス。

IPMI ユーザ

ターゲットシステムの BMC、iRMC、iRMC S2 のローカルユーザアカウント。

IPMI パスワード

BMC、iRMC、iRMC S2 のローカルユーザアカウントのパスワード。

コマンド

ターゲットシステムでインストールをいつどのように開始するか指定します。

Restart system and boot via PXE boot :

PXE ブートモードを自動的に有効にし、その後ターゲットシステムは再起動します。

Set boot mode to PXE (no restart):

PXE ブートモードを自動的に有効にし、その後ターゲットシステムは再起動されません。この場合、手動で再起動を行う必要があります。

「マネジメントブレード」パラメータ

IP アドレス

マネジメントブレードの IP アドレス。

SNMP コミュニティ

マネジメントブレードに対応する権限を持つ SNMP ユーザグループ。

コマンド

ターゲットシステムでインストールをいつどのように開始するか指定します。

Restart system and boot via PXE boot :

PXE ブートモードを自動的に有効にし、その後ターゲットシステムは再起動します。

Set boot mode to PXE (no restart):

PXE ブートモードを自動的に有効にし、その後ターゲットシステムは再起動されません。この場合、手動で再起動を行う必要があります。

「Wake On LAN」パラメータ

「Wake on LAN」の場合、Installation Manager は IP ブロードキャストまたは Ethernet ブロードキャストを使用してマジックパケットを UDP データグラムとして、ターゲットシステムが属するサブネットに送信します。

以下ようになります。

- ターゲットシステムが Deployment サーバと同じ LAN セグメントにある場合、「**ブロードキャストアドレス**」にアドレスを指定する必要はありません。この場合、Installation Manager が限定されたブロードキャストアドレスの 255.255.255.255 を自動的に使用し、ターゲットシステムの **MAC アドレス**を使用してマジックパケットを UDP ポート 9 に Ethernet ブロードキャストとして送信します。

- ターゲットシステムが1 つまたは複数のゲートウェイによってブリッジされる別の LAN セグメントにある場合、「**ブロードキャストアドレス**」に以下のいずれかを入力します。
 - ターゲットシステムが属する LAN セグメントのサブネットブロードキャストアドレス。アドレスにはデバイス領域(ホスト領域) に値「255」を指定する必要があります(例 : 123.123.2.255) 。

この場合、マジックパケットは1 つまたは複数のホップを経由してゲートウェイに送信され、ゲートウェイは最終的に Ethernet ブroadcastキャストをターゲットシステムのサブネットに転送します。
 - BOOTP/DHCP サーバの IP アドレス。

この場合、「**ブートストラップサーバへ送信する**」オプションを選択して、ターゲットシステムの LAN セグメントにおいて「**IP アドレス**」に有効な IP アドレスを指定します。

ブロードキャストアドレス

ターゲットシステムが属する LAN セグメントのサブネットブロードキャストアドレス、または BOOTP/DHCP サーバのユニキャストアドレス。

BOOTP/DHCP サーバのユニキャストアドレスを指定する場合、「**ブートストラップサーバへ送信する**」オプションを選択する必要があります。

ブートストラップサーバへ送信する

このオプションを選択すると、マジックパケットは UDP ポート 67(Bootstrap Protocol(BOOTP) サーバ) に送信され、選択しないと、UDP ポート 9 に送信されます。

このオプションは、「**ブロードキャストアドレス**」に BOOTP/DHCP サーバのユニキャストアドレスを指定する場合に必要です。また、サブネットブロードキャストに含まれるすべてのゲートウェイが「**サブネットブロードキャスト**」に設定されている保証がない場合は、このオプションを選択してください。

IP アドレス

ターゲットサーバのサブネットにおける任意のユニキャストアドレス。この IP アドレスを使用して、BOOTP/DHCP サーバはマジックパケット(この場合、DHCP/BOOTP 返信パケット)の送信に使用する LAN インターフェース(LAN ポート)を決定します。

PXE ブートのためのパスとブートストラップ



「PXE ブートのためのパスとブートストラップ」グループは、Generic PXE Boot を「**ServerView Installation Manager Maintenance**」画面から直接起動した場合のみ表示されます。MDP セット(事前設定された MDP セットまたは MDP コンフィグレーション)を使用している場合は、対応する情報が MDP セットから提供されます。

ブートストラップローダの名前とパス、ブートイメージへのパスを指定します。



ブートイメージとブートストラップローダは Deployment サーバ上にある必要があります。

ブートイメージパス

ブートイメージが格納されている Deployment サーバ上のディレクトリ。

Bootstrap Loader

Deployment サーバ上のブートストラップローダのディレクトリと名前。

フロッピーイメージ

ブートイメージをディスクイメージと定義します。

OK

ターゲットシステムのブートイメージを PXE で起動します。

リモートインストールを開始すると、Installation Monitor が自動的に開始します。Installation Monitor の画面はリモートインストールの進捗と状況を表示します。

9.2.3 Installation Manager リポジトリのバックアップを作成する/インポートする

Installation Manager repository は、自動インストールを行うためのコンフィグレーションファイル、リモートインストールのための詳細データ(PXE ブートするターゲットシステムのリモート管理インターフェースの MAC アドレスなど)を含みます。

Installation Manager に搭載されている以下の機能で、常に完全なリポジトリの可用性を確保できます。

- **Backup Repository** は、Installation Manager repository のバックアップを作成し、ZIP ファイルに保存できます。
- **Restore Repository** 機能を使用して、バックアップから Installation Manager リポジトリを復元できます。

9.2.3.1 Installation Manager リポジトリのバックアップを作成する

Backup Repository を使用して、Installation Manager リポジトリのバックアップを作成し、ZIP ファイルに保存できます。

- 「**ServerView Installation Manager Maintenance**」画面で「**Backup Repository**」リンクをクリックして「**Backup Repository**」ダイアログを開きます。

ディレクトリ

保存する repository バックアップのディレクトリ。

フォルダアイコンをクリックすると、ファイルブラウザでディレクトリを選択できます。

名前

リポジトリのバックアップコピーの名前。

Ok

リポジトリのバックアップコピーを作成します。

閉じる

ダイアログを閉じます。

9.2.3.2 Installation Manager リポジトリの復元

Restore Repository 機能を使用して、バックアップコピー(ZIP ファイル) から Installation Manager リポジトリを復元できます。

- 「**ServerView Installation Manager Maintenance**」画面で「**Restore Repository**」リンクをクリックして「**Restore Repository**」ダイアログを開きます。

バックアップファイル

リポジトリバックアップファイルのパス名。

フォルダアイコンをクリックすると、ファイルブラウザでディレクトリを選択できます。

Ok

リポジトリの復元を開始します。

閉じる


ダイアログを閉じます。

10 Installation Manager Information

Installation Manager GUI の開始ページのメニューバーまたは開始ページの表示領域で「**Information**」エントリをクリックすると「**Information**」画面が表示されます。



図 96: Information 画面

 操作手順書およびテクニカルマニュアルは、ServerView Suite DVD 2 に収録されています。

What's New

Installation Manager の最新リリースでの変更情報や、以前のリリースの変更履歴を提供します。

注意事項

制約や製品の依存関係に関する情報や、推奨する解決方法を提供します。

Driver Index

Installation Manager が PRIMERGY サーバおよびそのハードウェアコンポーネントにインストールするドライバおよびソフトウェアパッケージの概要を提供します。

Technical Information

PRIMERGY サーバに Linux をインストールする場合の技術情報を提供します。

Documents

マニュアルやホワイトペーパーを参照できます。

EULA

エンドユーザライセンス契約書を参照できます。

Installation Manager を独立したアプリケーションとして起動している場合、情報ページには以下のエントリも含まれます(Fujitsu Technology Solutions の Web ページへのリンク)。

Manuals

Fujitsu Technology Solutions の Web サイトにある「**Online Manuals**」ページにリンクされます。ここではインターネット接続が必要です。

Products

Fujitsu Technology Solutions の Web サイトにある「**PRIMERGY Servers**」ページにリンクされます。ここではインターネット接続が必要です。

ServerView Links

ServerView Suite リンク集には、ServerView Suite サーバおよび PRIMERGY サーバに関する詳細情報へのリンクが含まれます。

11 参考情報

このセクションでは、以下のトピックについて説明します。

- PXE(Preboot eXecution Environment) プロセス
- DHCP サーバの設定
- 仮想ローカルエリアネットワーク(VLAN)

11.1 PXE プロセス

PXE プロセスは PXE プロトコルに基づいています。これは、LAN アダプタの特殊なブートモードによってサポートされています。システム BIOS がシステムブート中に LAN アダプタをブートデバイスとして有効にしてジャンプするまで、アクティブにはなりません。このためには、LAN デバイスをシステム BIOS ブート順序で最高の優先度に設定する必要があります。

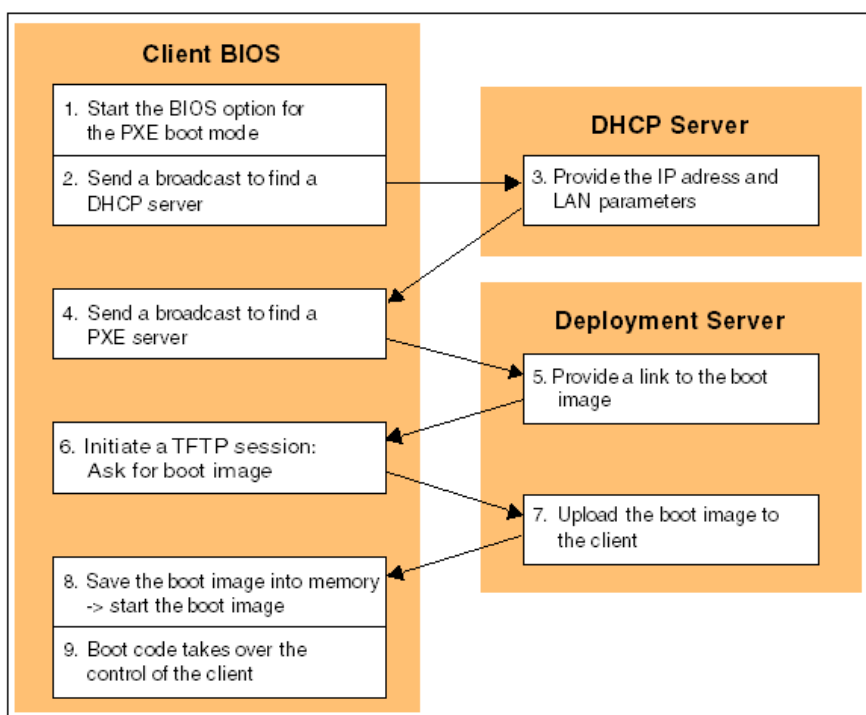


図 97: PXE プロセス

- 2-3 クライアント側のブートプロセスがDHCP サーバへの PXE ブロードキャストで開始し、一時 IP アドレスを受信します(必須)。
- 4-5 同様のブロードキャストでポート 67 および 4011(DHCP サーバが発行した情報による) の PXE ブートサーバが検出され、ブートイメージ名を要求します。
- 6-8 要求された情報が提供されると、TFTP セッションが開始し、PXE サーバからブートイメージを受信します。イメージサイズは 1.44 MB までです(フロッピーディスクのエミュレーションモード)。このブートイメージはメモリアドレス 07C0h にコピーされ、BIOS によって起動されます。
- 9 OS カーネルが開始されず、カーネルドライバも開始されていなければ、LAN アクセスは PXE BIOS を使用して実行されます。

PXE プロトコルは Installation Manager の PXE サービスによって使用され、Installation Manager プラットフォームをリファレンスシステム上でリモートに起動します。このため、Deployment サーバ(Installation Manager がインストールされている)には、ブートストラップファイルと実際の OS イメージが RamDisk イメージの形式で格納されています。

このイメージ(約 160 MB)は 32 ビットバージョンと 64 ビットバージョンで重複して存在します。どちらのバージョンのイメージが選択されるかは、Windows OS のインストールタイプに依存します。RamDisk イメージが転送された後、Installation Manager プラットフォーム(Installation Manager のクライアントインスタンス)がターゲットシステム上で自律的に実行されます。ネットワーク接続は、その他のインストールリソース(ドライバ、ソフトウェアパッケージ、OS イメージ)を動的にロードする場合と、Installation Monitor でステータスを追跡する場合にのみ必要です。



Installation Manager プラットフォームディレクトリのサイズは約 2 x 160 MB です。ただし、PXE クライアントを実行するターゲットシステム上に必要なメモリ容量はさらに大きくなります。リモートブートと自動インストールには、ターゲットサーバにメインメモリが最小 1024 MB 必要です。また、OS インストール自体にも追加メモリが必要です。

11.2 DHCP サーバの設定

DHCP(Dynamic Host Configuration Protocol)は、動的 IP アドレスをネットワーク内のデバイスに割り当てるプロトコルです。動的アドレス指定により、デバイスがネットワークに接続するたびに異なる IP アドレスが割り当てられます。一部のシステムでは、接続中であってもデバイスの IP アドレスが変更されることがあります。DHCP では、固定(予約済み)と動的 IP アドレスの混在をサポートしています。



DHCP と PXE を Deployment サーバ上で同時に実行している場合、両方のサービスが同じネットワークポートを占有し、PXE は DHCP プロキシとして動作します。このコンフィグレーションで DHCP がアンインストールされると、PXE を自律的に再インストールする必要があります。詳細は、Deployment Manager のマニュアルを参照してください。

デフォルトディレクトリ `C:\Program Files\Fujitsu\ServerView Suite\DeploymentService\Bin` に `localipaddress.txt` というファイルがあります。このソースから PXE サービスは IP アドレスを取得します。ファイルが空白、またはファイルが存在しない場合は、PXE サービスは自動的に LAN ポート 0 を占有します (DHCP が同じレベルにある場合は、DHCP も LAN ポート 0 を占有します)。「コントロールパネル」-「ネットワークとダイヤルアップ接続」-「設定」-「詳細設定」で、別の LAN ポートを使用することもできます。

DHCP の詳細は、以下の Web サイトを参照してください。

Red Hat Linux 9: Red Hat Linux Customization Guide

<http://www.redhat.com/docs/manuals/linux/RHL-9-Manual/custom-guide/ch-dhcp.html>

DHCP.org – Resources for DHCP(その先にリンクあり)

<http://www.dhcp.org/>

ntfaq.com – Frequently asked questions on DHCP

<http://www.ntfaq.com/Articles/Index.cfm?DepartmentID=774>

DHCP Handbook

http://www.dhcp-handbook.com/dhcp_faq.html

11.3 VLAN(仮想ローカルエリアネットワーク)

仮想 LAN は、実際には異なる物理的ネットワークに接続しているのに、すべての参加マシンが同じネットワーク内に存在するように動作する、ローカルネットワークです。VLAN はハードウェアよりもソフトウェアを使用して構成されるため、柔軟性が高くなっています。VLAN の最大の利点として、コンピュータが

別の場所に物理的に移動されたときでも、ハードウェアを再構成することなく同じ VLAN 上に留まることが挙げられます。



PXE エージェントコード(ターゲットサーバの BIOS ブートフェーズの一部) のプロトコルは、ポート 67 でブロードキャストを転送して PXE の LAN セグメントと DHCP サーバをスキャンします。これらのサーバが仮想 LAN ソフトウェアが有効にされているルータ、ハブ、またはスイッチの内側に設置されている場合、このデバイスをポートごとにプログラムしてブロードキャストをバイパスする必要があります。

マルチセグメントデプロイメントおよび必要なルータ設定については、[70 ページのマルチセグメントデプロイメントのルータの設定](#)を参照してください。

VLAN コンフィグレーション

ブレードサーバ上で実行されている PXE クライアントは VLAN をサポートせず、タグのないフレームを送信します。ただし、LAN は PRIMERGY サーバシステムでサポートされています。

VLAN の要件

- LAN の外部スイッチが VLAN をサポートすること
- サーバブレードネットワークコネクタ(NIC) のドライバを、複数の VLAN に統合できること
- PXE サーバからのイメージが VLAN 用に事前設定されたドライバを含んでいること

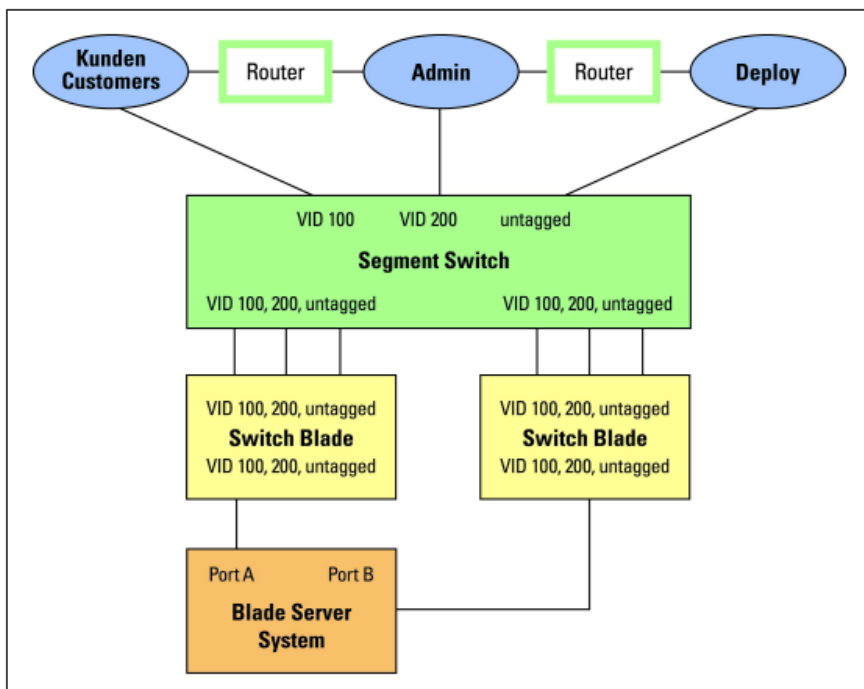
VLAN コンフィグレーションの例

- VLAN-ID を、セグメントスイッチ上の、デプロイセグメント以外のすべてのセグメントに割り当てる必要があります。
 - これにより、デプロイセグメントへのデータトラフィックはタグなしで転送されます。
 - PXE クライアントがタグなしフレームを送信する場合、スイッチブレードによってすべて 3 つのソースポートに割り当てられます。タグなしフレームはセグメントスイッチによってタグなしポート(デプロイセグメントに接続されている) にのみ転送されます。
 - OS がサーバブレードで起動された後、OS は VLAN コンフィグレーションによって複数の異なるセグメントを識別します。

- スイッチブレードのすべてのポートはすべての VLAN-ID を識別し、同時にタグなしフレーム向けに設定される必要があります。スイッチブレードはセグメント化を実行しませんが、VLAN コンフィグレーションがなければ、VLAN タグを持つすべてのフレームを破棄します。

サマリ

- PXE サービスデータはデプロイセグメントにのみ転送されます。
- VLAN コンフィグレーションはブートプロセス後にセグメントを分割します。
- セグメント間のデータ交換はルータを介してのみ実行できます。
- 完全冗長性は両方のネットワークコントローラに対して設定できます。



12 エンドユーザライセンス契約書

(Fujitsu Technology Solutions Software エンドユーザライセンス契約書)

1. 契約書の対象

1.1 本契約書において「ソフトウェア」とは、Fujitsu Technology Solutions のソフトウェア製品のデータシートに示される、オブジェクトコード、バージョン、および仕様を含むソフトウェアを意味します。

本ソフトウェアは、機械で読み取り可能な命令、印刷されたドキュメント、および関連するライセンスマテリアルで構成されます。

1.2 本ソフトウェアを使用する前に、本契約書をよくお読みください。本契約書の条項に同意しない場合、本ソフトウェアの使用は許可されません。全額返金いたしますので、本ソフトウェアのすべての複製および付属するすべてのアイテムと、購入を証明する書類を、ライセンサ/サブライセンサ(Fujitsu Technology Solutions または本ソフトウェアをお客様に提供した再販業者のいずれか)に直ちに返却してください。

1.3 本ソフトウェアを使用するには、適用されるライセンス費用を適切に支払う必要があります。本ソフトウェアを使用することにより、本契約書の条項に同意したとみなされます。

1.4 Fujitsu Technology Solutions は、ソフトウェアの不正コピー対策として、今後いつでも追加のソフトウェアライセンスキーの実装やライセンス証明書の発行を行う権利を有します。

1.5 納品物の一部である第三者ソフトウェアサプライヤのソフトウェアコンポーネントは、Fujitsu Technology Solutions からの要求があった場合、本ソフトウェアに含まれるライセンス契約、または送付されたライセンス契約と区別されることがあります。

2. エンドユーザライセンス

2.1 Fujitsu Technology Solutions は、ライセンスを購入した数のワークステーションで本ソフトウェアを使用するための非独占的かつ譲渡不能のライセンスをエンドユーザに付与します。ライセンスを追加購入しない限り、本ソフトウェアを、ライセンスが付与されたワークステーションの最大数を超えて使用したり、指定されたタイプ以上のハードウェアで使用することはできません。

著作権情報およびその他の所有者情報と共に本ソフトウェアの複製または一部の複製を適切に記録する場合、保存の目的でバックアップコピーを作成することが許可されます。

2.2 本ソフトウェアを複製、変更、または配布してはなりません。また、本ソフトウェアをリコンパイル、リエンジニアリング、変換、修正、コンパイル、または変更することも禁止します。本契約書により明示的に許可される場合を除き、強制的な法的規制により、関連するハードウェアを販売せずに本ソフトウェアのサブライセンスを付与したり、本ソフトウェアを付与、貸与、リース、譲渡してはなりません。

2.3 プログラムアップグレードとして本ソフトウェアを取得した場合、新しいバージョンの本ソフトウェアをインストールすることにより、古いバージョンのソフトウェアの使用に関するユーザのライセンスは自動的に終了します。古いバージョンのソフトウェアの一部をアップグレードバージョンに置き換えない場合、古いバージョンのままのソフトウェアの一部も置き換えるか、他の何らかの手段で無効にするか終了させるまで、古いバージョンのライセンスが有効なままとなります。

2.4 Fujitsu Technology Solutions の各ソフトウェアデータシートに規定のない限り、ソフトウェアのバージョンまたはリリースのライセンスで、新しいリリース(アップデート)、新しいバージョン(アップグレード)、またはソフトウェアのテクニカルサポートサービスに対していかなる権利も付与されません。新しいリリースおよび新しいバージョンを含むまたは含まない、補助的なソフトウェアサポート契約および保守サービス、および追加のテクニカルサポートサービスは、直接 Fujitsu Technology Solutions から、または認定ソフトウェア再販業者から、別途購入できます。

3. ダウンロード

ネットワークまたは同様の配布パスを経由して Fujitsu Technology Solutions によって提供されるソフトウェアの場合、以下の追加条件が適用されます。

Fujitsu Technology Solutions からダウンロードにて提供されるすべての製品は、選択し、使用可能にし、第三者から提供される製品の場合は変更なしに提供されます。ただし、ユーザの目的でユーザのシステムにダウンロード可能なマテリアルの最新バージョンおよび有用性の確保については、ユーザが全面的に責任を負うものとします。ユーザの責任でソフトウェアをダウンロードしてください。Fujitsu Technology Solutions は、特に送信エラーやダウンロードプロセ

ス中に発生した問題(回線障害、接続障害、サーバ障害、データ障害など)ではない限り、いかなる賠償責任も負いません。

Fujitsu Technology Solutions の Web サイトは、Fujitsu Technology Solutions が所有する 1 つ以上のオフィスのある国に対してのみ、操作および管理されます。Fujitsu Technology Solutions は、上記以外の国以外の場所で、ソフトウェアおよびドキュメントを Fujitsu Technology Solutions の Web サイトからダウンロードすることについても責任を負いません。国外から Fujitsu Technology Solutions の Web サイトにアクセスする場合、完全に現地の規制に従う責任を負います。Fujitsu Technology Solutions は、ダウンロードが違法とみなされる国において Fujitsu Technology Solutions の Web サイトからソフトウェアおよびドキュメントをダウンロードすることを明示的に禁止します。

4. 著作権

このライセンス条項で明示的にユーザに許可されていない限り、すべての権利とライセンス、およびソフトウェア(ソフトウェアの一部を含む)に関するすべての財産権と使用权は、完全に Fujitsu Technology Solutions およびそのサードパーティライセンスにあります。

本ライセンス条項では、Fujitsu Technology Solutions またはそのサードパーティライセンスのブランド、ロゴ、または商標の使用を許可しません。また、Fujitsu Technology Solutions のブランド、ロゴ、または商標に一見類似する他のいかなるブランドの使用も許可しません。本ソフトウェアまたは Fujitsu Technology Solutions に関するブランド、ロゴ、または商標のいずれにおいても、またいかなる使用においても、Fujitsu Technology Solutions による明示的な許可が必要です。

5. ソフトウェアが再販業者に販売および納品された場合のライセンスの保証および責任の放棄

ソフトウェアを認定再販業者(以下「再販業者」)から直接入手した場合、ソフトウェアをインストールおよび使用する権利は、ライセンスであるユーザと各再販業者の間で交わされた追加のソフトウェアライセンス条件に従属します。

ソフトウェアの認定再販業者から入手したすべての場合において、再販業者により直接、ソフトウェアのサブライセンスが許諾され、ソフトウェアが使用可能になります。この場合、Fujitsu Technology Solutions は、ソフトウェアライセンスの調達が懸念される限り、ソフトウェアライセンスの契約当事者ではありません。そのため、再販業者との契約に基づいてのみ、ソフトウェアライセンスに関

連する法的権利を主張することができます。ただし、いかなる場合においても、ライセンスへのライセンスのそれぞれの範囲がこの契約書の 1、2、3、4 の項に規定されるように、ライセンス契約の範囲を超えることはありません。

強制的な法的規制に従い、特に、エンドユーザのライセンス契約の規制に関して、およびライセンスの再販業者への要求に関して排除できない責任および保証に対して設けられた規制に従い、Fujitsu Technology Solutions はこの契約において、本ソフトウェアのすべての保証を放棄します。

同様に理由で、Fujitsu Technology Solutions は、サードパーティの権利、およびソフトウェアの市場性および特定の目的のためのその適合性の暗黙的な保証を侵害する、すべての責任/要求を放棄します。この責任の放棄は、Fujitsu Technology Solutions による意図的または悪意のある行為の場合は適用されません。

このエンドユーザライセンス契約書において、Fujitsu Technology Solutions はいかなる種類の明示的または暗示的な保証も許可しません。

6. シェアウェア、フリーウェア、およびオープンソースソフトウェアのコンポーネントに関する責任の放棄

6.1 本ソフトウェアには、Fujitsu Technology Solutions がサードパーティから受け取ったフリーウェアまたはシェアウェアが含まれることがあります。Fujitsu Technology Solutions はこのフリーウェアまたはシェアウェアの使用に関するライセンス料を負担していません。したがって、ライセンスにフリーウェアまたはシェアウェアの使用に関するライセンス料が課されることはありません。そのためユーザは、Fujitsu Technology Solutions がこのようなフリーウェアまたはシェアウェアコンポーネントに関する保証を許可しないこと、および各フリーウェアまたはシェアウェアの所有権、配布、使用に関して責任を取らないことを認識したうえで受諾するものとします。

6.2 本ソフトウェアには、「オープンソースモデル」に準拠して開発されたオープンソフトウェアコンポーネント、および GPL (General Public License : <http://www.gnu.org/copyleft/gpl.html>) の契約条件、または頒布時の各オープンソフトウェアコンポーネントに当てはまる、その他の標準オープンソース標準ライセンス条件に基づいて、独占的に配布されるオープンソフトウェアコンポーネントが含まれることがあります。ユーザは、このようなオープンソフトウェアコンポーネントの使用許可は、上記 GPL 条件またはオープンソフトウェアコンポーネントに含まれる他の条件によってのみ規定されることを認識し、これを受諾するものとします。Fujitsu Technology Solutions は、納品されたオープンソフ

トウェアコンポーネントに対してライセンス料もその他のいかなる報酬も受け取りません。Fujitsu Technology Solutions またはサードパーティがオープンソフトウェアコンポーネントに関する報酬を受け取る場合は、追加の納品品目およびサービスに対してのみ代金を受け取ります。

オープンソフトウェアコンポーネントの開発および配布は性質が特殊であるため、Fujitsu Technology Solutions は明示的または暗示的にこのようなコンポーネントの責任を負わず、このようなオープンソフトウェアコンポーネントの、特に仕様抜け、機能不足、プログラミングエラー、その他の機能不良について、いかなる種類の保証も行いません。

7. 責任限定

7.1 Fujitsu Technology Solutions もそのサプライヤも、運用の中断、利益または売上の損失、データの損失、資金の損失の結果およびこれらに関連して発生した派生的または間接的な損害に対して一切の責任を負いません。Fujitsu Technology Solutions およびそのサプライヤは、保証権、契約、不法行為、その他の法理論によりこのような要求が主張される場合を除き、追加の付随的または派生的費用、または本ソフトウェアを保有、販売、使用、または使用できない結果発生したいかなる種類のその他の損失、コストまたは費用に対して責任を負いません。

7.2 契約違反または、強制法規により除外されていない、または完全に除外できない Fujitsu Technology Solutions 側のその他の行為や過失の結果生じた直接的損害に対して Fujitsu Technology Solutions が負う責任は、250,000.00 ユーロ未満に限定されます。直接的損害に対するその他のすべての責任は除外されます。軽度の過失の結果 Fujitsu Technology Solutions によって生じた損害は、適用される法的規制が許す範囲で除外されます。

7.3 本契約による責任の制限や除外は、Fujitsu Technology Solutions が適用される法律に従って強制賠償責任を行使する場合、およびこのような責任を最高額に制限できない場合（人体的損傷に関する責任、製品の責任または不正な誤った情報など）の破損には適用されません。

8. 輸出規制

コンポーネント、およびこれらのコンポーネントの性質や目的により、本ソフトウェアおよび付属するドキュメントの輸出は、正式なまたは規制機関の承認を受けなければなりません。本ソフトウェアが輸出を目的とする場合、すべての関連するすべての輸出規制を順守するために必要なすべての承認および許可を取

得しなければなりません。

本ソフトウェアが、核兵器、化学兵器、生物兵器、ミサイル技術に関連して使用されると考えられる根拠がある場合、本ソフトウェアを輸出できないことがあります。また、適用される米国輸出規制(特に米国商務省の輸出禁止対象者リスト/取引禁止業者リスト(DPL))、E.U. 輸出規制(特にEU テロリストリスト(EU Terrorist List))、またはドイツ輸出当局やその他の任意の国の関係当局が発行した適用される警告に挙げられた企業または個人に対して、本ソフトウェアを納品できない、または間接的に納品できないことがあります。

ドイツ連邦共和国、欧州連合、米国、またはその他の国の適用される輸出規制に違反する場合は、いかなる場合においても、Fujitsu Technology Solutions は、ダウンロード用ソフトウェアを提供するため、またはその他の契約上の義務を果たすために、ソフトウェア、パッチ、アップデート、アップグレードを納品する義務を負いません。

本ソフトウェアまたはその複製を輸出または再輸出する場合、これが適用される輸出法の侵害や、本契約の条項の深刻な侵害にあたる場合があります。

9. その他

9.1 本契約、または本契約の条項および条件に従うその他の契約の条項または条件が(一部またはすべて)無効または法的強制力がないことが判明した場合、残りの条項および条件を遵守することがいづれの契約当事者にとっても不当に困難であることが示されなくても、法的ギャップを埋めるための適用される法規制を適用していても、他のすべての条項や条件の有効性は影響を受けません。

9.2 期限が来てもユーザ/ライセンスがライセンス料を支払わない場合、およびライセンスが重要な条項や条件を遵守しない場合、Fujitsu Technology Solutions はライセンスをキャンセルする権利を有します。このようなキャンセルの場合、ユーザは直ちに所有するソフトウェアのすべての複製を返却し、(ソフトウェアの複製の)完全な返却を確認するか、書面により、これらの複製を破棄したことを確認します。

9.3 ユーザも Fujitsu Technology Solutions も、義務不履行の理由が、不可抗力のため当事者の管理外である場合、各当事者のこのような義務不履行に対して責任を負いません。

9.4 これらのライセンスの条項および条件に対するすべての変更および修正は、書面にて行われた場合のみ有効です。

10. 適用法

10.1 これらのライセンスの条項および条件は、ドイツ共和国の法律によって管理されます。

10.2 10.1 項の規定に法的強制力がない場合、これらのライセンスの条項と条件は、本ソフトウェアを入手する国の法律によって管理されますが、以下の場合は例外とします。1) オーストラリアの場合、このライセンスの条項と条件は業務契約が締結されている国または主権のある領土の法律によって管理されます。2) アルバニア、アメリカ、ペラルーシ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、クロアチア、チェコ共和国、グルジア、ハンガリー、カザフスタン、キルギス、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国(FYROM)、モルダビア、ポーランド、ルーマニア、ロシア、スロバキア、スロバニア、ウクライナおよびユーゴスラビア連邦共和国の場合、このライセンスの条項と条件はドイツ共和国の法律によって管理されます。3) イギリス(グレート・ブリテン) の場合、これらのライセンス条項および条件に関するすべての論争は、英国の法律によって管理され、英国裁判所が独占的な裁判権を持ちます。4) カナダでは、このライセンスの条項と条件は、オンタリオ州の法律によって管理されます。5) アメリカ合衆国、プエルトリコ、中華人民共和国の場合、このライセンスの条項と条件は、アメリカ合衆国ニューヨーク州の法律によって管理されます。
